

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第152集

正 傳 寺 跡

2021

岐阜県文化財保護センター

しょう
正

でん
傳

じ
寺

あと
跡

2021

岐阜県文化財保護センター



発掘区1下段（北から）



出土遺物集合写真



発掘区 2 (南西から)



SB 1-トイレ土層断面 (南西から)



SB 1-トイレ完掘状況 (南西から)



SW 1・SW 2・SW 3・SW 4・SW 5 (南東から)



SW 1・SW 4・SW 6・SW 7 (西から)

序

本巢市は、平成 16 年に本巢町、真正町、糸貫町、根尾村が合併した南北に長い市で、岐阜県南西部に位置します。北部は山岳地帯、南部は濃尾平野の北端にあたり、市域を根尾川と糸貫川が貫流します。また、市の南部に位置する船来山には東海地方最大級の古墳群である船来山古墳群が展開しています。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道建設に伴い、本巢市上保にある正傳寺跡の発掘調査を実施しました。正傳寺跡は、船来山古墳群の展開する郡府山の南斜面に位置する近世から近代にかけての寺院跡です。

今回の調査では、礎石建物 1 棟のほか、溝状遺構、土器埋設遺構、土坑、石垣などを確認し、近世・近代陶磁器を中心に須恵器や中世陶器が出土しました。岐阜県の近世の寺院の様相を検討する上で、貴重な資料を得ることができたと考えられます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、本巢市教育委員会、地元地区の皆様深く感謝申し上げます。

令和 3 年 3 月

岐阜県文化財保護センター

所長 森 勝利

例 言

- 1 本書は、岐阜県本巣市上保に所在する正傳寺跡（岐阜県遺跡番号 21218-11704）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 宇野隆夫帝塚山大学客員教授の指導のもとに、発掘作業は平成 28 年度に、整理等作業は令和元年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は磯貝龍志が行った。ただし、第 3 章は大本直人の所見のもとに磯貝が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 土器付着物 X 線回析分析は株式会社パレオ・ラボ、金属製品保存処理は株式会社イビソクに委託して行い、第 4 章に掲載した。第 4 章第 1 節は磯貝が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
岡本直久、思田知美、金子健一、久保智康、清水幸信、中野晴久、福井中男、
岐阜市教育委員会、弥勒寺、本巣市教育委員会、臨済宗妙心寺派宗務本所
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

序	
例言	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序	12
第2節 遺構の概要	14
第3節 遺物の概要	16
第4節 近世の遺構・遺物	19
第5節 表土・流土・攪乱出土遺物	49
遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図 分割図	
第4章 自然科学分析	
第1節 分析の概要と成果	77
第2節 土器附着物X線回折分析	77
第3節 金属製品材質・成分分析	79
第5章 総括	
第1節 正傳寺の変遷	81
第2節 SB1の構築過程	89
第3節 SB1の構造とSB1正面の空間利用	93
引用・参考文献	97
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1 正傳寺跡位置図……………	1	図 33 SW 1～SW 7 立面図……………	48
図 2 試掘・確認調査坑（遺跡該当範囲内）、 本発掘調査範囲……………	2	図 34 表土・流土出土遺物実測図（1）……………	50
図 3 グリッド設定図……………	3	図 35 表土・流土出土遺物実測図（2）……………	51
図 4 昭和 40（1965）年発掘区周辺宅地図……………	6	図 36 表土・流土出土遺物実測図（3）……………	52
図 5 遺跡周辺の地形分類図……………	7	図 37 表土・流土出土遺物実測図（4）……………	53
図 6 昭和 40（1965）年発掘区周辺宅地図と 条理地割……………	7	図 38 表土・流土出土遺物実測図（5）……………	54
図 7 周辺遺跡位置図……………	11	図 39 表土・流土出土遺物実測図（6）……………	55
図 8 土層柱状図……………	13	図 40 表土・流土出土遺物実測図（7）……………	56
図 9 遺構属性模式図……………	15	図 41 攪乱出土遺物実測図……………	57
図 10 SB 1 礎石検出状況……………	22	図 42 攪乱 A 出土遺物実測図（1）……………	58
図 11 SB 1 根石検出状況……………	23	図 43 攪乱 A 出土遺物実測図（2）……………	59
図 12 SB 1 土層断面図（1）……………	24	図 44 攪乱 A 出土遺物実測図（3）……………	60
図 13 SB 1 土層断面図（2）……………	25	図 45 発掘区全域図 割付図……………	70
図 14 SB 1 土層断面図（3）……………	26	図 46 発掘区全域図 分割図（1）……………	71
図 15 SB 1 土層断面図（4）……………	27	図 47 発掘区全域図 分割図（2）……………	72
図 16 SB 1 土層断面図（5）……………	28	図 48 発掘区全域図 分割図（3）……………	73
図 17 SB 1 礎石据付穴遺構図（1）……………	29	図 49 発掘区全域図 分割図（4）……………	74
図 18 SB 1 礎石据付穴遺構図（2）……………	30	図 50 発掘区全域図 分割図（5）……………	75
図 19 SB 1 礎石据付穴遺構図（3）……………	31	図 51 発掘区全域図 分割図（6）……………	76
図 20 SB 1 礎石据付穴遺構図（4）……………	32	図 52 X線回折分析結果……………	78
図 21 SB 1 礎石据付穴遺構図（5）……………	33	図 53 近世・大正期の本堂・庫裡……………	82
図 22 SB 1 礎石据付穴遺構図（6）……………	34	図 54 妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図……………	83
図 23 SB 1 礎石据付穴遺構図（7）……………	35	図 55 寺籍調査表（1）……………	83
図 24 SB 1 出土遺物実測図……………	36	図 56 寺籍調査表（2）……………	83
図 25 SB 1 トイレ遺構図・出土遺物実測図……………	37	図 57 寺籍調査表（3）……………	84
図 26 基壇 1 遺構図……………	38	図 58 寺籍調査表（4）……………	84
図 27 基壇 1 出土遺物実測図……………	39	図 59 寺籍調査表（5）……………	84
図 28 SD 2・SD 3 遺構図・出土遺物実測図……………	41	図 60 寺籍調査表（6）……………	84
図 29 SD 7 遺構図・出土遺物実測図……………	42	図 61 SB 1 構築過程（1）……………	91
図 30 SJ 1 遺構図・出土遺物実測図……………	43	図 62 SB 1 構築過程（2）……………	92
図 31 SK 3・SK35・SK48 遺構図・出土遺物実測図……………	44	図 63 岐阜県内の近世臨濟宗本堂（1）……………	94
図 32 SW 1～SW 7 平面図……………	47	図 64 岐阜県内の近世臨濟宗本堂（2）……………	95
		図 65 正傳寺本堂兼庫裡（SB 1）……………	96
		図 66 正傳寺跡遺物分布状況……………	96

表目次

表1	正傳寺跡試掘・確認調査結果	2	表15	土器類観察表(2)	65
表2	周辺遺跡一覧表	10	表16	土器類観察表(3)	66
表3	種別遺構検出数	14	表17	土器類観察表(4)	67
表4	出土遺物一覧表	16	表18	土器類観察表(5)	68
表5	礎石建物柱穴一覧表	61	表19	土器類観察表(6)	69
表6	礎石建物一覧表	62	表20	瓦観察表	69
表7	礎石建物基壇一覧表	62	表21	石器・石製品観察表	69
表8	礎石建物トイレー一覧表	62	表22	金属製品観察表	69
表9	基壇一覧表	62	表23	検出鉱物一覧	78
表10	溝状遺構一覧表	62	表24	蛍光X線分析結果	80
表11	土器埋設遺構一覧表	62	表25	正傳寺の仏像に関する記述	85
表12	土坑一覧表	63	表26	正傳寺の創建年代に関する記述	85
表13	石垣・石列一覧表	63	表27	正傳寺の開創由緒に関する記述	85
表14	土器類観察表(1)	64			

挿入写真目次

写真1	調査前風景（東から）	5	写真13	引磐（24）計測位置	80
写真2	表土掘削作業	5	写真14	灰匙（106）計測位置	80
写真3	遺構検出作業	5	写真15	大正期の基壇外装①（北西から）	86
写真4	遺構掘削	5	写真16	大正期の基壇外装②（西から）	86
写真5	遺構測量	5	写真17	大正期の基壇外装③（南から）	86
写真6	宇野隆夫氏による指導	5	写真18	大正期の基壇階段（南東から）	86
写真7	昭和50（1975）年発掘区周辺空中写真 （東が上）	6	写真19	大正期の石組遺構（北から）	86
写真8	SW1西張り出し（北西から）	46	写真20	大正期の棟瓦積遺構（南東から）	86
写真9	SW1西張り出し、SW4張り出し （北東から）	46	写真21	大正期の基壇付属石組遺構（南東から）	86
写真10	甕内面（○は資料採取位置）	78	写真22	大正期の棟瓦積・基壇付属石組遺構 （南西から）	86
写真11	白色物付着状況	78	写真23	1964年発掘区周辺空中写真（北が上）	87
写真12	火箸（23）計測位置	80			

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版 1

発掘区 1 下段 (北から)

出土遺物集合写真

巻頭図版 2

発掘区 2 (南西から)

SB 1-トイレ土層断面 (南西から)

SB 1-トイレ完掘状況 (南西から)

SW 1・SW 2・SW 3・SW 4・SW 5 (南東から)

SW 1・SW 4・SW 6・SW 7 (西から)

巻末図版

図版 1

SB 1 全景 (南西から)

SB 1-基壇外装北西隅部 (南西から)

SB 1-基壇外装北東隅部 (北東から)

SB 1-基壇 C-C'① (北西から)

SB 1-基壇 C-C'② (南東から)

図版 2

SB 1-基壇 C-C'③ (北西から)

SB 1-基壇 C-C'④ (南東から)

SB 1-基壇 H-H'① (南西から)

SB 1-基壇 H-H'② (南西から)

SB 1-基壇 H-H'③ (南西から)

SB 1-基壇 H-H'④ (南西から)

SB 1-基壇 H-H'⑤ (南西から)

SB 1-基壇 H-H'⑥ (北東から)

図版 3

SB 1-基壇 H-H'⑦ (南西から)

SB 1-基壇 H-H'⑧ (北東から)

SB 1-基壇 H-H'⑨ (南西から)

SB 1-基壇 H-H'⑩ (北東から)

SB 1-基壇 H-H'⑪ (北東から)

SB 1-基壇 H-H'⑫ (北東から)

SB 1-基壇 H-H'⑬ (北東から)

基壇写真撮影方向

図版 4

SB 1-P 1 土層断面 (東から)

SB 1-P 2 土層断面 (南から)

SB 1-P 2 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P 3 土層断面 (南西から)

SB 1-P 4 土層断面 (西から)

SB 1-P 4 完掘状況 (南西から)

SB 1-P 5 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P 6 土層断面 (西から)

図版 5

SB 1-P 7 完掘状況 (北東から)

SB 1-P10 土層断面 (北西から)

SB 1-P10 礎石検出状況 (南西から)

SB 1-P10 根石検出状況 (南東から)

SB 1-P12 完掘状況 (北西から)

SB 1-P16 土層断面 (東から)

SB 1-P16 礎石検出状況 (南西から)

SB 1-P16 根石検出状況 (南西から)

図版 6

SB 1-P17 土層断面 (北西から)

SB 1-P17 礎石検出状況 (南西から)

SB 1-P17 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P19 土層断面 (南から)

SB 1-P19 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P20 根石検出状況 (南から)

SB 1-P27 土層断面 (南から)

SB 1-P27 根石検出状況 (南西から)

図版 7

SB 1-P37 土層断面 (南から)

SB 1-P37 礎石検出状況 (南西から)

SB 1-P37 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P38 礎石検出状況 (南西から)

SB 1-P38 根石検出状況 (南西から)

SB 1-P39 土層断面 (南西から)

SB 1-P39 礎石検出状況（北西から）

SB 1-P39 根石検出状況（南西から）

図版 8

SB 1-P40 礎石土層断面（南西から）

SB 1-P40 根石検出状況（南西から）

SB 1-P42 礎石検出状況①（南西から）

SB 1-P42 礎石検出状況②（北西から）

SB 1-P42 根石検出状況（南西から）

SB 1-P43 礎石検出状況（南西から）

SB 1-P43 根石検出状況（南西から）

SB 1-P44 根石検出状況（南西から）

図版 9

基壇 1 検出①（南西から）

基壇 1 検出②（南から）

SJ 1 土層断面（北東から）

SD 3 B-B' 土層断面（南東から）

SD 3 完掘状況①（北西から）

SD 3 完掘状況②（西から）

図版 10

SB 1 出土土器

基壇 1 出土土器

図版 11

SD・SK 出土土器

SB 1-トイレ出土土器①

SB 1-トイレ出土土器②

SJ 1 出土土器

流土出土土器①

図版 12

流土出土土器②

図版 13

表土・流土出土土器

図版 14

表土出土土器

攪乱 A 出土土器①

攪乱 A 出土土器②

攪乱・攪乱 A 出土土器①

図版 15

攪乱・攪乱 A 出土土器②

攪乱 A 出土土器③

表土出土瓦①

図版 16

表土出土瓦②

SB 1 出土金属製品①

攪乱出土土製品

SB 1 出土金属製品②

図版 17

SB 1 出土金属製品③

表土・流土出土金属製品

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

正傳寺跡は、本果市上保守船来山に所在し、本果市と岐阜市にまたがる郡府山の南斜面に位置する(図1)。

東海環状自動車道建設に先立ち、その建設予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「船来山古墳群」(岐阜県遺跡番号21201-2657)が所在することから、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所長(以下「事務所長」という。)からの依頼を受け、平成26年12月から平成27年1月にかけて県教育委員会が試掘・確認調査を実施し、計20箇所を試掘・確認調査坑を設置した(表1、図2)。調査の結果、古墳に関する遺構は確認されなかったが、TP14~19で近世の創建と伝わる正傳寺に関わる石組み等の遺構を確認し、TP14~20で古代から近世の遺物が出土したことから、この範囲が寺院跡であると判断した。これを受けて本果市教育委員会教育長(以下「市教育長」という。)は文化財保護法第97条第1項に基づき岐阜県教育委員会教育長(以下「県教育長」という。)あてに遺跡発見の通知(平成28年1月26日付け本社教第861号)をした。これを受けて、県教育長は市教育長に通知(平成28年2月1日付け社文第57号の2)をし、正傳寺跡(21218-11704)を新規の遺跡として登載した。平成27年11月4日に、岐阜県教育委員会社会教育文化課が開催した平成27年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、開発事業に対する遺跡の取り扱いについて検討し、1,114.7㎡の本発掘調査が必要との意見をまとめた。

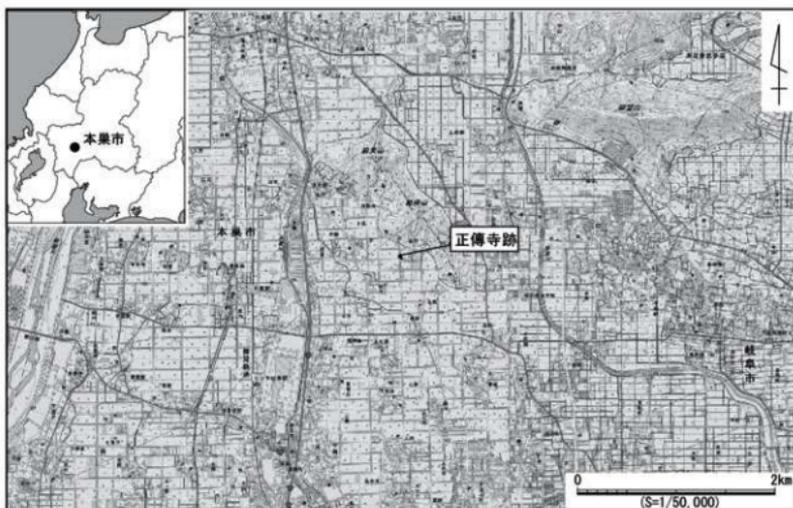


図1 正傳寺跡位置図 (S=1/50,000)

(平成30年度国土院発行の2万5千分1電子地形図「北方」を使用したものである)

2 第1章 調査の経緯

本工事については、文化財保護法94条第1項の規定に基づき、事務所長から県教育長あての発掘の通知（平成28年3月25日付け国部整岐計第246号）が提出され、同条4項の規定に基づき、県教育長は事務所長あて発掘調査の実施を求める勧告（平成28年3月31日付け社文第54号の212）をした。事務所長は、発掘調査の実施を決定すると共に、その実施を県教育長に依頼した。それを受け発掘調査は、岐阜県文化財保護センター（以下、「当センター」という。）が実施し、調査を着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査の報告（平成28年5月20日付け文財セ第91号）を県教育長に提出した。

表1 正傳寺跡試掘・確認調査結果

調査坑No.	検出遺構（基数）	出土遺物（点数）						合計	
		土師器	須恵器	灰輪陶器	中世陶磁器	近世陶磁器	瓦		金属製品
TP14	石組み	20	0	0	1	0	0	0	21
TP15	土坑2、礎石	1	2	0	0	0	0	1	4
TP16	溝2、石組み	1	0	0	0	3	1	0	5
TP17	石組み	5	0	0	0	1	0	0	6
TP18	石組み	1	0	0	0	0	0	0	1
TP19	溝1、石組み	14	0	0	0	2	0	0	16
TP20	なし	2	0	0	0	3	0	0	5
合計	土坑2、溝3、礎石1、石組み5	44	2	0	1	9	1	1	58



図2 試掘・確認調査坑（遺跡該当範囲内）、本発掘調査範囲

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘作業は、平成 28 年度に 1,114.7m²を実施した。排土処理方法の都合から、発掘区の西側を発掘区 1、東側を発掘区 2 とし、発掘区 1 は北側の一段高い平坦面を上段、南側の一段低い平坦面を下段とした (図 3)。発掘区 1 下段と発掘区 2 では反転調査を行った。調査グリッドは、世界測地系座標の X=58925、Y=43660 を基準に 100m×100m の大グリッドを設定し、その中に 5m×5m の小区画を設け、北から南へ A から T、西から東へ 1 から 20 とした。そのため、発掘区の北西隅のグリッドは F10、南東隅のグリッドは Q14 となる。

現況地形測量は立木の伐採後に実施した。表土掘削は重機を用いて行い、遺物包含層掘削、遺構検

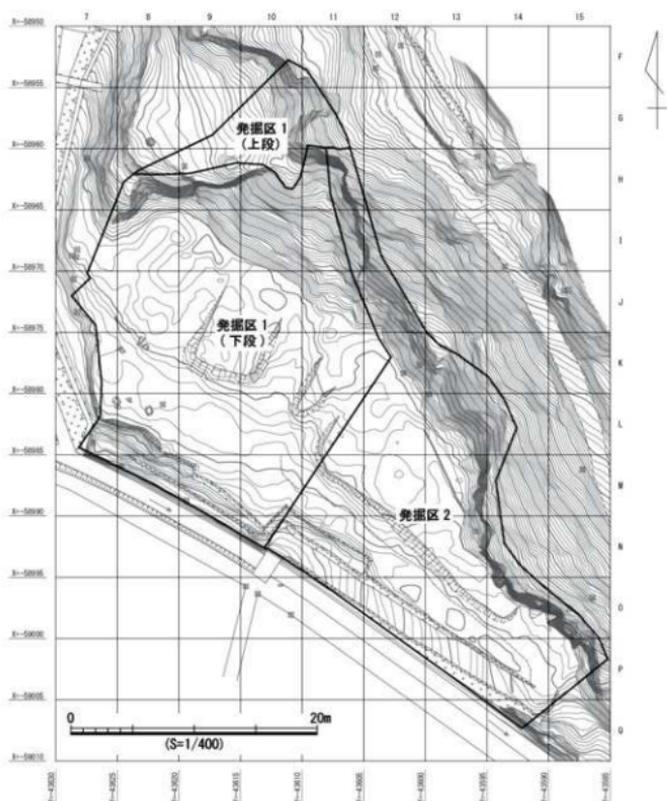


図3 グリッド設定図

出、遺構掘削はスコップ、草刈り鎌、移植ゴテ等を用いて人力で行った。遺構埋土は半載又は4分割して土層堆積状況などの必要な記録を作成した後に完掘した。基壇は東西方向と南北方向に部分的にトレンチを設定して掘削し、土層堆積状況の記録を作成した。また、遺構基盤層と遺構埋土の識別が困難な場合は、必要最低限のサブトレンチを設定し、両者の識別を明確にした上で、遺構埋土を掘削した。検出した遺構は、原則として検出順に通番を付し、整理等作業時に遺構種別ごとに番号を振り替えた。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、断面図は手測り測量にて実施した。写真撮影は35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、6×4.5cm判フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。また、発掘区全体の景観写真撮影は、高所作業車を使用し撮影した。また、発掘区内の斜面地については、崖崩れの危険性があるため掘削は行わなかったが、発掘区南辺の石垣は清掃後、デジタル測量で実測図を作成し、写真撮影した。

遺物包含層掘削及び遺構検出時に出土した遺物は、層位・グリッド単位で取り上げた。遺構出土遺物は、半載前後で取り上げ方法を変えた。半載前は検出面から約5cmまでをa層、約5cm～10cmをb層というように遺構内を概ね5cm単位の人工層位で取り上げ、半載後は分層した層位ごとに取り上げた。遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土状況図を作成した。また、遺物は原則として全点の原位置をデジタル測量により記録した。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁とSD（遺跡名略号）」「出土場所（遺構番号又はグリッド番号）」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。

2 調査の経過

現地での調査経過は以下のとおりである。

- 第1週（5/9～15）現況地形測量実施（5/9）。クレーン車により重機を発掘区内に搬入（5/10）。発掘区内に散乱・堆積する産業廃棄物を重機と人力により回収（5/10・11）。調査員事務所設置（5/12）。斜面地と石垣の草刈り実施（5/12・13）。
- 第2週（5/16～22）発掘区1上段の表土掘削実施、グリッド杭打設、壁面整形実施（5/16）。発掘区1下段の表土掘削、グリッド杭打設実施（5/16・17）。発掘区1上段の包含層掘削・遺構検出実施（5/19・20）。
- 第3週（5/23～29）ベルトコンベア搬入、発掘区1下段で包含層掘削、遺構検出実施、遺構掘削開始（5/23）。I8グリッドで寛永通宝（107）出土（5/24）。I8からJ8グリッドで大正時代に拡張した基壇の石垣検出（5/25）。SB1-便所検出（5/27）。
- 第4週（5/30～6/5）J8グリッドでSB1-基壇西端検出（6/1）。J10グリッドで大正時代に建て替えた建物の礎石検出（6/3）。
- 第5週（6/6～12）遺構時期の検討及び発掘作業の方針の検討を目的とした発掘調査検討委員会を現地で開催（6/7）。SB1-便所掘削（6/8）。
- 第6週（6/13～19）大正時代に拡張した基壇写真撮影、K11グリッドでSB1-基壇東端検出（6/15）。
- 第7週（6/20～26）宇野隆夫氏（帝塚山大学教授）現地指導（6/20）。発掘区1景観撮影実施（6/23）。

発掘区1上段の埋め戻し実施 (6/24)。

第8週 (6/27～7/3) SB1-基壇トレンチ掘削・礎石解体開始 (6/27)。

第9週 (7/4～10) SB1-基壇トレンチ掘削・礎石解体完了、発掘区南辺石垣清掃開始 (7/4)。発掘区2の表土掘削開始 (7/5)。発掘区1下段の埋戻し開始 (7/7)。

第10週 (7/11～17) 発掘区2表土掘削完了、発掘区1下段埋戻し完了、発掘区南辺石垣 (SW1からSW6) 写真撮影 (7/12)。

第11週 (7/18～24) 基壇1、SD3検出 (7/19)。

第12週 (7/25～31) SJ1掘削 (7/29)。

第13週 (8/1～7) 発掘区2景観撮影実施 (8/3)。

第14週 (8/8～18) 発掘区2埋戻し完了 (8/18)。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成28年度に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は令和元年度に当センターにおいて実施した。令和元年6月20日に岡本直久氏、金子健一氏(瀬戸市埋蔵文化財センター)に近世・近代陶磁器に関する指導を受けた。また、令和元年9月2日に宇野隆夫氏(帝塚山大学)に調査成果全体についての指導を受けた。

平成28年度に出土陶器付着物のX線回折分析、令和元年度に出土金属製品の保存処理を実施した。

3 調査体制

発掘調査の体制は以下のとおりである。

センター所長	羽田能崇 (平成28年度)、小林法良 (令和元年度)
総務課長	二宮隆 (平成28年度)、加藤武裕 (令和元年度)
調査課長	春日井恒 (平成28年度、令和元年度)
調査担当係長	河合洋尚 (平成28年度)、鷺見博史 (令和元年度)
担当調査職員	大本直人 (平成28年度)、磯貝龍志 (令和元年度)



写真1 調査前風景 (東から)



写真2 表土掘削作業



写真3 遺構検出作業



写真4 遺構掘削



写真5 遺構測量



写真6 宇野隆夫氏による指導

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡が所在する本巣市は、平成16年に本巣町・真正町・糸貫町・根尾村が合併して誕生した市で、濃尾平野の北端に位置する。本巣市から岐阜市にまたがる船来山（標高116.5m）と郡府山（標高110.0m）から成る独立丘陵全体は「船来山」と呼称されており¹⁾、当遺跡は郡府山の南斜面に設けられた平坦面上に立地する。大正時代に建て替えられ、建物が残存していたが、昭和51（1976）年の土砂災害により消失したとされる（写真7、図4）²⁾。遺跡の南側には旧本巣町山口付近を扇頂として、根尾川によって形成された扇状地が広がる³⁾。この扇状地には、旧河道や後背湿地が残されており、幾度も流路変更があったことが窺える（図5）。また、旧本巣町の山口付近以南については、条里地割が広く展開する地域として著名である⁴⁾。当遺跡周辺にも、昭和40年代の圃場整備事業前までは条里地割が残存していた（図6）⁵⁾。

注

- 1) 財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所2007『船来山古墳群』（財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第16集）
- 2) 遺跡周辺の住民への聞き取り調査によると、9.12豪雨災害の際に起こった土砂災害により消失したとのことである。
- 3) 高橋常義1982『糸貫川廢川史』、本巣郡総合開発公社
- 4) 大野町教育委員会2011『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書条里編・解説編』（大野町文化財調査報告書第6集）
- 5) 図6の地図は、表層で確認できる条里型地割を赤線で表記した。その地割を基に109mの条里推定線を破線で表記した。



写真7 昭和50(1975)年発掘区周辺空中写真(東が上)
(国土地理院撮影の空中写真CB753-C8-5(1975年撮影)、三角が交差する位置が正徳寺)



図4 昭和40(1965)年発掘区周辺宅地図
(国土地理院発行の2千5百分1国土基本図VII-CC-9-3
を使用したものである)

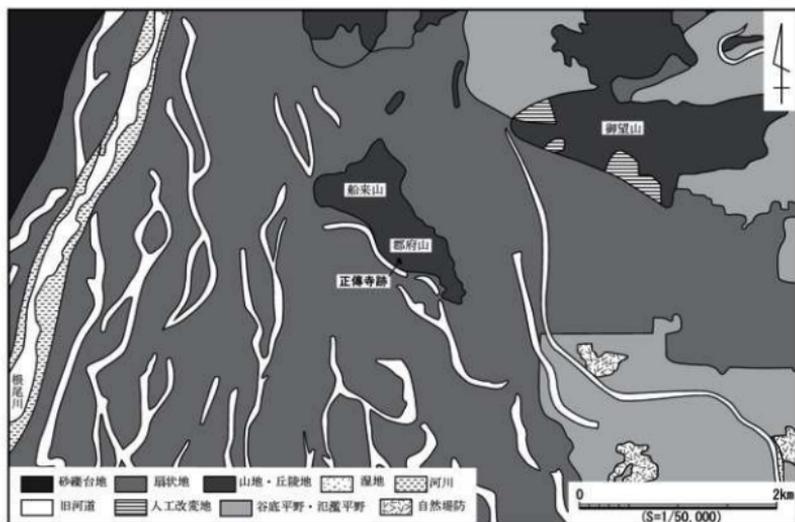


図5 遺跡周辺の地形分類図
(岐阜県企画部 1983『岐阜県土地分類基本調査 大垣』を基に作成したものである)

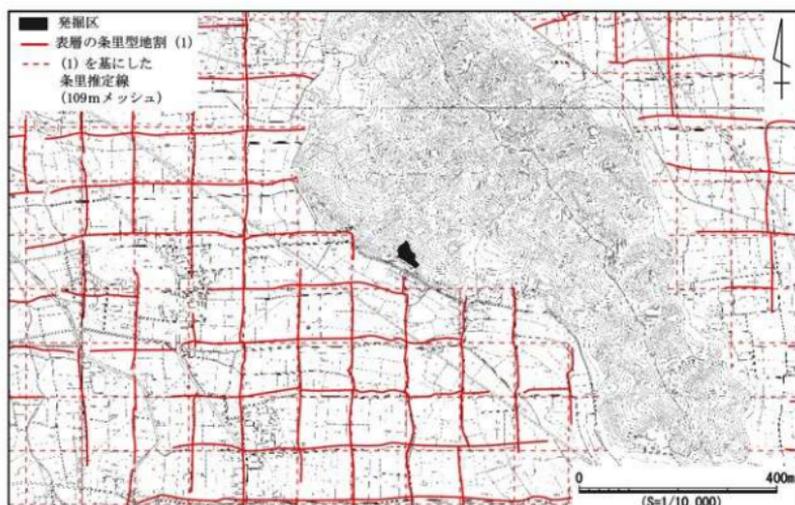


図6 昭和40(1965)年発掘区周辺宅地図と条里地割
(国土地理院発行の2千5百分1国土基本図Ⅶ-LC99-3、Ⅶ-LC-99-4に大野町教育委員会2011の218、219頁の内容を追加したものである)

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、縄文時代から近世にかけて遺跡が多数分布する。表2・図7は、『改訂版岐阜県遺跡地図』(岐阜県教育委員会2007)を基に、遺跡の種類・時代等に関する新たな成果を踏まえて作成した。以下に発掘調査の成果を中心に遺跡の概要を述べる¹⁾。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表2、図7の番号と一致する。

旧石器時代 船来山古墳群(33)では、細石刃が採集されている。

縄文時代 御望A遺跡(35)では、平成3年から平成5年にかけて岐阜市教育委員会が、平成28年度に当センターが発掘調査を実施し、前期の竪穴建物11軒、中期の竪穴建物3軒を検出した。旧糸貫町教育委員会が実施した船来山古墳群(33)富右柿の里地点の発掘調査では、早期の押型文土器や石器が出土している。また、同山麓にある弥勒寺遺跡(39)では、草創期の尖頭器、石織等の石器が採集されている。

弥生時代 御望A遺跡では、岐阜市教育委員会が発掘調査で竪穴建物1軒を検出し、弥生時代後期山中式頃に比定される土器片が出土している。また、当センターが実施した発掘調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物を5軒検出した。下西郷一本松遺跡(62)では、財団法人岐阜市教育文化振興事業団が平成11年度に実施した発掘調査で後期の竪穴建物、土坑等が検出され、甕、壺、高坏、器台などが出土している。船来山古墳群では、船来山中腹に弥生時代後期・終末期の方形周溝墓1基を検出し、その遺構に伴って廻間I式初頭併行期の器台、鉢等の供献土器が出土している。

古墳時代 当遺跡が位置する船来山には古墳時代初頭から終末期に至るまで連続と古墳が築造されており、船来山古墳群(33)として知られる。現在約290基の古墳が確認されており、墳形や石室型には多様性が見られる。出土遺物には、青銅鏡をはじめ、甲冑、刀剣類や鉄鏃などの武器、鉄斧や鋤鎌先などの農具、ガラス玉や管玉などの玉類及び耳環といった装身具、土師器や須恵器などの土器がある。また、大平山や御望山といった丘陵地や船来山周辺の平地にも古墳が築かれており、八幡神社裏山古墳(5)や宝珠古墳(13)といった前期古墳や、宇田古墳群(19)、大塚古墳群(31)、御望古墳群(32)のような後期を中心とした古墳群が存在する。

古代 当遺跡周辺には『続日本紀』中に和銅8(715)年に新羅系の渡来人を入植させ、本巣郡から分かれて建郡された席田郡があったとされる。席田郡府遺跡(58)の中には、『日本三代実録』中に仁和3(887)年に火災で国分寺・国分尼寺が焼失した際に、一時期国分尼寺の機能を移した寺院に比定される席田廃寺跡(59)と、席田郡家推定地(60)がある。席田郡家推定地では、本巣市教育委員会が平成25年度に実施した発掘調査で奈良時代から平安時代の竪穴建物を複数検出し、須恵器や灰陶陶器、土師器が出土している。席田廃寺跡や席田郡家推定地、席田郡府遺跡(58)の東側では須恵器、灰陶陶器等が多数確認されており、公的機能を含む遺跡群に集落跡が隣接していた可能性がある。弥勒寺遺跡・弥勒寺跡(39)では、須恵器や川原寺式の瓦が確認されている。春稻神社遺跡(38)は、元慶元(877)年に陽成天皇即位の大嘗会のための悠紀²⁾として卜定されたとされ、須恵器・灰陶陶器、山茶碗等の中世陶器が採集されている。

中世 当遺跡周辺においては席田荘、春近荘、真桑荘といった荘園が平安時代終わりごろから形成されたとされる。また国衙領として見延、隋原、春近、三橋、上真桑が知られる。当遺跡の南に位置す

る上保本郷遺跡(47)では平成27年度から29年度にかけて当センターが本発掘調査を実施し、掘立柱建物、大溝、鍛冶関連遺構や山茶碗、古瀬戸、大甕、中国産磁器等の中世陶磁器が確認されている。当遺跡が位置する船来山には舟木城跡(41)があり、山頂や尾根に堀切や平場が確認されている。

近世 大平山の南には加納藩主戸田丹波守光永の次弟光正が置いた文殊陣屋跡(4)がある。また、当遺跡の周辺には春稻神社遺跡(38)、弥勒寺遺跡・弥勒寺跡(39)、上保本郷遺跡(47)等、複数の近世の遺物散布地がある。当遺跡と同様に船来山の南側斜面に位置する白山西洞古墓(40)では本県市教育委員会が平成19年度から23年度にかけて実施した遺跡分布調査の際に近世瓦が確認されている。

注

1)各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

糸貫町 1981『糸貫町史 通史編』

本県市教育委員会 2016『本県市詳細遺跡分布調査報告書 改訂』

本県市教育委員会 2017『本県市船来山古墳群総括報告書 本文編』

岐阜市教育委員会 1994『御望遺跡』

財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2000『下西郷一本松遺跡』

岐阜市教育委員会 1996『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

岐阜県文化財保護センター2015『上保本郷遺跡現地見学会資料』

岐阜県文化財保護センター2016『上保本郷遺跡現地見学会資料』

岐阜県文化財保護センター2017『上保本郷遺跡現地見学会資料』

岐阜県文化財保護センター2020『御望A遺跡』

2) 悠紀は、即位後に天皇が初めて行う大嘗会(トコノミ)のとき、神事に用いる新穀・酒料を奉るよう卜定された国都のうち、第一の地を指した。

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	正傳寺跡	社寺跡	中世・近世
2	西ノ門古墳群	古墳	古墳
3	文殊庵寺跡	散布地	古代
4	文殊陣屋跡	城館跡	中世・近世
5	八幡神社裏山古墳	古墳	古墳
6	文武武備遺跡	散布地	古墳～近世
7	文殊古墳	古墳	古墳
8	文殊西ノ門遺跡	散布地	弥生～近世
9	文殊中山洞遺跡	散布地	弥生～近世
10	宝珠古墳群	散布地・古墳	古墳
11	中山窟跡	生産遺跡	古代
12	上新村遺跡	散布地	古代
13	宝珠古墳	古墳	古墳
14	下新村遺跡	散布地	弥生
15	則松遺跡	散布地	古代
16	則松第1古墳群	古墳	古墳
17	則松第2古墳群	古墳	古墳
18	宇田遺跡	散布地	古墳・古代
19	宇田古墳群	古墳	古墳
20	文殊南当門遺跡	散布地	弥生～近世
21	山西1号古墳	古墳	古墳
22	山西2号古墳	古墳	古墳
23	文殊明音寺遺跡	散布地	古墳～近世
24	明音寺古墳群	古墳	古墳
25	上西郷A遺跡	散布地	古代・中世
26	曾井中島中川原遺跡	散布地	弥生～近世
27	長屋神社遺跡	散布地	古代～近世
28	長屋神下路遺跡	散布地	弥生～近世
29	上西郷B遺跡	散布地	古代
30	大塚遺跡	散布地	縄文・弥生
31	大塚古墳群	古墳	古墳
32	御望古墳群	古墳	古墳
33	船来山古墳群	古墳・その他の墓・散布地	古墳
34	上西郷C遺跡	散布地	古代・中世
35	御望A遺跡	集落跡・散布地	縄文～近世
36	御望B遺跡	散布地	中世
37	御望C遺跡	散布地	中世
38	春稻神社遺跡	散布地	古墳～近世

番号	遺跡名	種別	時代
39	弥勒寺遺跡(弥勒寺跡)	散布地・社寺跡	縄文～近世
40	白山西洞古墓	その他の墓	中世
41	舟木城跡	宮衙跡	中世
42	中西郷A遺跡	散布地	古代・中世
43	中西郷B遺跡	散布地	古代
44	中西郷C遺跡	散布地	古代
45	中西郷中遺跡	散布地	古代・中世
46	神王神社遺跡	散布地	弥生～近世
47	上保本郷遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡	弥生～近世
48	上保岩坪1号古墳	古墳	古墳
49	上保岩坪2号古墳	古墳	古墳
50	元正寺遺跡	散布地	弥生～近世
51	小野B遺跡	散布地	古代・中世
52	小西郷遺跡	散布地	古代・中世
53	下西郷D遺跡	散布地	古代・中世
54	下西郷A遺跡	散布地	古代・中世
55	下西郷B遺跡	散布地	古代
56	三橋上瀬古遺跡	散布地	弥生～近世
57	三橋東瀬古遺跡	散布地	古墳～古代
58	席田郡府遺跡	散布地	縄文～近世
59	席田庵寺跡	社寺跡	古代
60	席田郡家推定地	散布地	縄文～近世
61	小西郷鶴木遺跡	散布地	弥生～近世
62	下西郷一本松遺跡	散布地・集落跡	弥生～古代
63	法暎寺遺跡	散布地	弥生～近世
64	且内薬師寺遺跡	散布地	古代～近世
65	且内諾木前遺跡	散布地	弥生～近世
66	敦念寺遺跡	散布地	縄文～近世
67	高塚遺跡	散布地	古代・中世
68	仏生寺貴船神社遺跡	散布地	弥生～近世
69	仏生寺上光寺遺跡	散布地	弥生～近世
70	西改田村前遺跡	散布地	古代・中世
71	西改田宮西遺跡	散布地	中世
72	上尻毛高田遺跡	集落跡・官衙跡 田地	古墳～中世
73	上尻毛八幡遺跡	散布地	古代・中世
74	東山道跡	その他の遺跡	古代



図7 周辺遺跡位置図

(平成30年国土地理院発行の2万5千分1電子地形図「北方」を使用したものである)

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

当寺院跡は、近世に創建された後、大正期に基壇を拡張しての建て替えがあり、昭和51(1976)年の土砂災害により廃絶した。現状は山林で、腐葉土が堆積するとともに、瓦や生活用具が散乱していた。こうした状況や平成26年度に県教育委員会が実施した試掘・確認調査や今回の本発掘調査の結果から、基本層序を以下のように設定した(図8)。

I層 表土 (10YR5/2 灰黄褐色土)

昭和51(1976)年の土砂災害後に堆積した腐葉土である。近世から近代の遺物を含む。発掘区全域で確認したが、発掘区1(下段)と発掘区2では重機により多量の瓦を撤去する際に大部分を掘削したため、土層断面を図化することが出来なかった。

II層 流土 (10YR3/3 暗褐色土、10YR3/4 暗褐色土、10YR4/3 にぶい黄褐色土、10YR4/4 褐色土、10YR4/6 褐色土、10YR5/4 にぶい黄褐色土、10YR5/8 黄褐色土)

昭和51年の土砂災害時やその後に堆積した流土で、複数回にわたって堆積する。古代から近代の遺物を含む。発掘区全域で確認した。

III層 自然堆積土 (10YR3/4 暗褐色土、10YR2/3 黒褐色土、10YR5/4 にぶい黄褐色土、10YR5/6 黄褐色土)

近世の創建以前に丘陵の斜面に沿って堆積した土である。発掘区1(下段)で確認した。この土層の上面で遺構検出を行った。

IV層 基盤層 (10YR6/4 にぶい黄橙色岩盤、10YR8/1 灰白色岩盤、10YR5/6 黄橙色岩盤)

堆積した土の底面で風化した軟質の岩盤を確認し、これを基盤層とした。III層が確認できない範囲では、この上面で遺構検出を行った。

今回の発掘区では、III層若しくはIV層の上面で遺構を検出した。SB1の基壇の一部はIII層上面に築かれる。そのため、SB1に関係する遺構の検出面はいずれも「III層上面」とした。ただし、後世に増築された可能性のあるSB1-トイレの検出面のみは「II層基底面」とした。それ以外の遺構は、発掘作業時に遺構の検出面を明確に区別していなかったため、いずれも検出面を「II層基底面」として示した。また、今回は近世以前の遺構を調査対象としたため、大正期に拡張された基壇の上面で検出した掘り込みの内、発掘作業時に遺構として図化したものは、整理等作業時に攪乱と判断して発掘区全域図分割図(第3章)においてグレーで表示した。

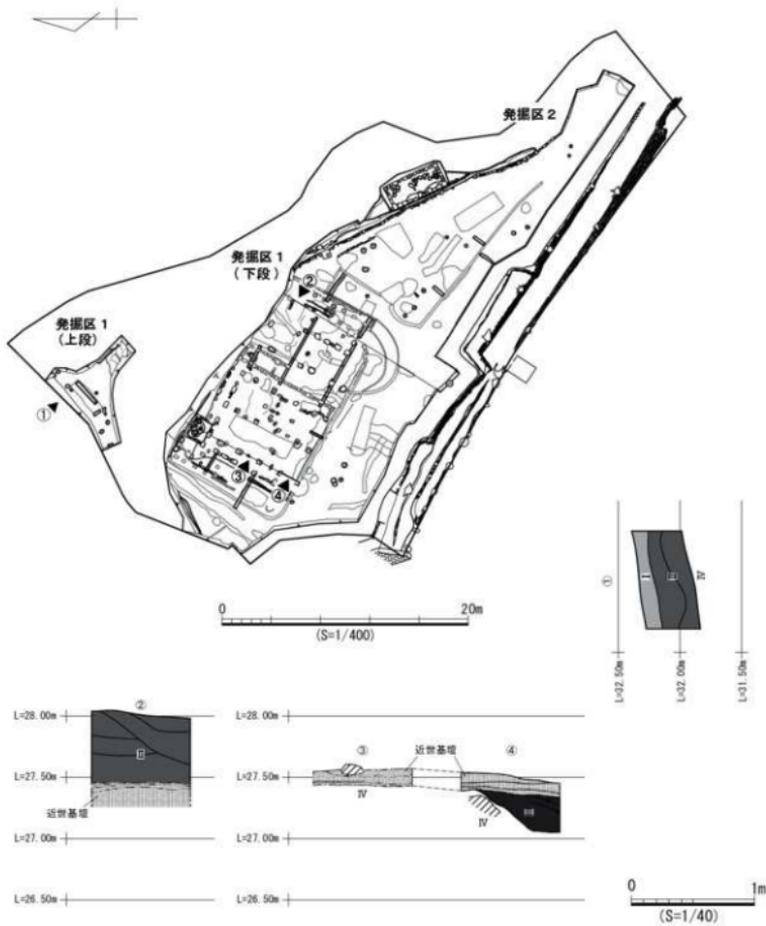


図8 土層柱状図

第2節 遺構の概要

1 概要

今回の調査では、近世の遺構を検出した。検出した遺構数は表3のとおりである。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断したが、時期不明なものも多い。また、出土遺物が複数の時期にまたがる場合は原則として新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、これらの遺構のうち、礎石建物や基壇、石垣は寺院跡としての性格を反映すると考えられることから、すべてを報告した。溝状遺構や土坑などは検出数が多いため、遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、遺物が出土した遺構を抽出して報告した。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合前の破片数を示す。

表3 種別遺構検出数

検出面	SB	基壇	SD	SJ	SK	SW	合計
Ⅲ層上面	1	0	0	0	0	0	1
Ⅱ層基底面	0	1	7	1	61	6	76
合計	1	1	7	1	61	6	77

2 遺構略号

今回の調査で確認した遺構の略号は、以下のとおりである。

SB：礎石建物、基壇、SD：溝状遺構、SJ：土器埋設遺構、SK：土坑、SW：石垣・石列
礎石建物を構成する礎石は、「SB●-P●」のように付属する礎石建物の番号を先頭に記し、続けて通し番号を付与した。

SB-基壇：礎石建物基壇、SB-硬化面：礎石建物硬化面、SB-P●：礎石建物礎石、

SB-トイレ：礎石建物トイレ

3 遺構の分類

各遺構の形状や規模、構造から、以下のように遺構の分類基準を設定した。

礎石建物 向かい合う2辺以上が確認できる、規則的に並んだ柱穴・礎石・礎石抜取穴に構成され上屋構造を有すると推定できるもの。

礎石建物基壇及び基壇 土を突き固めて盛った土壇の側面を石垣及び石列で外装したもの。

礎石建物硬化面 建物に関連すると考えられる硬化範囲。

礎石建物礎石 上屋を支える柱を設置する礎石と考えられるものや礎石掘付穴及び礎石抜取穴。

礎石建物トイレ 礎石建物に付属する石列に囲まれた掘り込みに、大型の土器が埋設されたもののうち、土器の内容物の自然科学分析の結果から、土器が便器として用いられたと考えられるもの。

溝状遺構 地面を掘りくぼめた遺構の内、上端の短軸に対して長軸が5倍以上あるもの。ただし、5倍未満のものでも他の溝と連続している可能性のあるものは溝とする。

土器埋設遺構 掘り込みに人為的に土器が埋設されているもの。

土坑 掘り込みが確認でき、その他の性格が特定できなかったもの。

石垣・石列 人為的に石を積み上げた若しくは並べたと判断できるもの。

4 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

遺構番号 掲載番号は種別と通番で表示した。

地区割 南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表示した。

検出面 基本層序の層位名を使用し、Ⅲ層上面で検出した遺構は「Ⅲ上」とし、Ⅱ層基底面で検出した遺構は、「Ⅱ基」と表記した。

規模 () は残存長を示す。

平面形・底面形 以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

a-円形、b-方形、c-不定形、d-不明

断面形・堆積状況 図9の分類に基づき記載した。

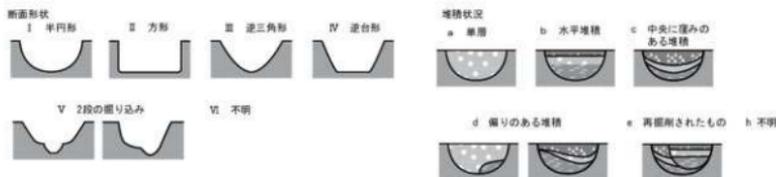


図9 遺構属性模式図

重複関係 「新>古」の関係を示す。

出土遺物 以下のとおり、記号化して表記した。

H-弥生土器・土師器、D-瓦、P-須恵器、Y-山茶碗、T-その他の陶磁器、
S-石器・石製品、I-金属製品

第3節 遺物の概要

1 概要

今回の調査では、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器といった土器類、瓦、石器・石製品、金属製品が出土した。その出土数は表4のとおりである。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

表4 出土遺物一覧表

大別	種別・器種	接合前 破片数	接合後 破片数	接合後 破片数 割合	質量 (g)	質量 割合	
土器類	土師器	皿	661	641	34.9%	1,128.8	1.3%
		ホウロク	2	2	0.1%	7.9	0.0%
		その他	13	13	0.7%	64.0	0.1%
	須恵器	—	52	2.8%	1,150.1	1.3%	
	陶磁器	山茶碗	—	23	1.0%	175.3	0.2%
		近世	864	485	26.4%	59,003.8	66.6%
		近代	385	292	15.9%	8,088.4	9.1%
		近世・近代	570	335	18.2%	18,995.0	21.4%
		小計	2,575	1,838	100.0%	88,613.3	100.0%
	瓦	—	26	26	—	16,108.0	—
石製品	—	10	10	—	26,871.5	—	
金属製品	—	102	102	—	2,618.6	—	
合計		2,713	1,976	—	134,211.4	—	

①土器類

出土した土器類の種別ごとの点数は、表4のとおりである。年代観や器種分類は、既存の研究に従った¹⁾。陶磁器について、近世か近代かを判断出来ないものは、近世・近代として数量を示した。また、今回は近世の寺院跡を調査対象としたため、発掘作業時に近代以降と判断した遺物は取り上げていない。取り上げた土器の中では近世陶磁器が中心である。中期から後期まで認められ、特に後期が多い。中世以前の遺物はわずかだが、土師器や須恵器が一定量出土している。当遺跡は船来山古墳群のある郡府山に位置しており、元は古墳に伴っていた可能性がある。

②石器類

砥石、墓石、五輪塔の空風輪等10点が出土した。このうち、近世の遺物の可能性があるものを図化した。

③金属製品

近世・近代の金属製品が102点出土した。釘や鋸、火箸といった鉄製品、古銭や火箸、引轆といった銅製品、灰匙といった真鍮製品が見られる。このうち、近世の遺物の可能性があるものを図化した。

④土製品

発掘作業を開始する以前、当寺院跡には多量の瓦が散乱している状況であった。軒瓦や道具瓦のなかでも残存状態が良好なものを持ち帰り図化した。

2 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、種別ごとに作成し、遺物番号順に記載した。なお、種別により一覧表の項目は一部異なる。

出土位置 複数の地区（グリッド）や遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を表記した。表土と流土から出土した場合は、基本層序名（Ⅰ・Ⅱ）を表記した。また、遺構出土の場合、人工層位又は遺構層位を表記した。Ⅰ・Ⅱ層から出土したものの内、グリッド杭打設以前に取り上げたものは出土区。グリッドを示していない。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

大きさ （ ）は復元長を示す。

口縁部残存率 $X/12$ のXにあたる数値を記載した²⁾。

胎土 肉眼観察により、粗密や含有物を判断し、記載した。

焼成 肉眼観察により判断し、記載した。

色調 「新版標準土色帖」³⁾に基づき肉眼観察で判断し、記載した。

器面調整 摩滅等により不明な場合は「不明」と記載した。

分類・時期 既存の研究に従った。近世陶磁器のうち瀬戸産のものは「登窯第●小期」、美濃産のものは「連房●期」と示した。なお、瀬戸産か美濃産か区別のつかないものは「登窯第●小期」と示した。

注

- 1) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。近世・近代陶磁器は愛知学院大学非常勤講師の中野晴久氏、公益財団法人瀬戸市文化振興財団文化財センターの岡本直久氏と金子健一氏からご指導をいただいた。ただし、文責は筆者にある。

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系

愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史』別冊 窯業3 中世・近世 常滑系

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別冊 窯業1 古代 猿投系

岡本直久 2019「江戸時代の下品野村窯業 一室町D窯跡立会調査出土史料から」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第21号、瀬戸市埋蔵文化財センター

小野本学 2015「五輪塔（火輪）の製作工程の検討」、『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第1号

金子謙一 1996「尾張・三河地方の近世瓦質煮炊具」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

金子謙一 1996「瓦質煮炊具の分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

金子謙一 1996「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

金子謙一 1996「ホウロクの分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

金子謙一 1996「尾張・三河地方の近世陶器煮炊具」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

金子謙一 1996「近世陶器煮炊具の分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

小林謙一 1991「江戸における近世瓦質・土師質坩堝について」『江戸在地系土器の研究』Ⅰ、江戸在地系土器研究会

惟村忠志 2004「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査の成果」『墓と葬送の江戸時代』、江戸道跡研究会

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』

瀬戸市教育委員会 1990『尾呂一愛知瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史』陶磁史編六

瀬戸市歴史民俗資料館 2002『大正2年のせともの屋』

中野晴久 1987 「常滑焼き大甕の偏年的研究ノート」『研究紀要』Ⅱ、常滑市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1987 「付篇 本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ、瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1988 「本業焼の研究（2） — 赤津村・上水野村を中心に —」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ、瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1989 「本業焼の研究（3） — 下品野村・下半田川村を中心に —」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ、瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター

- 2) 口縁部残存率の計測は以下の文献を参考とし、12分の1未満の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。

宇野隆夫1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館

- 3) 小山正忠、竹原秀雄2014 『新版標準土色帖』、日本色研事業株式会社

第4節 近世の遺構・遺物

1 礎石建物

SB1 (図10~25)

検出状況 I 8~L11グリッド、Ⅲ層上面で検出した、本堂と庫裡として使用された建物である。この建物は、大正期に建て替えられており¹⁾、掘り込みや礎石、石積みが近世以前のものか近代以降のものかの識別が困難であった。そのため、南北方向に5本(A-A'断面~E-E'断面)、東西方向に4本(F-F'断面~I-I'断面)の土層観察用畦を随時設定し、堆積状況を確認しながら調査を進めた。西側から南西隅にかけてと北側の一部、北東隅付近では基壇外装が残存していたが、その他の範囲は大正期の建て替えの際に抜き取られた可能性がある。基壇上面においても複数の攪乱を確認し、近代以降に削平を受けたことが分かる。

基壇 堆積状況と残存する基壇外装から近世の基壇の範囲を推定したのが図10、図11の赤線である。平面形はおおよそ東西に長い長方形で、長軸長約16m、短軸長約9.4m、高さ0.3mであるが、庫裡のある範囲の北側では、南北に1m程狭い。

基壇と基壇層の間には、旧表土が認められず、整地が行われた際に削平されたと考える。掘込地業は認められず、基本的には整地の際に削り出した岩盤(119~120層)の上に盛土基壇を構築する。ただし、南側の一部では基壇の下に斜面に沿った堆積(114~118層)が認められる。この範囲では、整地の際に岩盤までは掘り込まず、もとの山の斜面に堆積した土層の上面を平坦に削り出した上に基壇を築く。土層の堆積状況から4層~7層、10層、12層~29層、31層~49層は大正期に拡張された基壇に伴うもの、53層~113層は近世の基壇に伴うものと判断した。また、G-G'断面とI-I'断面のおおよそ庫裡があった範囲では、厚みのある106~113層が認められる。この範囲は山の傾斜に沿って低くなっているため、岩盤を削り出した範囲の高さに揃うように厚さ15cm~30cm程の盛土を行ったと推定される。その上に堆積する近世の基壇に伴う土層(53層、55層~58層、60層、61層、63層、64層、66層、68層、69層、75層、76層、83層、84層、88層~105層)は、厚さ2cm~10cmほどの薄い互層状の堆積が認められ、硬くしめることから版築がなされたことが分かる。一方で、最も山側で標高の高いF-F'断面ではほとんどの範囲が55層のみであった。版築土には基本的に粘性が認められないが、粘性のある土層(90層、101層)は粘性のない土層に挟まれて堆積するため、意識的に交互に積んだ可能性がある。また、基壇の平面形は本堂と庫裡を境にして東側が狭くなるが、土層には境は認められず、H-H'断面では本堂側と庫裡側で交互に土を盛ることが確認できる(95層、96層、110層)。このため、本堂から庫裡にかけて、基壇が一連で構築されたと分かる。

基壇外装は残存している範囲では1段~3段の角礫の石積みが施され、乱石積基壇と分かる。南側は南西隅付近で一部が残存していたが、大正期に基壇を拡張する際にほとんどが抜き取られたようである。北側でも基壇外装と思われる石積みを確認したが、北東隅で検出した基壇外装の北辺と比べて約1.7m北にずれる。北辺は本堂と庫裡との境界付近で平面形が変化したと推定されるが、詳細は不明である。また、北側で検出した基壇外装ではP4とP6の柱間にほぼ沿って方形の石材が置かれ、その間に平坦な面を上にした石材が配置されることから階段として機能していた可能性がある。西側では南から4.6m付近までで石積みが途切れる。一方、途切れた位置から約1.0m西にずれた位置からは、

別の石積みが北に伸び、これらの石積みの間には斜路を確認した。また、現状で基壇の上面上には敷石等の舗装の痕跡は確認できなかった。なお、基壇の構築過程の詳細は第5章第2節に記載する。

硬化面 J9～10グリッドの基壇の上面上で検出した。本堂の中央の最も奥にあたる範囲で、仏像を安置するために機能していた可能性がある。また、硬化面の南西側には石材が散乱していた。もとは硬化面と関連した構造物の一部であった可能性もあるが、詳細は不明である。

礎石 礎石の石材は砂岩で、36個が原位置をとどめる。この中には礎石据付穴を伴うもの(P1～P6、P10、P16、P17、P19、P27、P31、P33、P37～P40、P42、P43)と伴わないもの(P8、P13～P15、P18、P20、P22～P26、P28、P29、P32、P34～P36、P41)が認められる。比較的大きい礎石は岩盤まで掘り込んだ据付穴の中や岩盤の上に直接設置し、小さい礎石は版築途中で据付穴を設けずに設置する。また、礎石には版築以前に設置したもの(P2、P3、P6、P15)と盛土や版築の途中に設置したもの(P1、P4、P5、P8、P10、P13、P14、P16～P20、P22～P29、P31～P43)が認められる。礎石据付穴の平面形は、P38、P42、P43が楕円形、P17、P44が不整形、P1、P3、P4、P16、P31、P33が不整形楕円形、P6、P10、P19、P27、P37が不整形、P2が不整形長方形、P5が不整形、P39、P40が不明である。大きさは長軸長0.60m～0.90m、短軸長0.52m～0.80m、深さは0.13m～0.42mである。また、P2、P5、P6、P8、P10、P15～P17、P19、P20、P27、P37～P40、P42～P44では根石を認められた。P10、P16、P17、P19、P24、P27、P37、P38、P42、P43の礎石の上面上には方形の削り込みが認められ、角柱が用いられたことが窺える。P1、P2、P5、P15、P16、P19、P24、P25、P27、P31、P37～P39には矢穴が認められた。また、周辺の礎石の並びからP7、P9、P11、P12、P21、P30、P44を礎石抜取穴と判断した。礎石抜取穴の平面形はP11が円形、P12が不整形楕円形、P21、P30が不整形、P7が不整形、P9が不明である。大きさは長軸長が0.88m～0.22m、短軸長が0.60m～0.22m、深さは0.02m～0.18mである。

建物 残存する礎石や礎石抜取穴から、桁行3間(8.5m、柱間2.8m～2.9m)、梁行3間(5.55m、1.85m～1.9m)の本堂の東に桁行2間(3.7m、柱間1.85m)、梁行1間(2.7m)の庫裏が取り付けいた建物と考える。また本堂の南側(1.1m)と北側から西側にかけて(0.95m～1.1m)や庫裡の東側(1.0m)には張り出しを有する。張り出しは広縁の可能性もある(第5章第1節)。長軸方位はN-61°-Wである。

トイレ 本堂の北西に取り付いた長さ約2.10m、幅1.55mの方形の石組みを検出した。石組みの北西隅、北東隅、南東隅に置かれた礫はその他の礫と比べてやや大振りで平坦な面を上に向けて置かれていることや、北西隅の礫はP1と対になることから、礎石として機能していた可能性がある。石組みの中央には深さ0.48mほどの掘り込みが認められる。E-E'断面では基壇を掘り込むような堆積が認められるため、基壇構築以降のものと思われる。掘り込みの中には、大小2つの甕が埋設されていた。2つの甕の間には2つの礫が積まれた状態で置かれていた。2つの甕の内、小ぶりの甕の内部の付着物を分析したところ、リン酸カルシウムであると判明したため、便器として使用されていたと分かり、トイレとして機能していたと判断した(第4章第2節)。

遺物出土状況 基壇の埋土や版築土から土師器61点、須恵器17点、山茶碗11点、陶磁器29点、金属製品12点、石製品4点が散在して出土した。掘削開始当初、近世と近代の土層を識別できていなかったため、近代以降の遺物が含まれている可能性がある。P7の埋土から土師器1点、陶磁器1点が、P12の埋土から陶磁器1点がそれぞれ散在して出土した。トイレには便器として利用した常滑の甕2点(P2、

27) が据え置かれていた。26は掘り込みの底部に、27は10層の上面に設置した状態であった。この他に26内の埋土から土師器1点、甕を設置した際の堀方埋土から陶磁器4点、土製品2点が出土した。

出土遺物 基壇の盛土や版築土から出土した須恵器6点、山茶碗2点、近世陶磁器6点、土師器5点、石製品1点、金属製品全点とP7から出土した陶器1点、トイレから出土した陶器3点を図示した。1は東山11号窯式、2は蝮ヶ池窯式、3は東山44号窯式の須恵器の坏蓋である。4は蝮ヶ池窯式の須恵器の坏身である。5、6は須恵器の高坏である。5には脚部の一部が残存しており、透かしを開けた際の工具痕から3方向透かしと判断できる。6は脚部の破片である。当寺院の立地する郡府山は船来山古墳群が展開していることから、これらの須恵器はもともと古墳に伴っていた可能性がある。7、8は尾張型山茶碗の碗である。8は尾張型第5型式である。9は登窯第10小期の端反碗で、内外面に呉須絵を施す。10は肥前産でIV～V期の湯呑である。11は登窯第1～5小期の鉄絵鉢である。12は登窯11小期以降の行平の蓋で、外面に5条以上の沈線を施す。13、14は登窯第10～11小期の灯明皿で、いずれも内面に灰釉を施すが、14は棧の端部の釉を拭い取る。13は内外面に煤が付着する。15～19は土師器の皿である。15は浅く、口縁端部をつまみ上げる。16は浅く、外面に指頭圧痕が認められ、口縁端部は丸くおさめる。17は内外面にナデが認められ、口縁端部はつまみ上げる。20はチャートの剥片である。潰したような細かい剥離が複数認められるため、火打石として使用された可能性がある。21、22は錠である。21は軸部に折れが、22は軸部に振れが認められる。23は青銅の火箸である(第4章第3節)。軸部の3箇所にも2条の沈線が認められる。頭部には沈線と軸部より一回り細く窪みを設ける装飾を施す。24は青銅若しくは白銅の引髷である(第4章第3節)。外面には4条の沈線を施す。中央には径0.25cmほどの円形の孔が穿ち、柄をつけるためのものと推定される。孔の断面形は外面に向かいややハの字状に開き、製作時若しくは使用時に生じたものの可能性がある。25はP7から出土した碗の蓋である。内外面にコバルトの摺絵を施す。26と27は常滑産陶器の甕である。26は19世紀前半から中頃のもので、27は18世紀前半から中頃のものである。28は登窯第10～11小期の手水鉢若しくは水甕で、外面に鉄絵を施す。

時期 基壇の出土遺物の最新型式は19世紀中頃であるが、文献資料によると創建は明和から安永(1764～1780年)の頃であり(第5章第1節)、出土遺物の方が新しい時期を示す。19世紀中頃を示す遺物は大正期の風呂が設置されたと想定されるJ10、K10グリッドの周辺から出土しており(第5章第1節)、大正期の建て替えの際の紛れ込み、若しくは19世紀中頃に何らかの造作があった可能性がある。また、P7は明治以降に礎石を抜き取った可能性がある。トイレは埋設されていた甕(26)が19世紀前半から中頃を示すことや、基壇を掘り込むような堆積であることから、創建期から存在したのではなく、増設されたものの可能性がある。

注

- 1) 本遺構は大正期に建て替えがあったことが分かっているが、今回は、近世までの遺物を調査対象としたため、ここでは大正期以前の建物について報告する。なお、大正期の建物の内容については、第5章第1節で述べる。

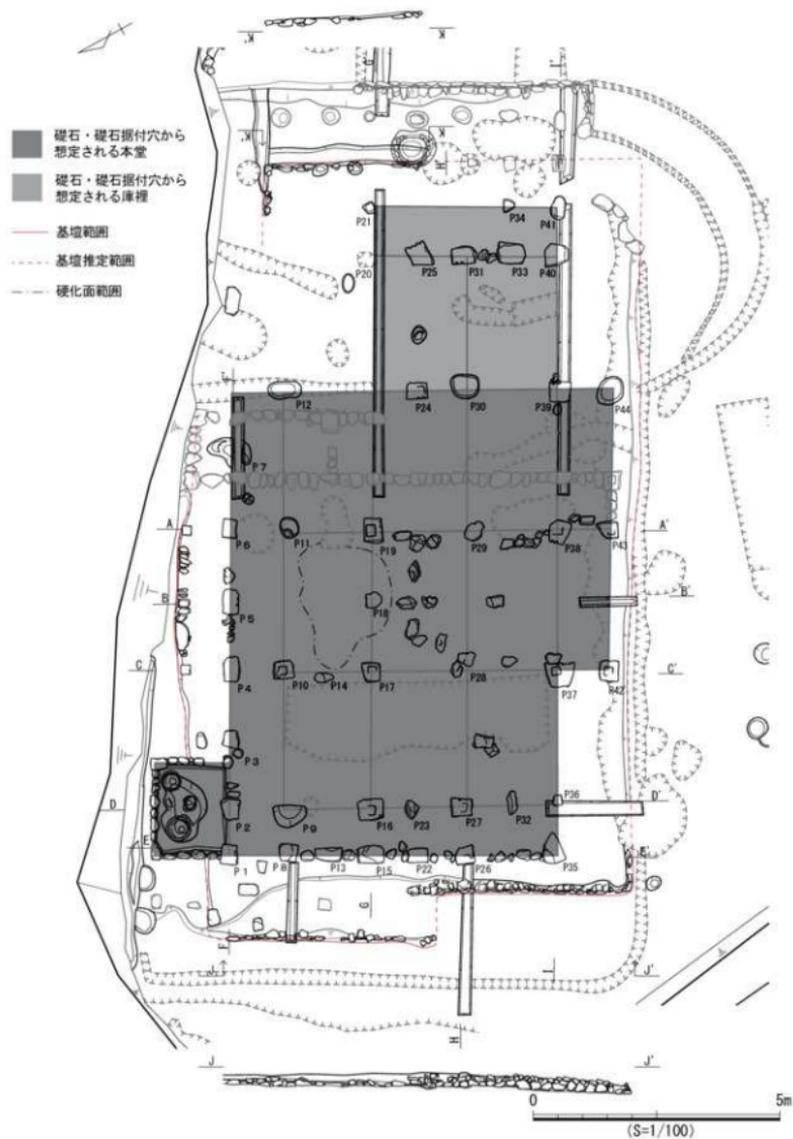


図10 SB1礎石検出状況

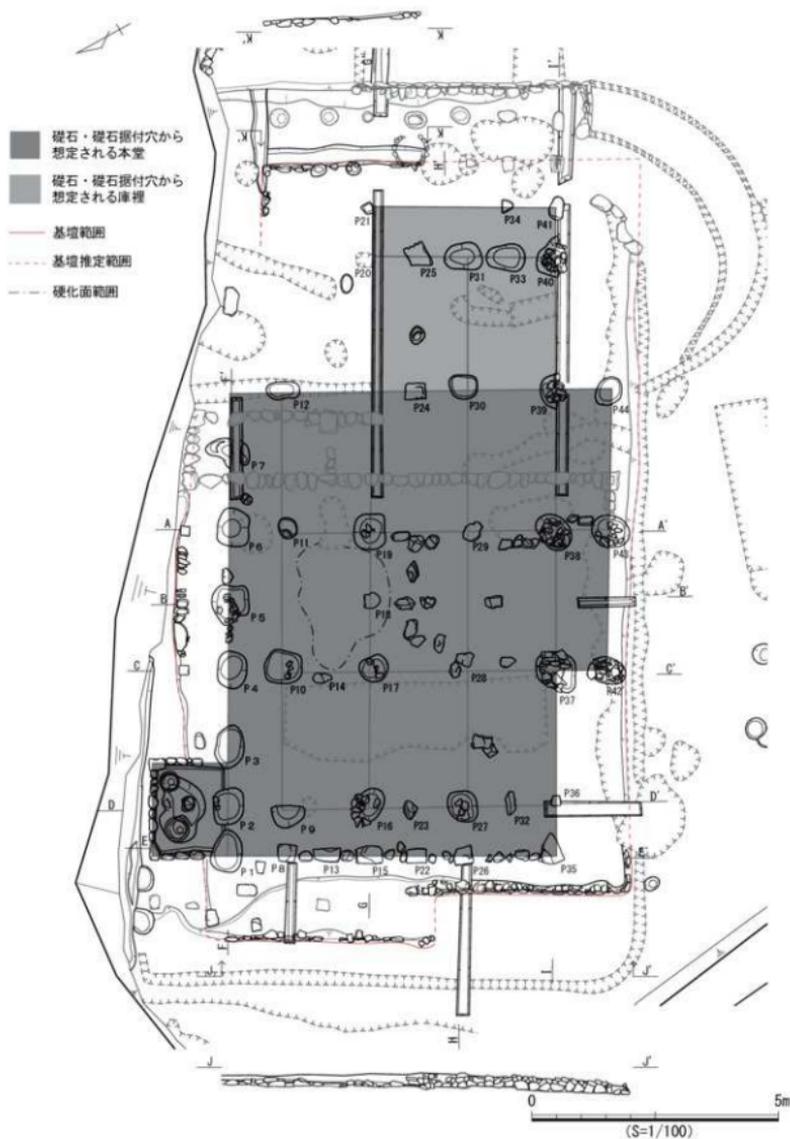


図11 SB 1 根石検出状況

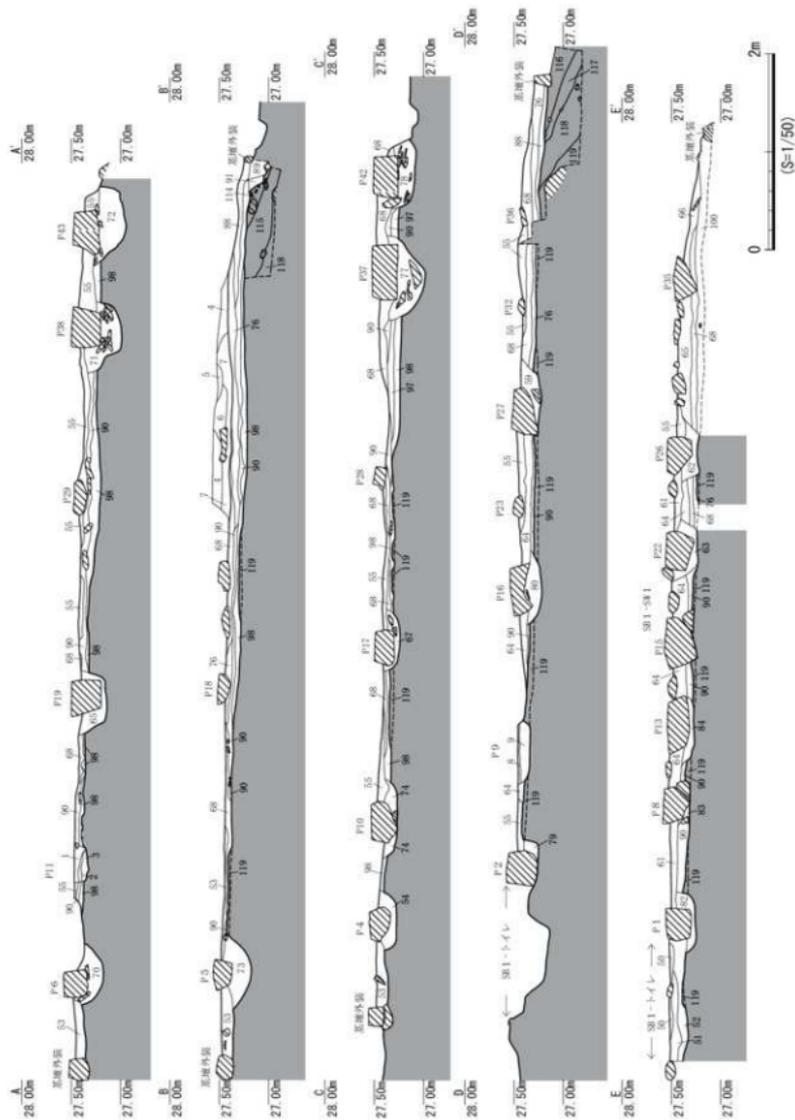


図12 S81土質断面図(1)

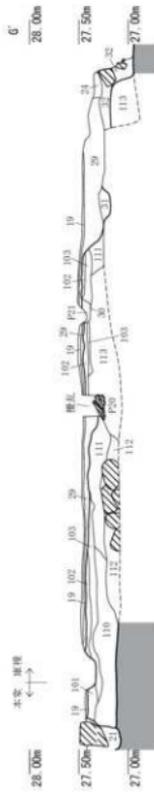
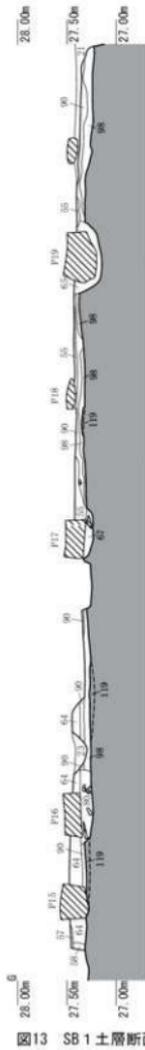
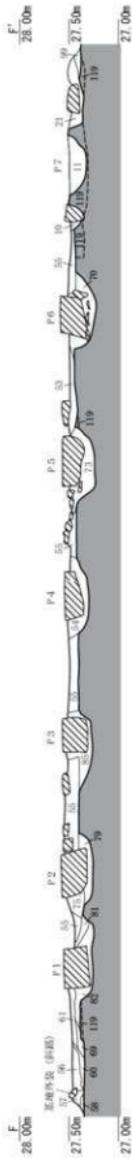


図 13 SB 土層断面図 (2)

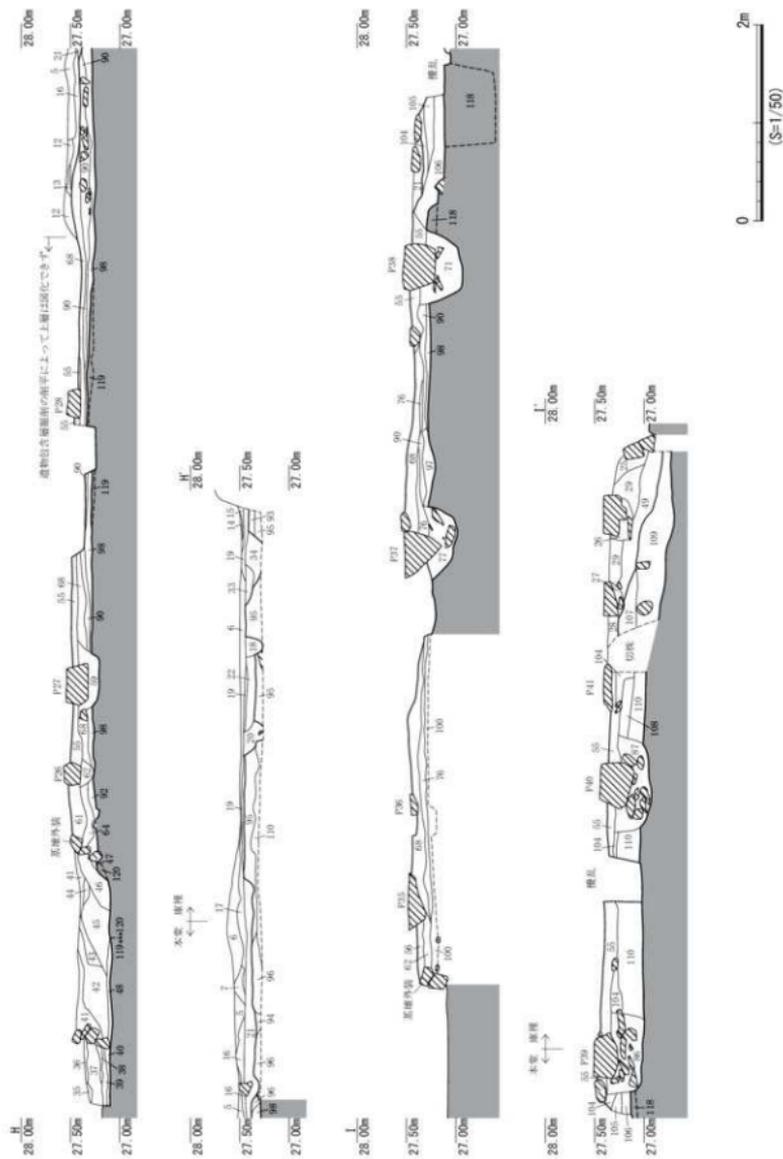


図 14 S81土層断面図(3)

- 1 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩層0%含む (P11埋土)
- 2 10184/6 褐色土 ややしまる 粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層0%含む (P11埋土)
- 3 10185/3 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10186/8 明黄褐色土ブロックを2%含む 10183/4 暗褐色土ブロックを2%含む (P11埋土)
- 4 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10183/4 暗褐色土ブロックを2%含む 径5cm以下の軟質砂岩層2%含む (近代基準層土)
- 5 10184/3 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 径2cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 6 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし 径2cm以下の準角礫3%含む (近代基準層土)
- 7 10184/6 褐色土 ややしまる 粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層1%含む (近代基準層土)
- 8 10183/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (P9埋土)
- 9 10184/3 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (P9埋土)
- 10 10184/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径7cm以下の準角礫3%含む (近代近角礫埋土)
- 11 10184/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 径6cm以下の準角礫2%含む (近代基準層土)
- 12 10184/2 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10185/4 近い黄褐色土ブロックを2%含む 径2cm以下の軟質砂岩層2%含む (近代基準層土)
- 13 10186/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 14 10184/3 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 15 10186/8 明黄褐色土 しまる 粘性なし (近代基準層土)
- 16 10184/3 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 径1cm以下の軟質砂岩層3%含む (近代基準層土)
- 17 10184/2 黄褐色土 しまりなし 粘性なし (近代基準層土)
- 18 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 19 10182/2 暗褐色土 かなりしまる 粘性なし 径1cm以下の軟質砂岩層3%含む (近代基準層土、硬化部)
- 20 10188/2 灰色土 10186/4 近い黄褐色土 10184/2 灰黄褐色土の混合土 しまる 粘性なし 径6cm程度の準角礫2%含む (近代基準層土)
- 21 10184/3 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む 径3cm以下の軟質砂岩層5%含む (近代基準層土)
- 22 10185/3 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを1%含む (近代基準層土)
- 23 10183/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (近代基準層土)
- 24 10184/6 褐色土 しまる 粘性なし 径1cm以下の軟質砂岩層10%含む (近代基準層土)
- 25 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層5%含む (近代基準層土)
- 26 10184/3 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代埋土層付埋土)
- 27 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代埋土層付埋土)
- 28 10183/3 暗褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 29 10185/4 近い黄褐色土 かなりしまる 粘性なし 10185/6 黄褐色土ブロックを3%含む 10183/4 暗褐色土ブロックを3%含む 径5cm以下の軟質砂岩層9%含む (近代基準層土)
- 30 10184/3 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし (P11埋土)
- 31 10184/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 径3cm程度の軟質砂岩層6%含む (近代基準層土)
- 32 10182/2 暗褐色土 しまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩層40%含む (近代基準層土)
- 33 10184/3 近い黄褐色土 しまる 粘性なし (近代基準層土)
- 34 10185/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし (近代基準層土)
- 35 10184/6 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 36 10184/4 褐色土 しまる 粘性なし 10188/3 黄褐色土ブロックを2%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む 径1cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 37 10185/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10188/3 黄褐色土ブロックを13%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを9%含む 径3cm程度の軟質砂岩層1%含む (近代基準層土)
- 38 10185/3 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (近代基準層土)
- 39 10185/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを30%含む 径4cm程度の軟質砂岩層1%含む (近代基準層土)
- 40 10186/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (近代基準層土)
- 41 10184/3 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10186/8 明黄褐色土ブロックを1%含む 10183/3 暗褐色土ブロックを2%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む (近代基準層土)
- 42 10185/8 黄褐色土 しまる 粘性なし 10186/4 近い黄褐色土ブロックを3%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを3%含む 10183/4 暗褐色土ブロックを2%含む 径1cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 43 10183/4 暗褐色土 しまる 粘性なし 径2cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 44 10185/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10186/4 近い黄褐色土ブロックを2%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む (近代基準層土)
- 45 10184/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 10186/8 明黄褐色土ブロックを1%含む 10183/3 暗褐色土ブロックを2%含む 径1cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 46 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし 10186/8 明黄褐色土ブロックを1%含む 10183/3 暗褐色土ブロックを3%含む 径2cm以下の準角礫1%含む (近代基準層土)
- 47 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 48 10185/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (近代基準層土)
- 49 10184/6 褐色土 ややしまる 粘性なし 10185/6 黄褐色土ブロックを3%含む 径1cm以下の軟質砂岩層1%含む (近代基準層土)
- 50 10188/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを3%含む (S11-1埋土)
- 51 10186/6 明黄褐色土質シルト ややしまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを3%含む 径4cm以下の軟質砂岩層3%含む (S11-1埋土)
- 52 10185/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを3%含む 10183/4 暗褐色土ブロックを1%含む 径5cm以下の軟質砂岩層9%含む (S11-1埋土)
- 53 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 54 10186/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし 径1cm程度の軟質砂岩層1%含む (P4埋土)
- 55 10183/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩層2%含む (近代基準層土)
- 56 10184/4 褐色土 しまる 粘性なし (近代基準層土)
- 57 10188/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを3%含む (近代基準層土)
- 58 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 59 10186/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (P9埋土)
- 60 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10184/8 褐色土ブロックを13%含む 径5cm以下の軟質砂岩層9%含む (近代基準層土)
- 61 10185/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10188/2 灰色土ブロックを5%含む 径2cm以下の軟質砂岩層2%含む (近代基準層土)
- 62 10187/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10188/3 黄褐色土ブロックを1%含む 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む 径2cm以下の準角礫2%含む (P26埋土)
- 63 10187/4 近い黄褐色土 ややしまる 粘性なし (近代基準層土)
- 64 10186/4 近い黄褐色土 しまる 粘性なし 径3cm以下の軟質砂岩層3%含む (近代基準層土)
- 65 10186/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし 10188/2 灰色土質土ブロックを10%含む (P19埋土)
- 66 10184/6 褐色土 しまる 粘性なし (近代基準層土)
- 67 10182/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (P17埋土)
- 68 10188/2 灰色砂質シルト ややしまる 粘性なし 10187/8 黄褐色土ブロックを2%含む (近代基準層土)
- 69 10184/4 褐色土 ややしまる 粘性なし 径3cm程度の軟質砂岩層2%含む (近代基準層土)
- 70 10186/4 近い黄褐色土 しまりなし 粘性なし (P6埋土)

図15 SB1土層断面図(4)

71 10YR3/4	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (P30埋土)
72 10YR2/3	黒褐色土	しまりなし	粘性なし (P4埋土)
73 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P5埋土)
74 10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P10埋土)
75 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (近世基層盛土)
76 10YR3/4	暗褐色土	ややしまる	粘性なし 10YR7/8 黄褐色土ブロックを2%含む 径4m以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
77 10YR3/4	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (P7埋土)
78 10YR2/3	黒褐色土	しまりなし	粘性なし (P2埋土)
79 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P2埋土)
80 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P16埋土)
81 10YR8/3	浅黄褐色砂質シルト	しまりなし	粘性なし 10YR7/8 黄褐色土ブロックを2%含む (P1埋土)
82 10YR7/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P1埋土)
83 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまる	粘性なし 径4m以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
84 10YR6/4	にぶい黄褐色土	しまる	粘性なし (近世基層盛土)
85 10YR5/3	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし (P3埋土)
86 10YR3/3	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (P39埋土)
87 10YR3/3	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (P10埋土)
88 10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	しまる	粘性なし 10YR8/4 浅黄褐色土ブロックを3%含む (近世基層盛土)
89 10YR6/4	にぶい黄褐色土	ややしまる	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
90 10YR5/6	黄褐色土	ややしまる	粘性やややあり 10YR8/2 灰白色土ブロックを3%含む (近世基層盛土)
91 10YR5/4	にぶい黄褐色土	ややしまる	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
92 10YR6/6	明黄褐色砂質土	ややしまる	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
93 10YR8/2	灰白色砂質シルト	しまる	粘性なし 径3cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
94 10YR4/4	褐色土	しまりなし	粘性なし (近世基層盛土)
95 10YR4/6	褐色土	ややしまる	粘性なし 径4cm以下の垂直層2%含む (近世基層盛土)
96 10YR4/4	褐色土	しまる	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層3%含む 径8cm程度の垂直層1%含む (近世基層盛土)
97 10YR3/3	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (近世基層盛土)
98 10YR4/2	灰黄褐色土	ややしまる	粘性なし 10YR8/4 浅黄褐色土ブロックを5%含む 径3cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
99 10YR5/4	にぶい黄褐色土	ややしまる	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層5%含む (近世基層盛土)
100 10YR6/4	にぶい黄褐色砂質土	ややしまる	粘性なし (近世基層盛土)
101 10YR5/8	黄褐色土	ややしまる	粘性やややあり 10YR3/4 暗褐色土ブロックを3%含む 径1cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
102 10YR3/4	暗褐色土	しまる	粘性なし 10YR3/2 黒褐色土ブロックを5%含む 径6cm以下の軟質砂岩層3%含む (近世基層盛土)
103 10YR5/6	黄褐色土	ややしまる	粘性なし 10YR3/2 黒褐色土ブロックを7%含む 径2cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
104 10YR3/4	褐色土	しまる	粘性なし 10YR3/4 暗褐色土ブロックを5%含む 径1cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
105 2.5Y5/2	暗灰黄色土	しまりなし	粘性なし 10YR5/8 黄褐色土ブロックを1%含む (近世基層盛土)
106 10YR4/4	褐色土	ややしまる	粘性やややあり 径1cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
107 10YR3/3	にぶい黄褐色土	しまる	粘性なし 10YR5/6 黄褐色土ブロックを25%含む 径1cm以下の軟質砂岩層3%含む (近世基層盛土)
108 10YR4/4	褐色土と10YR3/4 暗褐色土の混合土	しまりなし	粘性なし 径5cm以下の垂直層2%含む (近世基層盛土)
109 10YR3/1	にぶい黄褐色土	ややしまる	粘性なし 10YR8/2 灰白色砂質シルトブロックを20%含む 径4cm以下の垂直層1%含む (近世基層盛土)
110 10YR3/2	黒褐色土	しまりなし	粘性なし 径2cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
111 10YR3/4	暗褐色土	ややしまる	粘性なし 10YR3/2 黒褐色土ブロックを10%含む 径4cm以下の軟質砂岩層2%含む (近世基層盛土)
112 10YR2/3	黒褐色土	しまりなし	粘性やややあり 径20~30cm程度の層40%含む (近世基層盛土)
113 10YR2/1	黒色土	しまりなし	粘性なし 10YR6/8 明黄褐色土ブロックを2%含む 径1cm以下の軟質砂岩層1%含む (近世基層盛土)
114 10YR3/4	暗褐色土	しまりなし	粘性なし (自然堆積)
115 10YR2/3	黒褐色土	ややしまる	粘性なし 径8cm程度の垂直層、垂直層1%含む (自然堆積)
116 10YR5/4	にぶい黄褐色土	ややしまる	粘性なし 径8cm程度の垂直層1%含む (自然堆積)
117 10YR5/6	黄褐色土	しまりなし	粘性なし (自然堆積)
118 10YR5/4	にぶい黄褐色土	しまりなし	粘性なし 径6cm程度の垂直層2%含む 径4cm以下の垂直層2%含む (自然堆積)
119 10YR6/4	にぶい黄褐色砂層 (基盤層)		
120 10YR8/1	灰白色と10YR6/4 黄褐色砂層 (基盤層)		

図16 SB1土層断面図(5)

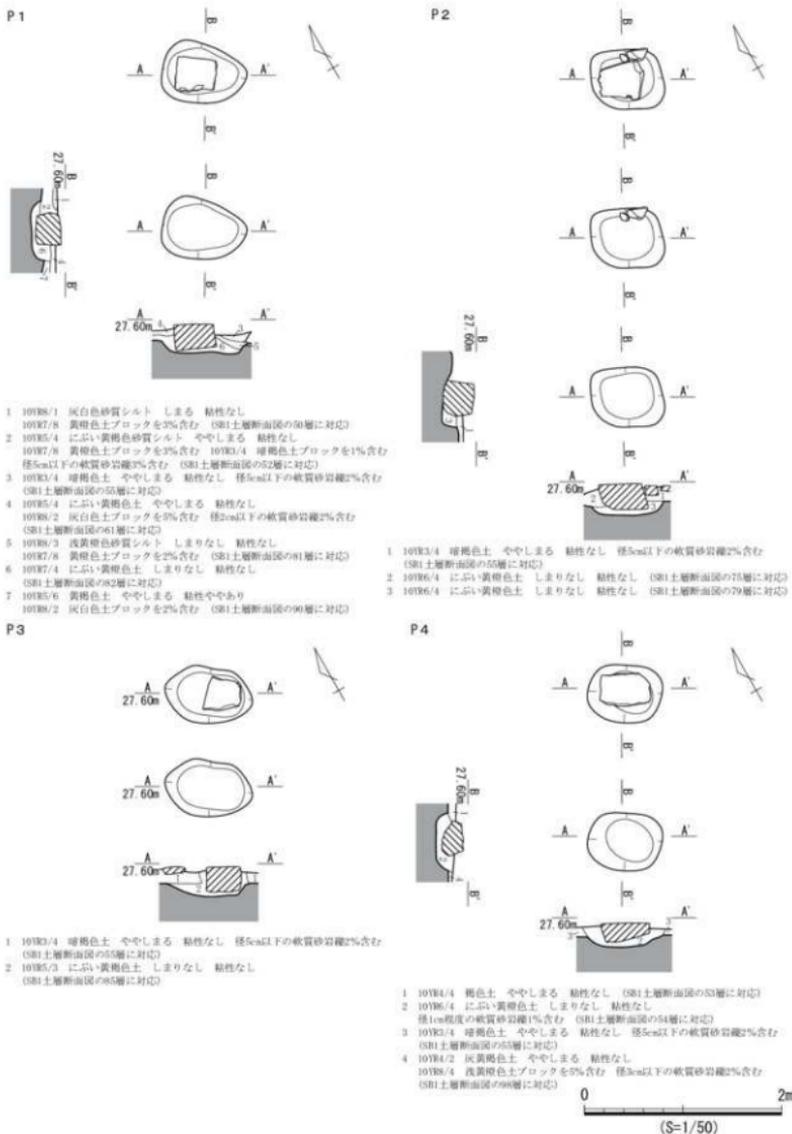
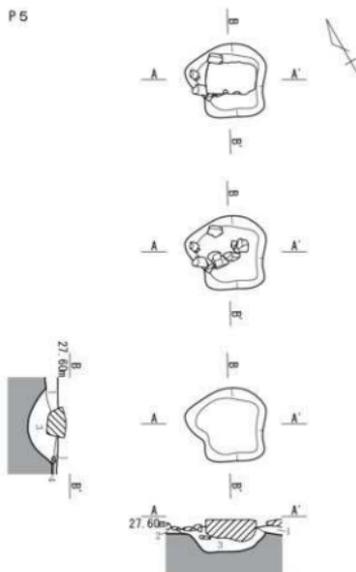


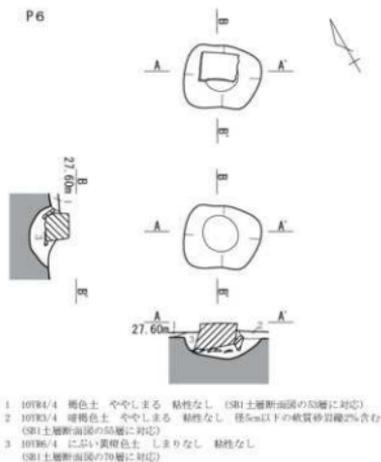
図17 SB1礎石据付穴遺構図(1)

P5



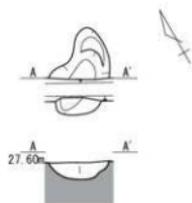
- 1 10YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性なし (SR1土層断面図の53層に対応)
- 2 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩2%含む (SR1土層断面図の55層に対応)
- 3 10YR6/4 にがい黄褐色土 しまりなし 粘性なし (SR1土層断面図の73層に対応)
- 4 10YR5/6 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10YR5/2 灰白色土ブロックを2%含む (SR1土層断面図の90層に対応)

P6



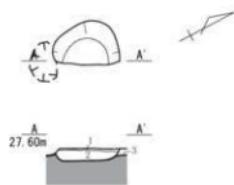
- 1 10YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性なし (SR1土層断面図の53層に対応)
- 2 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩2%含む (SR1土層断面図の55層に対応)
- 3 10YR6/4 にがい黄褐色土 しまりなし 粘性なし (SR1土層断面図の70層に対応)

P7



- 1 10YR4/6 褐色土 しまりなし 粘性なし 径6cm以下の硬角礫2%含む (SR1土層断面図の11層に対応)

P9



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (SR1土層断面図の8層に対応)
- 2 10YR4/3 にがい黄褐色土 しまりなし 粘性なし (SR1土層断面図の9層に対応)
- 3 10YR6/4 にがい黄褐色土 しまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩5%含む (SR1土層断面図の64層に対応)

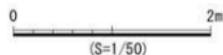


図18 SB1礎石据付穴遺構図(2)

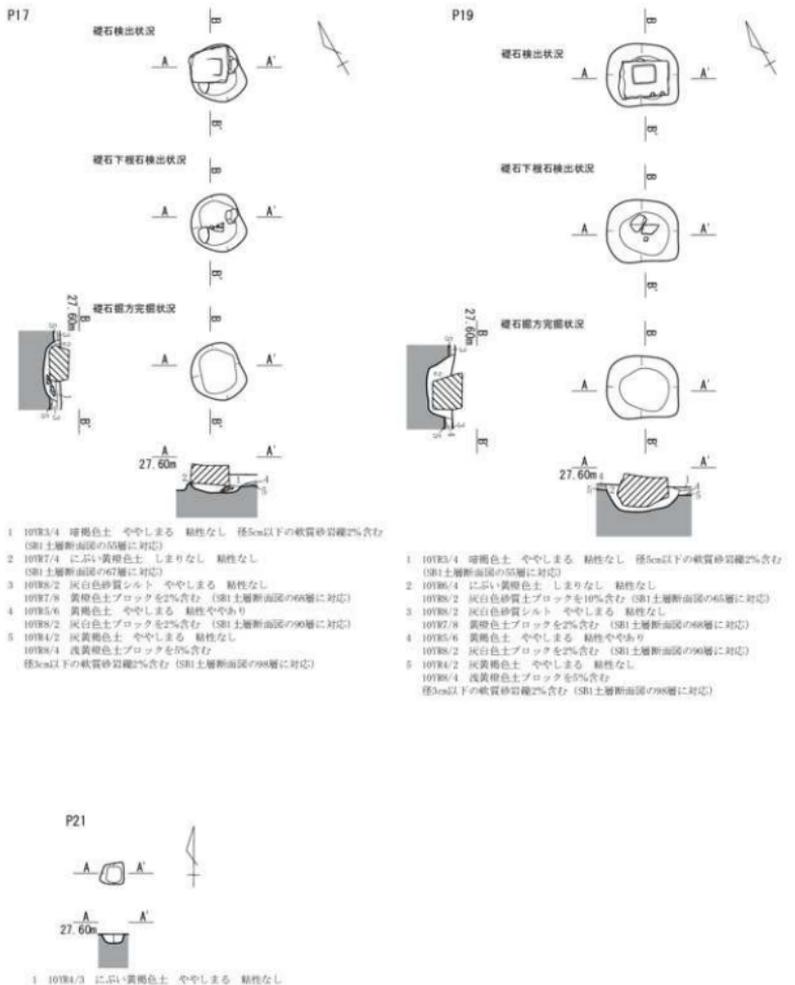


図20 SB1 礎石掘付六遺構図(4)

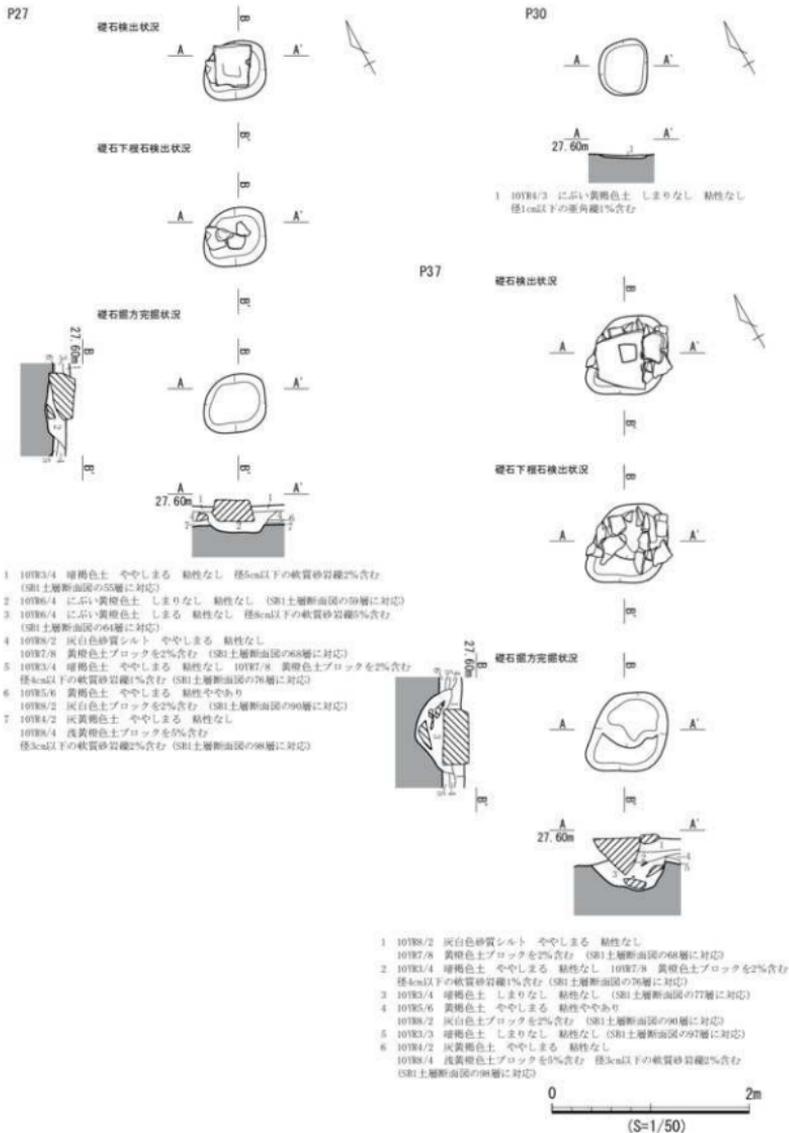
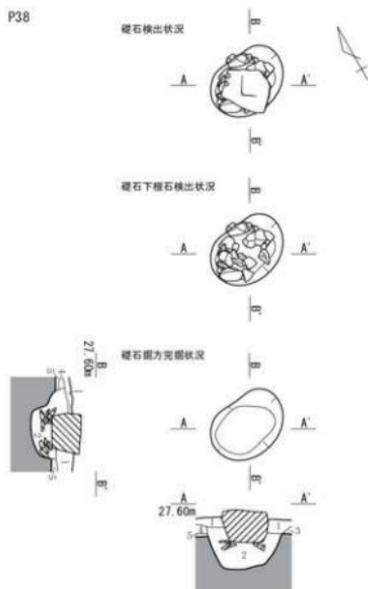


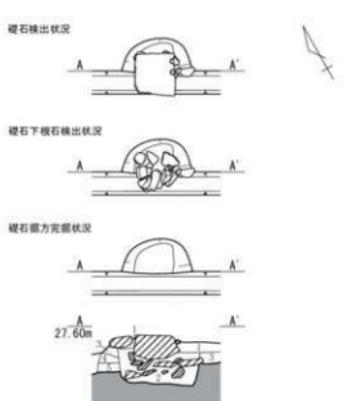
図21 S81礎石据付穴遺構図(5)

P38



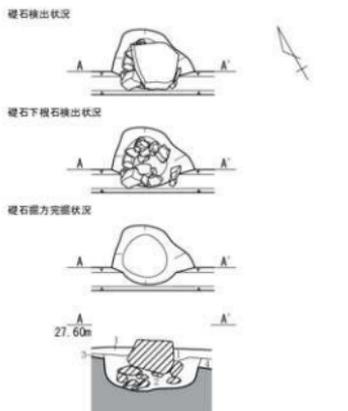
- 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩礫2%含む (S81土層断面図の55層に対応)
- 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (S81土層断面図の71層に対応)
- 10YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の軟質砂岩礫1%含む (S81土層断面図の106層に対応)
- 10YR5/6 黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり
- 10YR9/2 灰白色土ブロックを2%含む (S81土層断面図の90層に対応)
- 10YR4/2 灰黄褐色土 ややしまる 粘性なし 10YR9/4 浅黄褐色土ブロックを9%含む 径3cm以下の軟質砂岩礫2%含む (S81土層断面図の98層に対応)

P39



- 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩礫2%含む (S81土層断面図の55層に対応)
- 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (S81土層断面図の90層に対応)
- 10YR4/4 褐色土 しまる 粘性なし 10YR3/4 暗褐色土ブロックを5%含む 径1cm以下の軟質砂岩礫1%含む (S81土層断面図の104層に対応)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色土 しまりなし 粘性なし
- 10YR5/8 黄褐色土ブロックを1%含む (S81土層断面図の105層に対応)
- 10YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の軟質砂岩礫1%含む (S81土層断面図の106層に対応)

P40



- 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径5cm以下の軟質砂岩礫2%含む (S81土層断面図の55層に対応)
- 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性なし (S81土層断面図の87層に対応)
- 10YR4/4 褐色土 しまる 粘性なし 10YR3/4 暗褐色土ブロックを5%含む 径1cm以下の軟質砂岩礫1%含む (S81土層断面図の104層に対応)
- 10YR4/4 褐色土と10YR3/4 暗褐色土の混生土 しまりなし 粘性なし 径2cm以下の準角礫2%含む (S81土層断面図の108層に対応)

0 2m
(S=1/50)

図22 SB1礎石据付穴遺構(6)

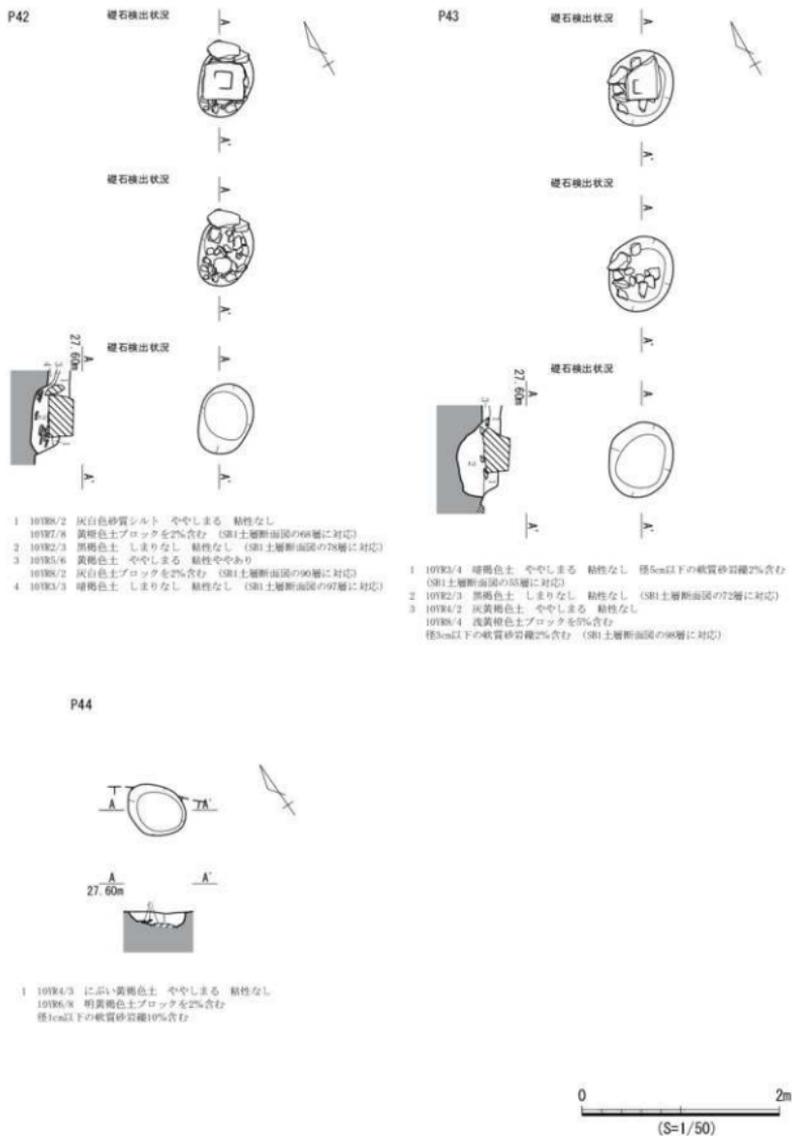


図23 SB 1 礎石据付穴遺構図(7)

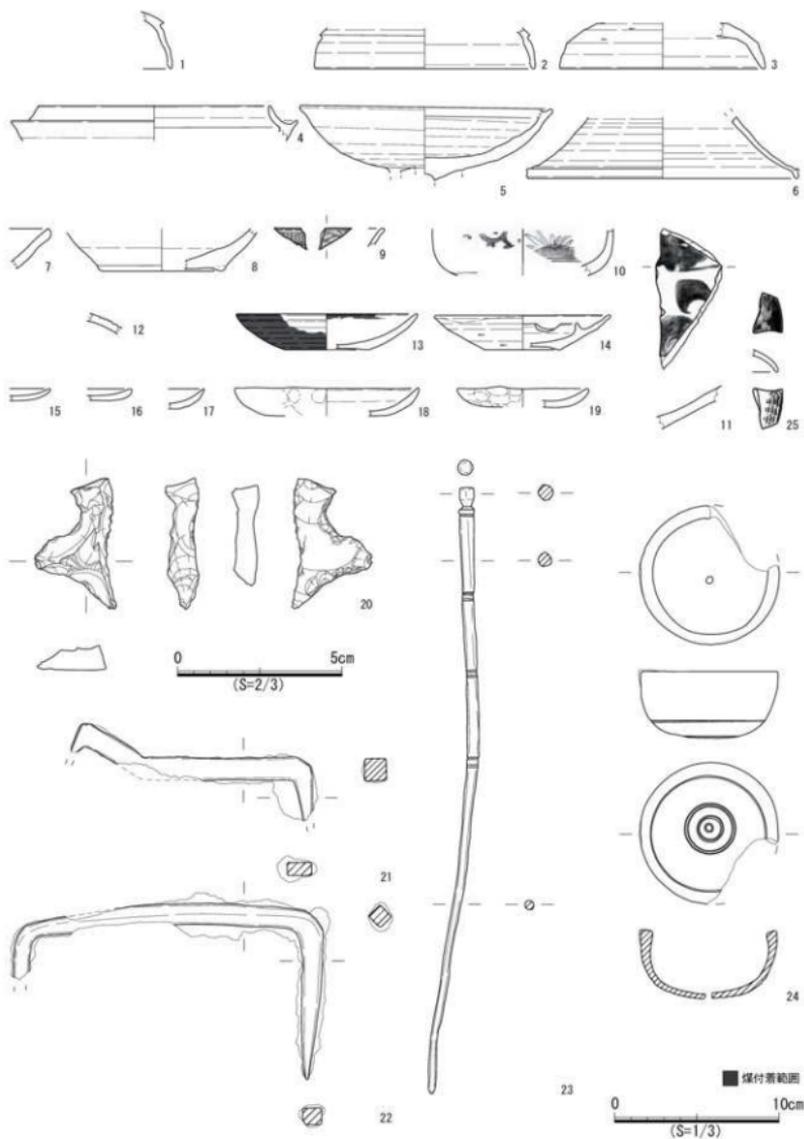
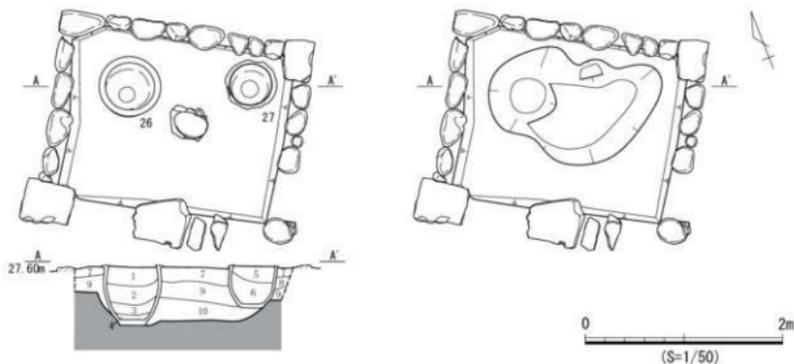


図24 SB 1 出土遺物実測図



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし 礫を含まず
- 2 10YR5/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 礫を含まず
- 3 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性ややあり 礫を含まず
- 4 10YR4/2 灰黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径2cm程度の円礫1つを含む
- 5 10YR5/4 暗褐色土 ややしまる 粘性なし 径4cm程度の円礫を1つ含む
- 6 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 10YR3/2 黒褐色土ブロックを3%含む
- 7 10YR5/6 暗黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性なし 10YR7/8 黄褐色土ブロックを3%含む 径4cm以下の軟質砂岩礫を3%含む
- 8 7.5YR5/6 暗褐色土 しまりなし 粘性なし 礫を含まず
- 9 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性なし 10YR7/8 黄褐色土ブロックを3%含む 10YR3/4 暗褐色土ブロックを1%含む 径5cm以下の軟質砂岩礫を3%含む
- 10 10YR7/4 に近い黄褐色砂質シルト ややしまる 粘性なし 10YR7/8 黄褐色土ブロックを2%含む 10YR3/4 暗褐色土ブロックを1%含む 径5cm以下の軟質砂岩礫を7%含む

出土遺物

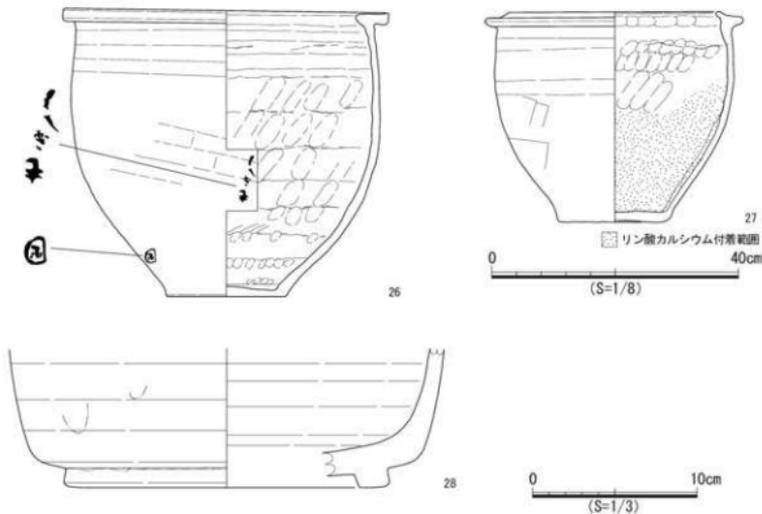


図25 SB1-トイレ遺構図・出土遺物実測図

2 基壇

基壇1 (図26、27)

検出状況 L~M13グリッド、II層基底面で検出した。西側には本遺構に沿ってSD3が位置する。SD3とSW8の間は通路として機能していた可能性があり、本遺構の前を通過して北西にあるSB1の方向に伸びていたと推定される。基壇の上面ではSK28、SK29、SK30等の複数の土坑を確認した。

規模・形状 平面形はおおよそ南北に長い長方形で、長軸長約4.8m、短軸長約2.2m、高さ0.76mである。長軸方位はN-26°-Eである。

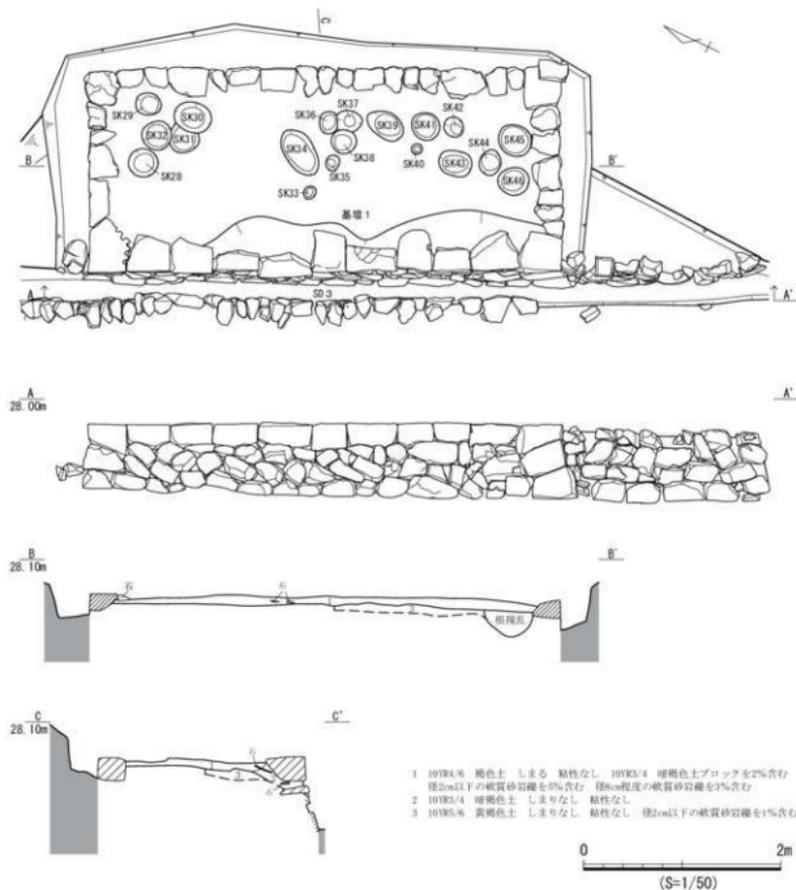


図26 基壇1遺構図

堆積状況 土砂が流出する恐れがあったため、基壇外装を解体しての調査は実施しなかった。そのため、基壇上面から0.3mほどの土層の堆積状況のみを確認した。C-C'断面では盛土(3層)の上に基壇外装の裏込め土(2層)を確認したため、盛土後に基壇外装の構築を行ったと考える。2層と3層の上には全体を覆うように1層を確認した。1層は、しまりがあることから、基壇上面の舗装と判断した。なお、基壇の上面で確認した円形や楕円形の浅い土坑は、基壇の舗装を行う際に叩き締めた痕跡の可能性がある。

基壇外装 正面となる西側では、隅部と天端に方形の割石を用い、その内側に野面石と割石を組み合わせた乱積みを施す。正面となる石積みより東側では、石を積んだ状況は確認出来ず、野面石と割石を用いた石列となる。山際に築かれていることや、正面の石積みを除いてその東側が石列となることから、基壇の大部分は基盤層である岩盤を削り出したもの可能性がある。なお、基壇外装の石積みはSD3の側壁としての役割も果たす。

礎石 基壇の上面では礎石は確認できなかったが基壇外装の天端となる石材はいずれも平坦な面を上に設置されていることから、これらを礎石として利用した可能性がある。

遺物出土状況 盛土から陶磁器22点、土製品8点が散在して出土した。

出土遺物 盛土から出土した陶磁器7点を図示した。29は肥前産でV期の碗である。内外面に手描きの文様が施され、外部底面には「大明年製」と記される。30は瀬戸・美濃産で登窯第10～11小期の皿である。内面に呉須絵が施される。31は産地不明の行平の蓋である。赤褐色の軟質な胎土で、透明釉を施す。32は登窯第10～11小期の土瓶である。33は瀬戸・美濃産で登窯第8～9小期の灯明皿で、底部外面を除き錆釉が施される。34は登窯第3～4小期の壺類である。35は復興織部の手水鉢で、内外面に鉄絵が施される。

時期 出土遺物の最新型式から19世紀中頃のものと考えられる。

出土遺物

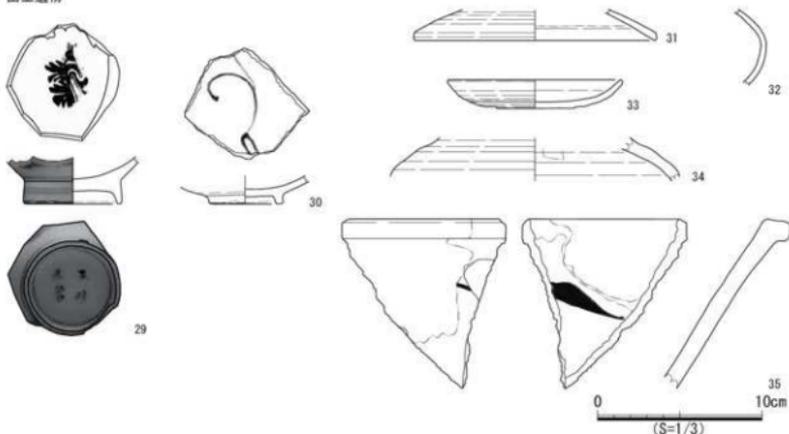


図27 基壇1出土遺物実測図

3 溝状遺構

SD2 (図28)

検出状況 I 9～10グリッド、II層基底面で検出した。重複関係から、SK9、SK10より新しい。

規模・形状 北西から南東に延びる溝である。両端は丸みを帯びることから、端部付近と考える。北半は発掘区外となる。長軸方位はN-57°-Wである。最大幅0.45m以上で深さ0.09mである。断面形は逆台形で、北西部の壁面にテラスを有する。底面は北西に向かって緩やかに低くなる。

埋土 単層で、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土から土師器3点が散在して出土した。

出土遺物 36は高坪である。内面に山形文と多条沈線を施す。37は土師器皿である。内外面にナデを施し、口縁端部はつまみ上げる。

時期 検出面から近世以降のものと考えられる。

SD3 (図28)

検出状況 K12～O14グリッド、II層基底面で検出した。

規模・形状 北西から南東に延びる溝である。北西端は発掘区外に延びる。長軸方位はN-25°-Wである。最大幅は0.54mで、深さは0.25mである。断面形は逆台形で、壁面の大部分に石積みを確認した。西壁面は、ほぼ全体に平らな面を内側にした石積みが成される。石積みが確認出来ない範囲は抜き取られた可能性がある。東壁面では、部分的に西壁面と同様の石積みを確認したが、基壇1と重なる範囲では基壇外装と一体になる。また、石積みが認められない範囲は岩盤が露出する。底面は南東に向かって低くなる。約0.6m西にあるSW8とほぼ平行することから、SW8と本遺構との間は通路として機能した可能性がある。

埋土 A-A'断面は単層である。B-B'断面は2層に分層し、1層は中央が窪む堆積である。ブロック土と礫を含むことから人為堆積の可能性が高い。

遺物出土状況 埋土から土師器1点、陶磁器1点が散在して出土した。

出土遺物 38は瀬戸・美濃産の碗で、口縁部の破片である。内外面にコバルトの摺絵が認められる。

時期 東壁面の一部が基壇1の基壇外装と一体になる構造であることから、基壇1と同じく近世に掘削された可能性がある。一方、西壁面の石積みにはSB1の礎石と想定される石材が確認できるため、大正期の建て替え以降に補修された可能性がある。埋土から出土した碗(38)から、少なくとも明治以降に埋没したと考える。

SD7 (図29)

検出状況 K11グリッド、II層基底面で検出した。調査時はSD6と重複すると判断したが、本遺構と埋土が類似していたことから、同時期に機能していた可能性もある。

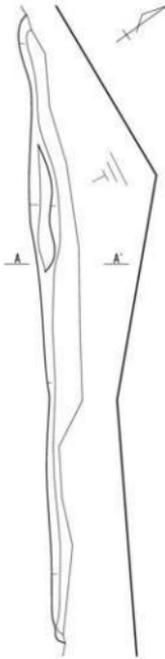
規模・形状 南北方向に延びる溝である。北端はSD6と垂直に交わり、南端は攪乱によって消失する。長軸方位はN-28°-Eで、SB1の東側の基壇外装に沿う。最大幅0.44m、深さ0.11mである。断面形は逆台形である。

埋土 単層である。礫をまばらに含むことから人為堆積の可能性が高い。

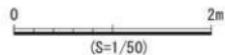
遺物出土状況 埋土から陶磁器2点散在して出土した。

出土遺物 39は登窯第11小期以降の行平である。外面には全体に煤が付着する。内面は蛇の目状に鉄

SD 2



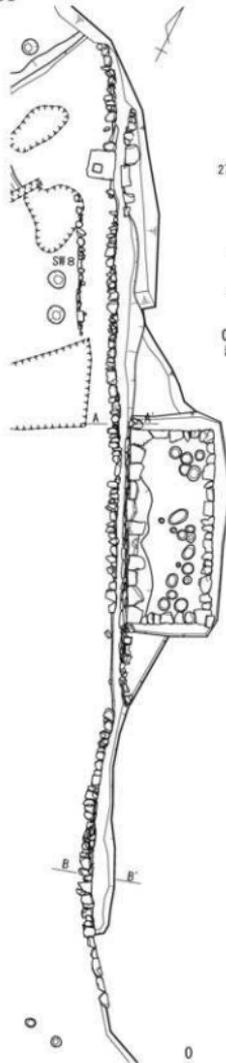
- 1 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土
しまりなし 粘性なし 礫を含まず



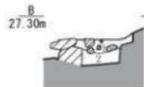
出土遺物



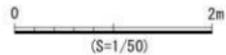
SD 3



- 1 10YR4/4 褐色土 しまりなし 粘性なし
深1cm以下の軟質砂礫を10%含む



- 1 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性なし
10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む
深13cm以下の軟質砂礫10%含む
2 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし
粘性なし 礫を含まず



出土遺物

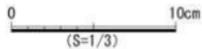


図28 SD 2・SD 3 遺構図・出土遺物実測図

軸がぬぐい取られる。

時期 出土遺物から19世紀中葉以降に埋没したと考える。

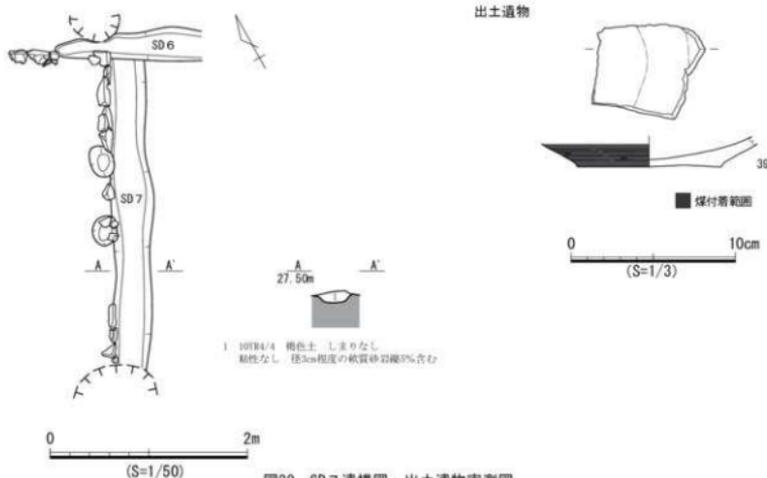


図29 SD 7遺構図・出土遺物実測図

4 土器埋設遺構

SJ 1 (図30)

検出状況 M10グリッド、II層基底面で検出した。検出時に睡蓮鉢の口縁部が露出していたが、掘方が確認出来なかったため、睡蓮鉢の長軸に沿ってトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。

規模 2層が堆積する土器の埋設する際に掘り込んだ掘方は、直径約0.84m、深さ0.19mである。

埋土 1層は掘方より外側にも堆積するため整地土と判断した。土器を設置した際に、並行して周辺の整地を行ったと推定されるが、範囲は不明である。2層は掘方埋土で、単層である。

遺物出土状況 睡蓮鉢 (40) が据え付けられた状態で出土した。また、この睡蓮鉢は口縁部付近が欠損しており、破片が内側から出土した。

出土遺物 40は常滑産陶器の睡蓮鉢で、19世紀末頃のものである。底部内面には、「㊦」の墨書が認められる。

時期 遺物から19世紀末頃のもと考えられる。近世に建てられたSB 1と併存していたと想定され、SB 1の南に広がる庭に設置されたものとする。

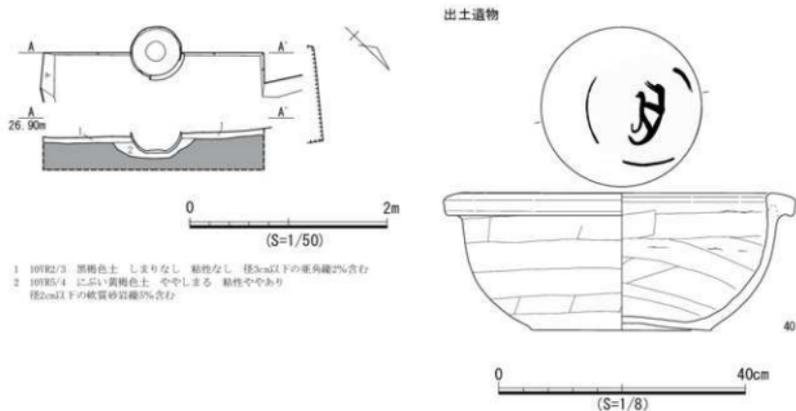


図30 SJ 1 遺構図・出土遺物実測図

5 土坑

SK 3 (図31)

検出状況 G10グリッド、II層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.32m、短軸長0.28m、深さ0.10mである。平面形は隅丸長方形で、断面形は隅丸方形である。

埋土 2層に分層した。1層は東側に偏って堆積する。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 埋土から土師器2点が散在して出土した。

出土遺物 41は土師器皿である。外面に指頭圧痕が認められる。口縁端部を丸くおさめる。

時期 検出面から近世以降のものとする。

SK35 (図31)

検出状況 M13グリッド、II層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。基壇1の上面で検出した土坑の一つである。

規模・形状 長軸長0.16m、短軸長0.13m、深さ0.07mである。平面形は不整形で、断面形は半円形である。

埋土 2層に分層した。1層は東側に向かって厚く堆積する。埋土に礫を含むことから人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 埋土から陶器1点が出土した。

出土遺物 42は登窯第11小期以降の行平である。体部下半の灰軸を施していない範囲には煤が付着する。

時期 出土遺物から19世紀中葉以降のものとする。

SK48 (図31)

検出状況 L11グリッド、II層基底面で検出した。平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.31m、短軸長0.27m、深さ0.09mである。平面形は不整形円形で、断面形は半円形である。

埋土 2層に分層した。1層は東側に偏って窪む堆積である。埋土に礫を含むことから人為堆積の可能性はある。

遺物出土状況 埋土から土師器1点が出土した。

出土遺物 43は土師器皿である。外面に指頭圧痕が認められる。口縁端部はつまみ上げる。

時期 検出面から近世以降のものとする。



図31 SK3・SK35・SK48遺構図・出土遺物実測図

6 石垣

本堂等が立地する平坦面の南側には段や斜路が認められ、それぞれに石垣が伴っていた。土砂が流出する恐れがあったため解体調査は実施せず、築石の状況を記録した。そのため、それぞれの石垣の構築方法の詳細や時期は明確ではない。また、段には下から順にa段～e段の名称を付与し、それぞれの段や斜路に伴う石垣をSW1～SW7とした。以下、それぞれの石垣について報告する。

SW1 (図32、33)

検出状況 L7～P14グリッドで検出した。最も北側にある石垣で、e段に伴う。本遺構、SW4とSW6、SW7との間には幅0.8m～0.9mほどの斜路が認められる。

規模・形状 長さ約41.9m、高さ約0.82mである。斜路の出入口からみて西側と東側に張り出しを有する(以下、前者を西張り出し、後者を東張り出しとする)。各辺の平面形は基本的に一文字だが、西張り出しの南辺には緩い輪取りが認められる。当初から東西の張り出しがあったか否かは不明である。ただし、西張り出しの両側の入角では、そこから東西に延びる石垣と一体になるような構造は認められず(写真8、9)、東張り出しは入角から西に延びる石垣と積み方が異なるため、いずれも後に付け加えられた可能性がある。

構造 西張り出しの東西に伸びる石垣には割石を用い、横目地が通ることから布積みと分かる。西張り出しの正面からみて左下には、割石を用い、部分的にずれて横目地の通る布崩し積みが見られる。この布崩し積みの上には、野面石と割石を組み合わせた乱積みと認められ、崩落した部分を補修した可能性がある。西張り出しの東辺の天端には約0.7mの野面石の大きな面が外側を向くように配置される。出角には割石が用いられるが小面と大面を意識して積み分けるような様相は認められなかった。東張り出しには野面石を用いた乱積みと認められ、南辺の西に伸びるSW4の様相と類似する。

SW2 (図32、33)

検出状況 L7グリッドで検出した。SW1の南西に位置しc段に伴う。

規模・形状 長さ約2.5m、高さ約0.13mである。平面形は確認出来る範囲では一文字である。

構造 割石と野面石を用いるが、遺存状況が悪く積み方の詳細は不明である。

SW3 (図32、33)

検出状況 M8～N10グリッドで検出した。SW2の南東、SW1の南に位置しb段に伴う。

規模・形状 長さ約10.8m、高さ約0.24mである。平面形は一文字である。

構造 野面石を用いる。遺存状況が悪く積み方は明確ではないが、残存する範囲では規則性が認められず、乱積みであった可能性がある。

SW4 (図32、33)

検出状況 N10～P14グリッドで検出した。SW1の南に位置しd段に伴う。本遺構、SW1とSW6、SW7との間には幅0.8m～0.9mほど斜路が認められる。

規模・形状 長さ約8.8m、高さ約1.42mである。西側に張り出しを有し、出角から西はSW1の西張り出しに連続するように接続する。各辺の平面形は一文字である。

構造 積み方に規則性が認められないため野面石を用いる乱積みと考える。ただし、張り出しより東側には円礫が用いられるのに対し、張り出し部分には角礫が用いられる。西側の張り出しに伴う出角には割石が用いられるが、小面と大面を意識して積み分けるような様相は認められなかった。

SW 5 (図32、33)

検出状況 M7～N10グリッドで検出した。SW3の南に位置しa段に伴う。

規模・形状 長さ約14.7m、高さ約0.59mである。平面形は一文字である。

構造 樹木により一部が崩壊しているが、残存する範囲では横目地が通ることから割石を用いた布積みと判断した。また、野面石を用いた間石が認められる。

SW 6 (図32、33)

検出状況 N10～Q14グリッドで検出した。SW1、SW4の南に位置し斜路に伴う。本遺構、SW7とSW1、SW4との間には幅0.8m～0.9mほどの斜路が認められる。

規模・形状 長さ約21.7m、高さ約1.34mである。平面形は一文字である。

構造 径15cm～30cmほどの大ぶりの野面石を用いた2～3段ほどの谷落とし積みの上に径10cm～20cmほどの小ぶりの野面石を用いた谷落とし積みをする。天端には長さ0.19cm～0.49cmほどの切石を並べる。

SW 7 (図32、33)

検出状況 Q14グリッドで検出した。SW6のやや南に奥まった位置に認められ、斜路に伴う。本遺構、SW6との間には幅0.8m～0.9mほどの斜路が認められる。

規模・形状 長さ約3.1m、高さ約0.42mである。平面形は一文字である。

構造 積み方に規則性は認められず、野面石を用いた乱積みと判断した。



写真8 SW1西張り出し(北西から)



写真9 SW1西張り出し、SW4張り出し(北東から)

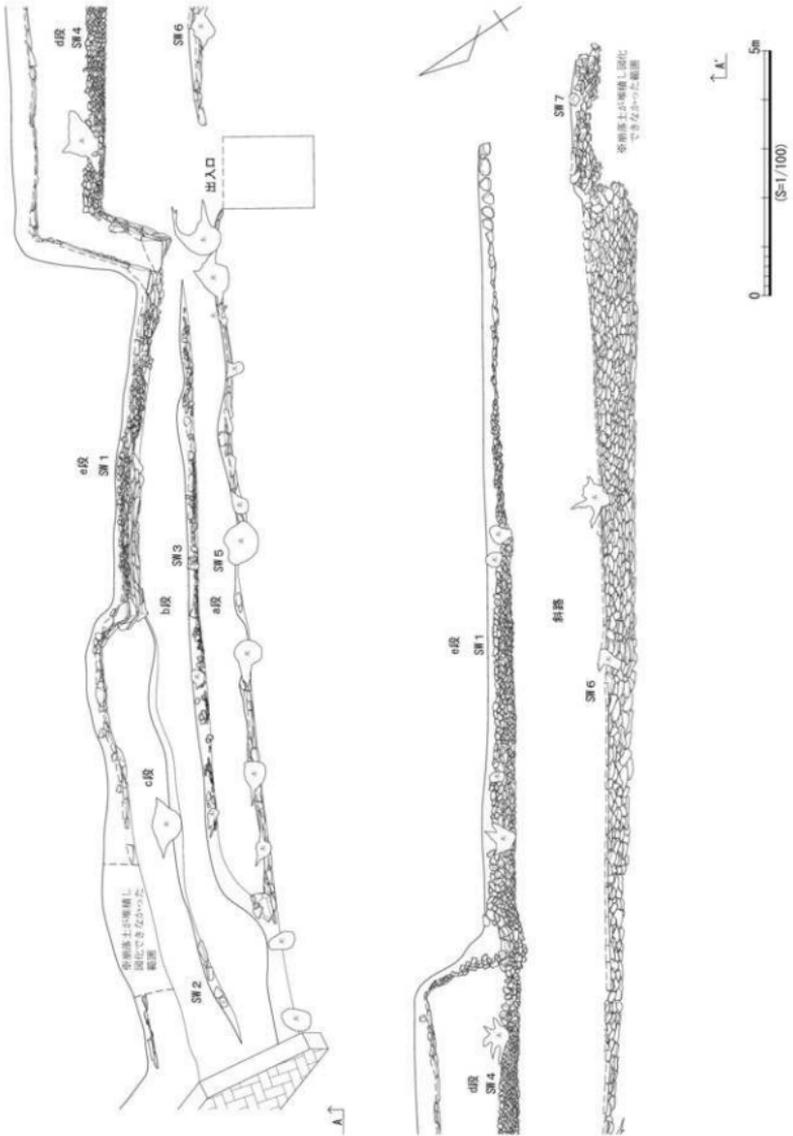


図32 SW 1～SW 7 平面図

第5節 表土・流土・攪乱出土遺物

ここでは、表土・流土・攪乱から出土した遺物のうち、近世に寺院が築かれる以前の様子を探る手がかりになるものや、近世から大正期まで建てていたSB1の時期と重なるものを中心に報告する。また、攪乱A(図51)からは多量の土器類がまとめて出土したため、あわせて報告する。

表土・流土出土遺物(図34~40)

44は土師器の壺である。外面に山形文が認められ、赤彩を施す。45~48は須恵器である。45は東山44号窯式の坏身である。46は須恵器の壺類の体部から底部の破片である。47は甕類の口縁部の破片である。48は甕で外面に平行タタキ目、内面に同心円当具痕が認められる。外面には自然釉が付着する。

当寺院は船来山古墳群の位置する郡府山に築かれることから、これらの土師器や須恵器(44~48)はもともと古墳に伴っていたものの可能性がある。

49~82は近世・近代陶磁器である。49は登窯第10小期の端反碗で、内外面に呉須絵を施す。50は肥前産でV期の碗である。外面に3ヶ所、呉須絵を施す。51は瀬戸・美濃産の碗の蓋である。内外面にコバルトによる手描きの文様を施す。52、53は瀬戸・美濃産の碗で、いずれも内外面にコバルトによる摺絵を施す。53は内面に型紙の合わせ目が確認出来る。54は登窯第10小期の箱形湯呑で、内外面に菊花と斜格子の呉須絵を施す。55は登窯11小期の湯呑で、内外面に草花の呉須絵を施す。56は瀬戸・美濃産の湯呑である。呉須による下絵付を施した後に、赤と緑の釉で上絵付を施す。明治期でも初め頃のものの可能性がある。57は登窯8~11小期の刷毛目皿である。58は肥前産の皿で内外面鳥や貝等の呉須絵を施す。底部外面には窯道具を外した痕跡が4箇所認められる。59は肥前産の皿で、外面に呉須絵を施すが、内面は硝子を用いて文様を施す点特徴的である。60は産地不明の皿で、内面に青色の釉で文様を施す。61は産地不明の角皿で、内面に青色の釉で手描きの文様を施す。高台は円形である。62と63は登窯第11小期以降の行平で把手が残存する。いずれも灰軸を施すが、口縁内面は拭い取る。63は把手の上面に浮き彫り、側面にV字の画花を施す。64は登窯第11小期の片口である。65、66はいずれも登窯第11小期の練鉢で、口縁部は外折する。65は体部下半を除き灰軸を施す。67は登窯第9小期の播鉢である。68は連房Ⅲ期の水注で体部に把手を貼り付けた痕跡がある。灰軸を施すが、口縁内面は拭い取る。69は登窯第11小期の汁次の蓋で、笠部より上面に灰軸を施す。70は復興織部の向付の蓋で、外面に梅と松の鉄絵を施す。内面には型打ち成形による布目の痕跡が認められる。71は登窯第8~11小期の蓋物で、内外面に灰軸が施すが、口縁端部と底部外面は拭い取る。底部外面には墨書が認められるが、釈読不能である。72は方形の蓋物で、底部外面の四隅に脚を有する。全体に灰軸を施すが、口縁端部、口縁内面、脚端部は拭い取る。類例から、もともとは上面に基盤の目の文様を彫った蓋と組み合わさっていたようである。73は登窯第7小期の灯明皿で、体部外面下半を除き錆軸を施す。内面に油と思われる光沢が認められ、油の臭いも残存する。74は産地不明の仏筒具で、外面に花の呉須絵を施す。75、76はいずれも連房Ⅲ期の花生であるが耳の形状が異なる。いずれも鉄軸を施すが、76の底部外面は拭い取る。76の体部外面は鉄軸の上に長石釉を散らす。75の頸部内面には絞りの痕跡がある。76の底部外面には回転糸切り痕が認められる。77は復興織部の手水鉢で、内外面に鉄絵を施し、緑釉を流す。底部は円形に打ち欠かれ、破面は丸みを帯びることから、底が抜かれた状態で使用されたと考える。78と79は登窯第11小期の火鉢である。接合はしなかったが、軸調や大

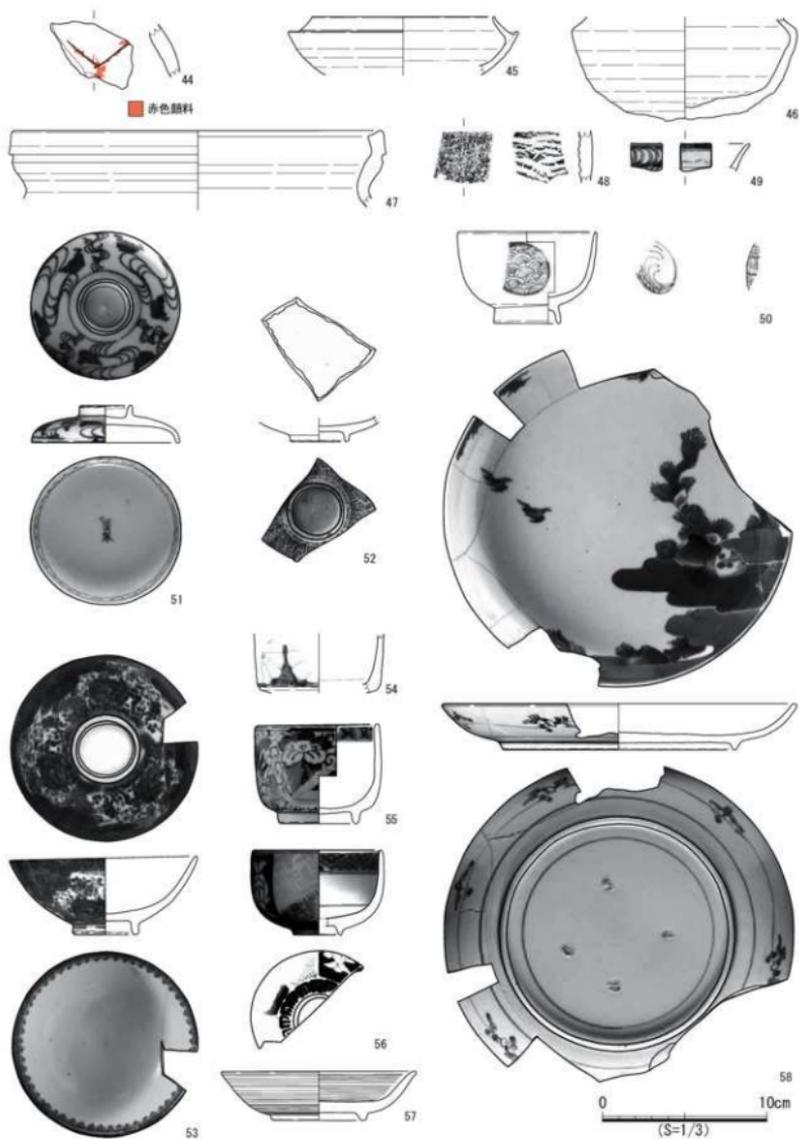


図34 表土・流土出土遺物実測図(1)



図35 表土・流土出土遺物実測図(2)

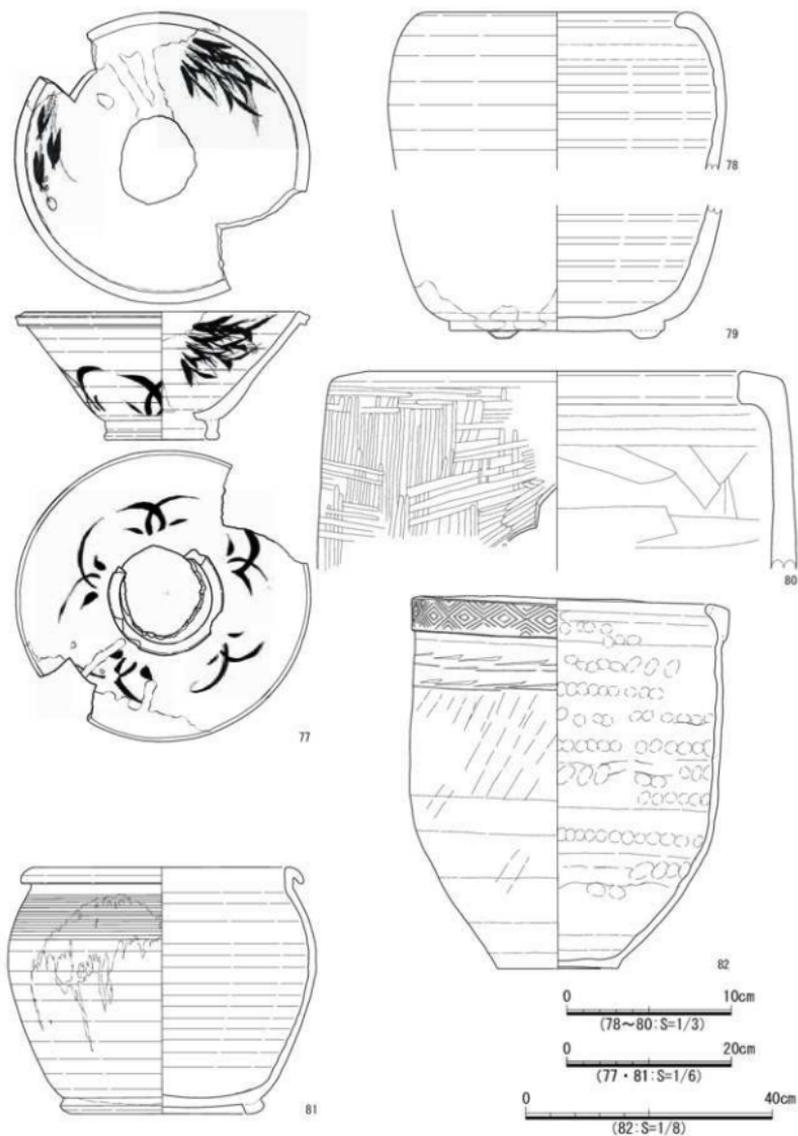


図36 表土・流土出土遺物実測図(3)

きさが類似することから同一個体の可能性がある。79の底部外面には平面形が円形の脚が3方向に貼り付けられ、脚の内側には円形の窯道具を外した痕跡が確認出来る。80は瓦器の埴埴類である。口縁端部は内側に折り返し、体部には火窓を設ける。81は登窯第10～11小期の甕で、底部外面以外に柿軸を施し、肩部に灰軸を流す。口縁は外折し、肩部には平行沈線を施す。底部内面には9箇所窯道具を外した痕跡が認められる。82は常滑のG類の甕で¹⁾、内外面の白泥状の釉を施す。口縁部と口縁部直下には線刻を施す。83～92は土師器である。83はD類のホウロクで外面に煤が付着する。84はF類の土師器のホウロクである。85は皿である。85は小形で器壁が薄く、内外面共にナデで丁寧仕上げ。86は内外面にナデを施し口縁端部は面をつける。87、88は内外面にナデを施し、口縁端部をつまみ上げる。89は内外面にナデを施す。口縁部は外反し、端部はつまみ上げる。90はやや大ぶり内外面はナデを施す。口縁の端部のつくりは磨滅により不明である。91は外面に指頭瓦痕とナデ、内面にナデが認められる。口縁端部は丸くおさめる。92は外面に指頭瓦痕とナデ、内面にナデが認められる。体部上半から外反し、口縁端部はつまみ上げる。93～96は瓦である。93と94は鳥食瓦である。瓦当文様は93が右巻、94が左巻の三ツ巴文である。95は鬼瓦で中央に宝珠文を飾る。裏面には屋根に取り付けられていた際の針金が残存していた。96は軒瓦で、瓦当文様の中心飾りは半菊文である。瓦当部に、「倉」の刻印が認められ山右と推定される。幕末頃のものの可能性がある。

97～100は石製品である。97、98は砥石である。97は2面、98は4面に砥面を確認した。いずれも両端は欠損する。99は五輪塔の空風輪である。100は墓石で、石材は砂岩である。大正期の庫裡の礎石に転用されていた。上部と背面は欠損する。欠損により全文を読むことは出来ないが、分かる範囲では「文化六己巳 三世徽山和尚禪師 十月十九日」と刻まれる。「三世」、「禪師」とそれ以外では字体が異なる点特徴的である。また、文字が刻まれた表面では全体的に敲打痕dを、底面では剥離痕と敲打痕a, bを確認出来る²⁾。底面は、水平になるように外側から剥離してから、中央の高まりを剥離する。その後、剥離だけでは取り除くことが出来なかった高まりを幅0.5cmほどの鑿による敲打でつぶす。表面は全体に敲打痕dが認められ、平滑に仕上げる。敲打痕は線状で、工具は刃部幅1.5cm程の平鑿が想定される。重複関係から表面の加工が最も新しい。なお、石材の右上には弧状の窪みがあり、周囲には被熱の痕跡が認められる。

101～109は金属製品である。101は鉄製の火箸で、基部に木質が遺存することから木柄が装着されていたと分かる。102～105は釘で、いずれも頭部が残存し、軸部は欠損する。102、103は軸部と頭部の境に明瞭な段が設けられるのに対し、104、105は直線的に続く。また、102、103より104、105は厚みがある。106は灰匙で、材質は錫と鉛を主成分とする合金である(第4章第3節)。柄の端部は欠損

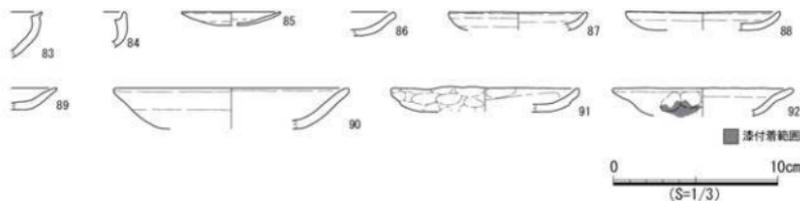
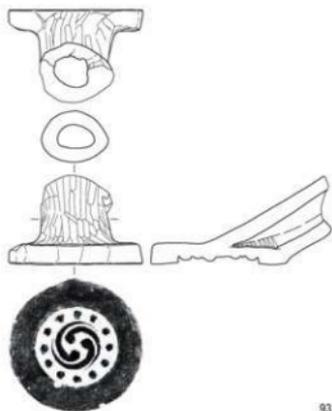
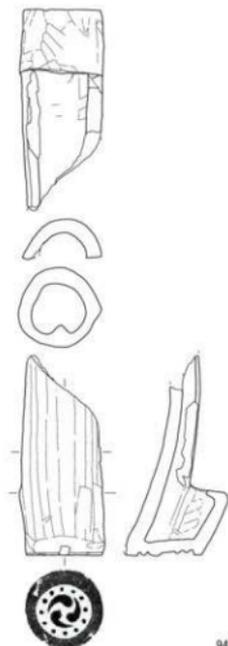


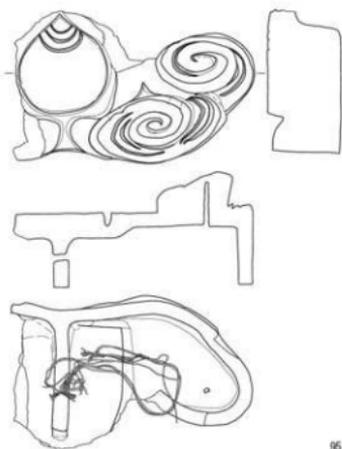
図37 表土・流土出土遺物実測図(4)



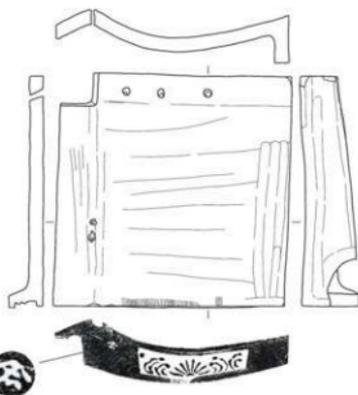
93



94



95



96

0 20cm
(S=1/6)

図38 表土・流土出土遺物実測図(5)

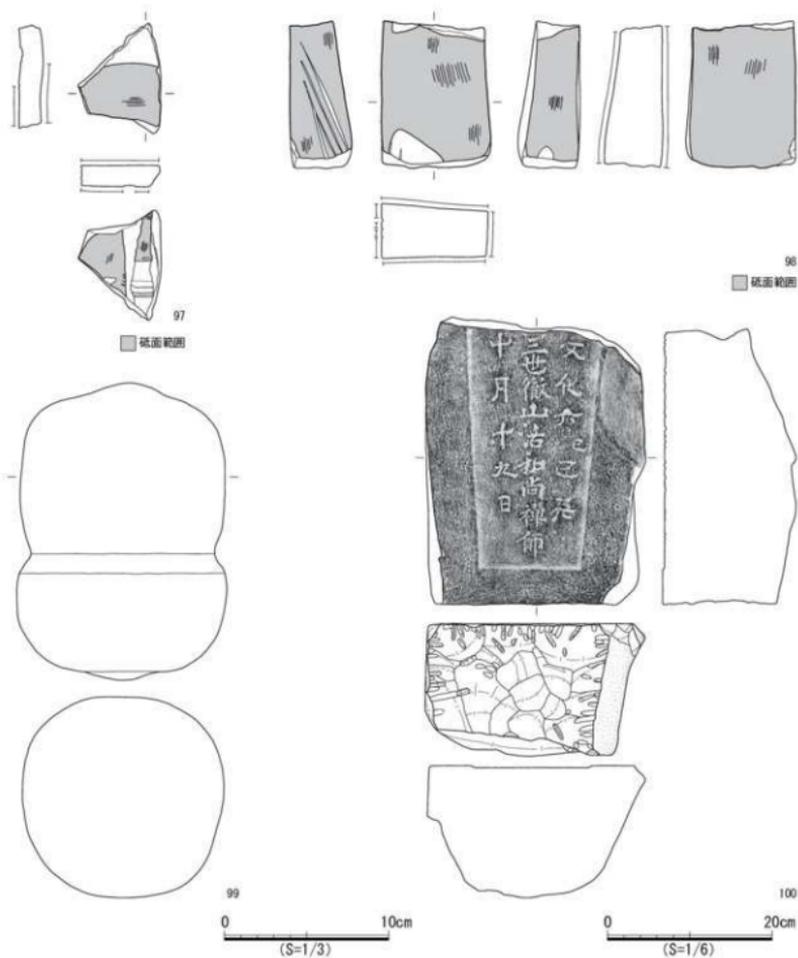


図39 表土・流土出土遺物実測図(6)

する。柄の上面に陰刻を施す。107～109は錢貨である。108、109は「寛永通宝」である。107は欠損するが「寛」と「通」の文字が遺存していることから「寛永通宝」と考える。

49～92の陶磁器や土師器は近世から明治にかけてのもので、SB1が建っていた時期に使用されていたものとする。日常生活に用いられた器種が中心を占め、供膳具には瀬戸・美濃産以外のものもあつた。数は少ないが、仏具や花生といった仏具も確認した。瓦は、近世若しくは大正期の建物に葺かれていたものと考えられ、特に軒棧瓦は創建期の建物に伴っていた可能性がある。石製品は砥石や火打石等の生活用具に加えて空風輪や墓石等、墓に関わる遺物を確認した。金属製品はいずれも近世のものと考えられ、SB1が建っていた時期に使用されていたものの可能性がある。

攪乱出土遺物 (図41)

110は産地不明の紅皿で、外面に鉄絵を施す。111は肥前産で、IV期の青磁染付の碗の蓋である。112は登窯第11小期以降の行平で、片口が残存する。灰軸を施すが口縁内面と底部外面は拭い取る。113は登窯第11小期以降の行平で、灰軸を施すが口縁内面は拭い取る。114は登窯第11小期以降の行平であ

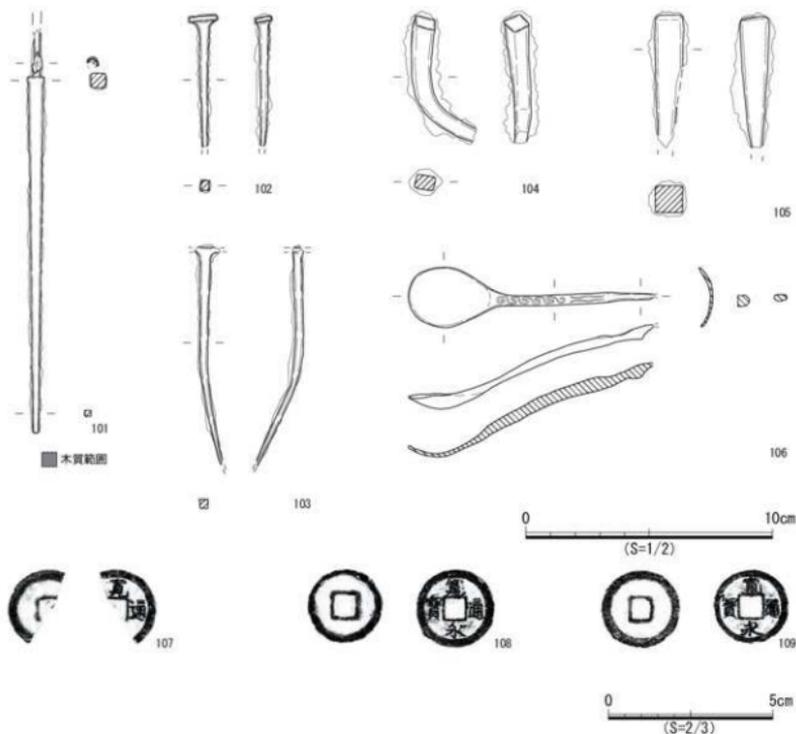


図40 表土・流土出土遺物実測図(7)

る。底部付近の破片で、脚が残存する。灰釉を施すが、外面の上部を除いて拭い取る。115は産地不明の土鍋である。耳部が残存し、径約0.6cmの円形の孔を穿つ。灰釉を施すが口縁内面と底部外面は拭い取る。外面には煤が付着する。116は登窯第8～9小期の練鉢である。灰釉を施すが体部外面の下半は拭い取る。117は登窯第10～11小期の土瓶で、体部外面に15条以上の平行沈線を施す。耳部が残存し、径約0.8cmの円形の孔を穿つ。118は連房Ⅲ期の徳利で、肩部に6条の平行沈線を施す。内面にははぼりの痕跡が認められる。119は連房Ⅴ期の完形の徳利である。120は登窯第10～11小期の刷毛目徳利で

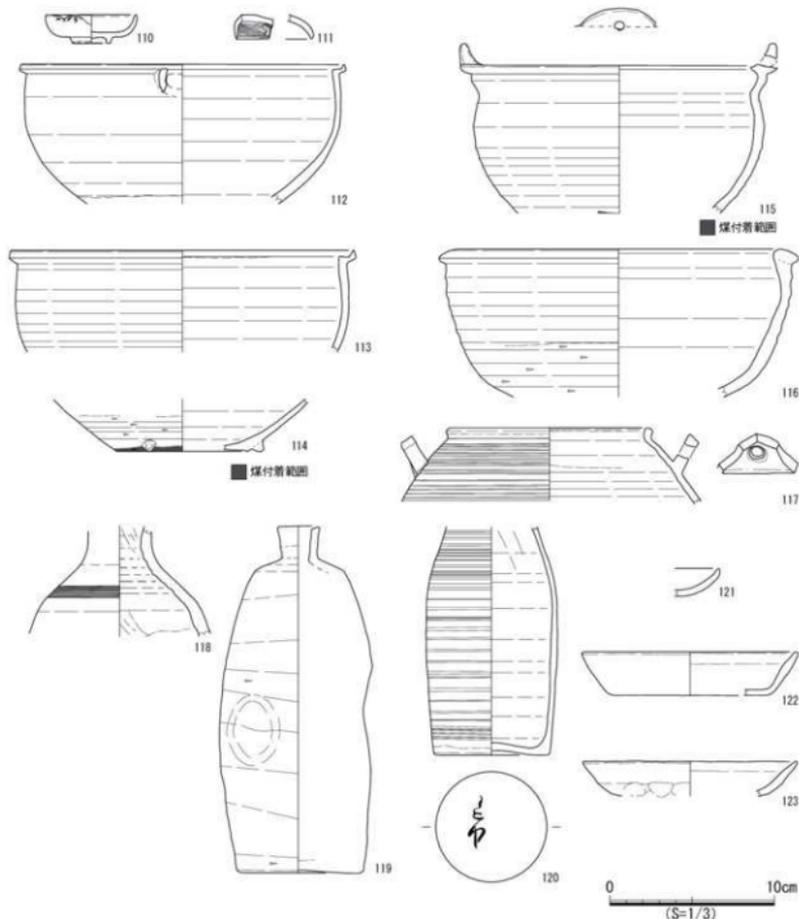


図41 擾乱出土遺物実測図

ある。底部外面に墨書が認められるが、釈読不能である。

121～123は土師器の皿である。121は内面にナデ、外面に指頭圧痕が認められる。口縁端部は丸くおさめる。122は底部から体部にかけて強く屈曲して立ち上がる。内外面にナデが認められる。123は内面にナデ、外面に指頭圧痕とナデが認められる。手づくねにより形成し、ナデで仕上げたと考える。

いずれも近世のもので、SB1が建っていた時期に使用されていたものと考えられる。瀬戸・美濃産以外のものも認められた。

攪乱A出土遺物（図42～44）

124は肥前産の広東碗の蓋で内外面に呉須絵を施す。125は産地不明の端反碗の蓋である。青色の釉による下絵付を施した後に赤と緑の釉による上絵付を施す。硝子継ぎが認められる。126は瀬戸・美濃産の碗の蓋である。内外面にコバルトによる摺絵を施し、内面には型紙の合わせ目が確認出来る。53と絵付けが類似し、分量からも対になる可能性がある。127は瀬戸・美濃産の碗で、外面には吹きつけにより文様が施される。128は登窯第11小期以降の行平の蓋で、上面に3条の平行沈線を描く。灰釉を施すが、つまみの端部と底部内面の中央は拭い取る。129は登窯第11小期の汁次である。灰釉を施すが、口縁端部と底部外面は拭い取る。130は登窯第10小期の播鉢である。内面に「囀」の印を2つ重ねて押印する。内面は使用痕が著しく、部分的に摺目が消え平滑になる。131は高浜産でⅦ期の戸付き焔炉でⅥ期に位置づけられる。外面は全体にミガキによって仕上げられ、体部には扉の開閉に用いる溝が設けられる。上面には輪状に煤が付着する。131は132と胎土が類似し、下面が斜めに削り出されることから、131の体部に設けられた溝に取り付けて使用されるように設計された戸付き焔炉の戸の可能性はある。133は羽釜で羽部より下に煤が付着する。体部外面には「冴」の印を押印する。第二次大戦中に鉄が不足した際の転用品と考えられる³¹。134は胎土が133と類似することから、133の底部の可能性

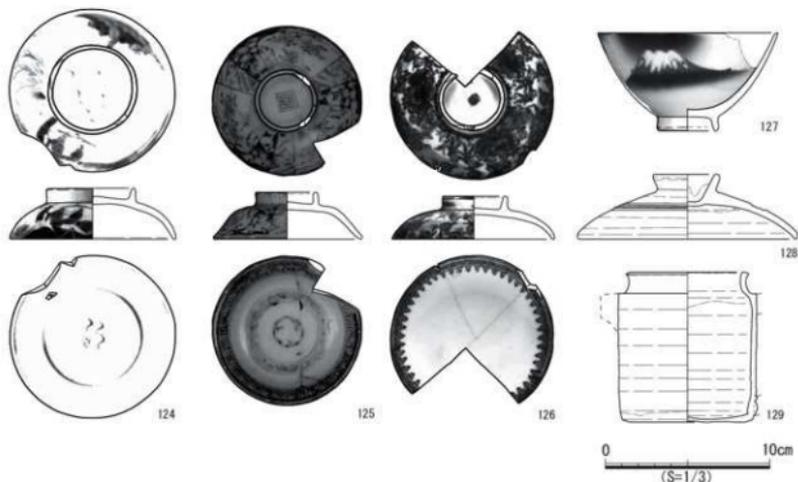


図42 攪乱A出土遺物実測図(1)

がある。外面には脚が残存し、煤が付着する。135は連房Ⅳ期の徳利で、内外面に灰釉を施す。136、137は連房Ⅴ期の徳利で、内外面に灰釉を施す。137の体部内面の釉葉は、口縁部側に向かってたれる。138は徳利の底部である。灰釉が施され、137と釉調が類似する。139は登窯第10～11小期の徳利で、灰釉の上から鉄釉を流す。高台端部の釉は拭い取られる。140は瀬戸産の明治期の徳利で、体部外面には鉄釉により「掘」と記される。「掘」の裏側にあたる面にも鉄釉による文字が認められるが、釈読不能である。141は蓋物の蓋で上面のみ灰釉を施す。142は登窯第8～11小期の蓋物で灰釉を施すが、底部外面と口縁端部は拭い取る。143、144は瀬戸・美濃産で磁器の灯明皿である⁴⁾。145は磁器の香炉で、体部外面から口縁部内面に瑠璃釉を施す⁵⁾。146は登窯11小期以降の小甕である。内外面に柿釉を施すが、底部外面は拭い取る。

擾乱Aからは127や133が出土したことため、これらの遺物は20世紀中頃にまとめて埋められた可能性がある。ただし、出土した遺物の時期には幅があり、近世後期から昭和期にかけてのものが認められる。

注

1) 常滑の甕の年代は、基本的に中野 1986 に従ったが、82 は権村 2004 に従った。

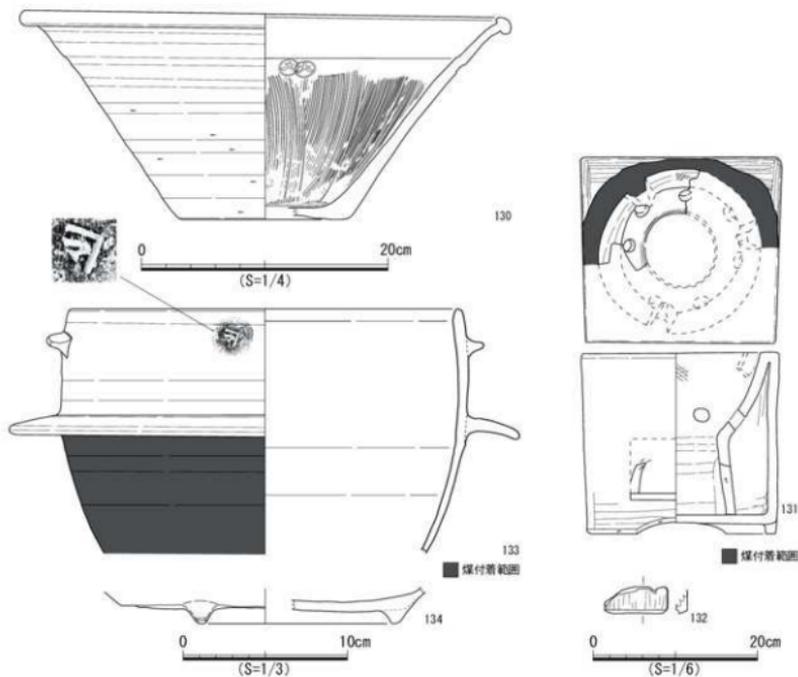


図43 擾乱A出土遺物実測図(2)

- 2) 加工痕の分類は小野木 2015 に従った。
- 3) 岐阜市歴史博物館の展示品に類例が認められる。
- 4) 沼津市歴史民俗資料館2000『大正2年の火災で焼失したセトモノ屋に店先』沼津市歴史民俗資料館資料集17 考古資料(3)に類例が認められる。
- 5) 4) に同じ

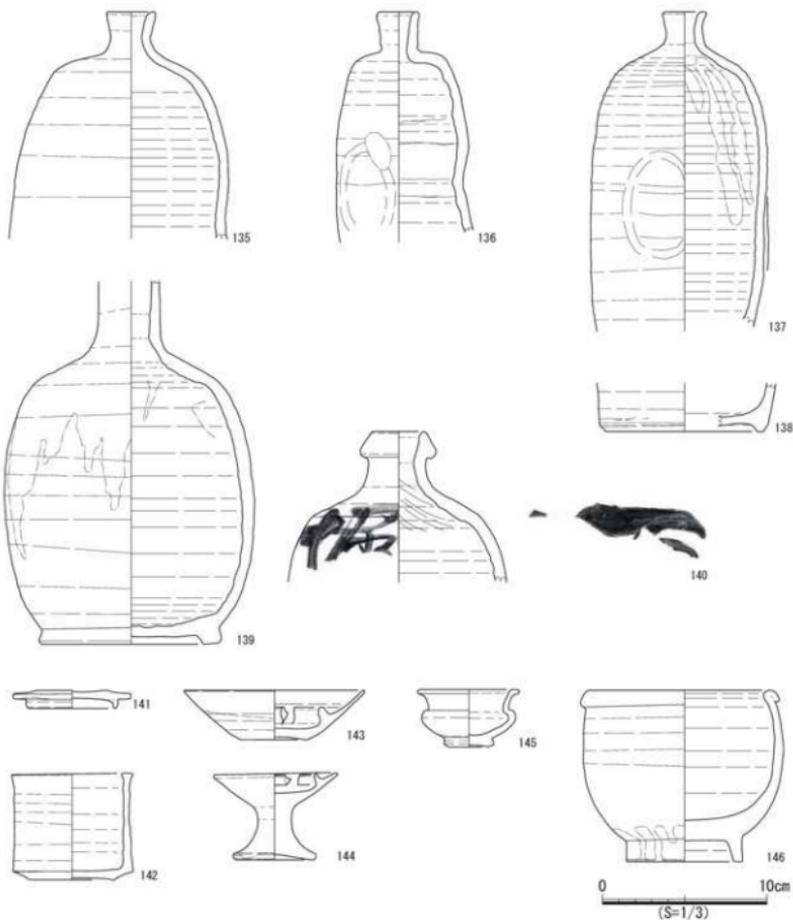


図44 横乱A出土遺物実測図(3)

表5 礎石建物柱穴一覧表

遺構名	地区割り		検出源	断面形	平面形	規模 (m)					出土遺物	備考	棟号	図版
	南北	東西				上端		下端		深さ				
						長軸長	短軸長	長軸長	短軸長					
SB1-P1	I	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.86	0.64	0.62	0.46	0.14		礎石掘付穴あり 根石あり	17	4
SB1-P2	I	9	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.72	0.60	0.62	0.46	0.16		礎石掘付穴あり 根石あり	17	4
SB1-P3	I	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.90	0.58	0.58	0.42	0.13		礎石掘付穴あり	17	4
SB1-P4	I~J	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.76	0.60	0.59	0.42	0.22		礎石掘付穴あり	17	4
SB1-P5	J	10	Ⅲ上	Ⅳ	c c	0.84	0.74	0.76	0.58	0.26		礎石掘付穴あり 根石あり	18	4
SB1-P6	J	10	Ⅲ上	I	b b	0.76	0.64	0.38	0.35	0.21		礎石掘付穴あり 根石あり(平面図なし)	18	4
SB1-P7	J	10	Ⅲ上	I	c c	0.88	0.60	0.56	0.23	0.17	H1, T2	礎石採取穴	18	5
SB1-P8	I	9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし 根石あり(平面図なし)		
SB1-P9	I	9	Ⅲ上	Ⅳ	d d	(0.68)	(0.46)	(0.45)	(0.28)	0.13		礎石採取穴	18	
SB1-P10	J	9	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.76	0.68	0.67	0.58	0.14		礎石掘付穴あり 根石あり	19	5
SB1-P11	J	10	Ⅲ上	Ⅱ	a a	0.43	0.40	0.37	0.31	0.14		礎石採取穴	19	
SB1-P12	J	10	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.67	0.38	0.35	0.24	0.18	T1	礎石採取穴	19	5
SB1-P13	I~J	8~9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P14	J	9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P15	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし 根石あり(平面図なし)		
SB1-P16	J	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.73	0.54	0.55	0.34	0.14		礎石掘付穴あり 根石あり	19	5
SB1-P17	J	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.60	0.52	0.52	0.37	0.13		礎石掘付穴あり 根石あり	20	6
SB1-P18	J	9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P19	J	10	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.73	0.64	0.62	0.44	0.26		礎石掘付穴あり 根石あり	20	6
SB1-P20	K	11	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし 根石あり(平面図なし)		6
SB1-P21	K	11	Ⅲ上	I	b b	0.22	0.22	0.51	0.40	0.10		礎石採取穴	20	
SB1-P22	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P23	J	8~9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P24	K	10	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P25	K	10~11	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P26	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P27	J	8~9	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.64	0.58	0.60	0.41	0.22		礎石掘付穴あり 根石あり	21	6
SB1-P28	J	9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P29	K	9	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P30	K	10	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.57	0.49	0.48	0.39	0.02		礎石採取穴	21	
SB1-P31	K	10	Ⅲ上	-	a a	0.78	0.56	0.50	0.33	0.22		礎石掘付穴あり 発掘作業時には標品と 判断していたため断面 図を作成していない		
SB1-P32	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P33	K	10	Ⅲ上	-	a a	0.80	0.54	0.56	0.40	0.13		礎石掘付穴あり 発掘作業時には標品と 判断していたため断面 図を作成していない		
SB1-P34	K	10~11	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P35	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P36	J	8	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P37	K	9	Ⅲ上	Ⅳ	b b	0.80	0.80	0.76	0.43	0.39		礎石掘付穴あり 根石あり	21	7
SB1-P38	K	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.82	0.59	0.59	0.44	0.42		礎石掘付穴あり 根石あり	22	7
SB1-P39	K	10	Ⅲ上	Ⅱ	d d	(0.72)	(0.38)	(0.36)	(0.31)	0.35		礎石掘付穴あり 根石あり	22	7
SB1-P40	K~L	10	Ⅲ上	Ⅱ	d a	(0.84)	(0.62)	(0.60)	(0.44)	0.36		礎石掘付穴あり 根石あり	22	8
SB1-P41	L	10	Ⅲ上	-	-	-	-	-	-	-		礎石掘付穴なし		
SB1-P42	K	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.73	0.54	0.53	0.45	0.23		礎石掘付穴あり 根石あり	23	8
SB1-P43	K	9	Ⅲ上	Ⅳ	a a	0.78	0.64	0.66	0.46	0.30		礎石掘付穴あり 根石あり	23	8
SB1-P44	K	10	Ⅲ上	I	a a	0.62	0.52	0.51	0.40	0.29		礎石採取穴 根石あり(平面図なし)	23	8

表6 礎石建物一覧表

遺構名	地区割り		検出面	柱間	規模 (m)		長軸方向	重複関係		押戻	図版
	南北	東西			桁行	梁行		新	旧		
SB1	I-1	8~11	Ⅲ上	3間×3間	8.50	5.55	N-61°-W	SB1-トイレ		10-23	1-8

表7 礎石建物基礎一覧表

遺構名	地区割り		検出面	規模 (m)			長軸方向	重複関係		出土遺物	押戻	図版
	南北	東西		長軸長	短軸長	高さ		新	旧			
SB1-基礎	I-1	8~11	Ⅲ上	16.0	9.40	0.30	N-60°-W	SK17, SK18		H61, P17, Y11, T29, I12, S4	10-16	1-3

表8 礎石建物トイレ一覧表

遺構名	地区割り		検出面	規模 (m)			長軸方向	重複関係		出土遺物	押戻	図版
	南北	東西		長軸長	短軸長	深さ		新	旧			
SB1-トイレ	I	9	Ⅱ基	2.10	1.55	0.48	N-60°-W	SB1-P1, P2, P3		H1, T6, D2	25	巻2

表9 基礎一覧表

遺構名	地区割り		検出面	規模 (m)			長軸方向	重複関係		出土遺物	押戻	図版
	南北	東西		長軸長	短軸長	高さ		新	旧			
基礎1	L-M	13	Ⅱ基	4.8	2.2	0.76	N-26°-E	SK28, SK29, SK30, SK31, SK32, SK33, SK34, SK35, SK36, SK37, SK38, SK39, SK40, SK41, SK42, SK43, SK44, SK45, SK46		T22, D6	26	9

表10 溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	規模 (m)				深さ	重複関係		出土遺物	押戻	図版
	南北	東西				上端		下端			新	旧			
						長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SD1	I	7~8	Ⅱ基	f	VI	(4.25)	(0.65)	(3.20)	(0.18)	0.14					
SD2	I	9~10	Ⅱ基	f	VI	(6.35)	(0.45)	(6.09)	(0.27)	0.09	SK9, SK10	H3		28	
SD3	K-0	12~14	Ⅱ基	a~c	IV	(24.20)	0.54	(24.20)	0.40	0.25		H1, T1	28	9	
SD4	N	12	Ⅱ基	a	IV	(1.38)	0.23	(1.35)	0.15	0.09					
SD5	K	11~12	Ⅱ基	a	I	(2.02)	0.30	(2.02)	0.11	0.05					
SD6	K	11	Ⅱ基	a	IV	(2.11)	0.34	(2.08)	0.23	0.05	SD7				
SD7	K	11	Ⅱ基	a	IV	(3.12)	0.44	(3.12)	0.29	0.11	SD6		T2	29	

表11 土器埋設遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	底面形	規模 (m)			重複関係		出土遺物	押戻	図版
	南北	東西					上端	下端	深さ	新	旧			

表12 土坑一覽表

遺構名	地区割り		検出面	地層	断面形	底面形	規模 (m)				重複関係		出土遺物	棒図	図版	
	南北	東西					上端		下端		深さ	新				旧
							長軸長	短軸長	長軸長	短軸長						
SK1	G	10	Ⅱ基	c	I	a	a	0.32	0.29	0.20	0.17	0.28				
SK2	G	10	Ⅱ基	d	V	d	d	0.25	(0.15)	0.20	(0.12)	0.30				
SK3	G	10	Ⅱ基	d	Ⅱ	b	b	0.32	0.28	0.27	0.22	0.10		H2	31	
SK4	G	10	Ⅱ基	a	I	a	a	0.22	0.19	0.12	0.11	0.06				
SK5	G	10	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.24	0.21	0.20	0.15	0.04				
SK6	H	9	Ⅱ基	a	Ⅱ	c	c	0.64	0.18	0.53	0.14	0.08				
SK7	H	9	Ⅱ基	a	I	a	a	0.37	0.29	0.20	0.14	0.12				
SK8	G-Ⅱ	9	Ⅱ基	d	I	a	a	0.37	0.25	0.19	0.14	0.11		H1		
SK9	I	9	Ⅱ基	a	Ⅳ	d	d	0.53	(0.41)	0.40	(0.31)	0.03	SD2			
SK10	I	9	Ⅱ基	a	Ⅳ	d	d	0.52	(0.32)	0.44	(0.27)	0.03	SD2			
SK11	J	10	Ⅱ基	a	V	a	a	0.24	0.19	0.07	0.06	0.04				
SK12	K	8	Ⅱ基	d	Ⅳ	a	a	0.32	0.25	0.16	0.15	0.10				
SK13	K	8	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.45	0.41	0.32	0.31	0.03				
SK14	K	8	Ⅱ基	f	Ⅳ	d	d	0.39	0.38	0.31	0.31	0.02	SK13	SK14		
SK15	K	8	Ⅱ基	a	Ⅲ	a	a	0.34	0.33	0.13	0.11	0.04				
SK16	K	8	Ⅱ基	a	Ⅲ	a	a	0.42	0.41	0.24	0.18	0.06				
SK17	K	10-11	Ⅱ基	b	Ⅱ	a	a	0.39	0.25	0.33	0.19	0.05				
SK18	K	10	Ⅱ基	d	V	a	a	0.34	0.28	0.17	0.11	0.10		T2		
SK19	O	14	Ⅱ基	a	I	a	a	0.26	0.25	0.15	0.12	0.03				
SK20	O	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.26	0.21	0.17	0.15	0.06				
SK21	N	12	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.34	0.30	0.17	0.15	0.07				
SK22	N	12	Ⅱ基	a	Ⅱ	a	a	0.34	0.33	0.20	0.24	0.14				
SK23	M	12	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.27	0.26	0.20	0.19	0.02		T1		
SK24	M	12	Ⅱ基	d	I	a	a	0.26	0.25	0.14	0.14	0.07				
SK25	M	11	Ⅱ基	d	Ⅳ	a	a	0.35	0.31	0.19	0.15	0.11				
SK26	M	11	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.18	0.17	0.10	0.07	0.04				
SK27	M	11	Ⅱ基	a	I	a	a	0.17	0.13	0.07	0.05	0.11				
SK28	L	13	Ⅱ基	a	I	a	a	0.29	0.29	0.19	0.19	0.06				
SK29	L	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.26	0.22	0.17	0.15	0.03				
SK30	L	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.38	0.31	0.24	0.21	0.03				
SK31	L	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.29	(0.24)	0.22	(0.20)	0.03				
SK32	L	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.30	0.29	0.21	0.23	0.05				
SK33	M	13	Ⅱ基	a	I	a	a	0.14	0.12	0.08	0.07	0.02				
SK34	L-M	13	Ⅱ基	c	Ⅳ	a	a	0.52	0.29	0.42	0.22	0.07				
SK35	M	13	Ⅱ基	d	I	a	a	0.16	0.13	0.09	0.07	0.07		T1	31	
SK36	M	13	Ⅱ基	a	I	a	a	0.22	0.19	0.13	0.13	0.03				
SK37	M	13	Ⅱ基	a	Ⅲ	a	a	(0.25)	0.22	0.12	0.11	0.04				
SK38	M	13	Ⅱ基	d	Ⅳ	a	a	0.25	0.24	0.17	0.15	0.07				
SK39	M	13	Ⅱ基	d	Ⅳ	a	a	0.40	0.25	0.27	0.20	0.06		T2		
SK40	M	13	Ⅱ基	d	Ⅳ	a	a	0.11	0.10	0.06	0.06	0.05				
SK41	M	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.28	0.28	0.21	0.21	0.04				
SK42	M	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.22	0.19	0.18	0.06	0.04				
SK43	M	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.33	0.25	0.20	0.17	0.04				
SK44	M	13	Ⅱ基	a	V	a	a	0.25	0.21	0.16	0.18	0.05				
SK45	M	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.35	0.32	0.28	0.26	0.06				
SK46	M	13	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.32	0.28	0.24	0.20	0.05				
SK47	M	11	Ⅱ基	d	I	a	a	0.32	0.31	0.15	0.18	0.15				
SK48	L	11	Ⅱ基	d	I	a	a	0.31	0.27	0.14	0.11	0.09		H1	31	
SK49	L	11	Ⅱ基	a	Ⅳ	a	a	0.28	0.26	0.14	0.12	0.18				
SK50	L	12	Ⅱ基	a	Ⅱ	c	c	0.60	0.34	0.30	0.26	0.11				
SK51	L	12	Ⅱ基	a	Ⅲ	a	a	0.45	0.39	0.22	0.19	0.10				
SK52	L	12	Ⅱ基	c	Ⅳ	a	a	0.42	0.40	0.19	0.18	0.10				

表13 石垣・石列一覽表

遺構名	地区割り		検出面	規模 (m)		棒図	図版
	南北	東西		長さ	高さ		
SW1	L-P	7-14	Ⅱ基		41.9	0.82	図・30 巻2
SW2	L	7	Ⅱ基		2.5	0.13	図・30 巻2
SW3	M-N	8-10	Ⅱ基		10.8	0.24	図・30 巻2
SW4	N-P	10-14	Ⅱ基		8.8	1.42	図・30 巻2
SW5	M-N	7-10	Ⅱ基		14.7	0.59	図・30 巻2
SW6	N-Q	10-14	Ⅱ基		21.7	1.34	図・30 巻2
SW7	Q	14	Ⅱ基		3.1	0.42	図・30 巻2
SW8	K-L	12	Ⅱ基		3.5	0.14	

表14 土器類観察表(1)

図録 番号	種別	器種	出土位置		大きさ (cm)	口縁部 残存率 (X/12)	胎土	焼 成	色調 (内面) (外面) (断面)	器蓋設置 内面/外面	時期	図 録 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号								
1	須恵器	杯蓋	K10	S81-基層	- b	- (3.7)	0.5	雲	良好 N 8/ N 3/ 7.06 6/2	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラクスリ	真山11	24 10
2	須恵器	杯蓋	K9	S81-基層	- b	03.23 (2.5)	1.4	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	2.03 7/1 2.03 7/1 2.03 7/3	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラクスリ	榎ヶ池	24 10
3	須恵器	杯蓋	J10	S81-基層	- a	(12.4) (2.8)	1.8	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	7.03 5/1 7.03 5/1 7.03 5/1	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラクスリ	真山44	24 10
4	須恵器	杯身	K10	S81-基層	- a	(14.0) (2.1)	1.0	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 N 6/ 0Y 4/1 0Y 4/1	回転ナデ/回転ナデ	榎ヶ池	24 10
5	須恵器	高杯	K10	S81-基層	- a	(15.2) (4.3)	-	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	N 6/ 0Y 6/1 0Y 7/1	回転ナデ/回転ナデ	-	24 10
6	須恵器	高杯	J8	S81-基層	- b	(15.6) (3.5)	2.0	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	0Y 7/1 0Y 4/1 0Y 7/1	回転ナデ/回転ナデ	-	24 10
7	山系陶	甕	K8	S81-基層	- b	(16.7) (2.5)	1.0	やや粗(φ1mm以下 の長石、石英、 チャートを含む)	良好 2.03 7/2 2.03 7/2 2.03 7/2	回転ナデ/回転ナデ	-	24 10
8	山系陶	甕	K10	S81-基層	- a	(7.4) (2.6)	-	やや粗(φ3mm以下 の長石、チャート を含む)	良好 2.03 7/2 2.03 7/2 2.03 7/2	回転ナデ/回転ナ デ、回転糸切瓶、貼 付台高台	尾屋型 第5型式	24 10
9	磁器 (瀬戸)	碗(反碗)	J10	S81-基層	- b	- (1.1)	1.0	雲	良好 (N 8 透明釉) (N 8 透明釉) 7.03 8/1	回転ナデ/回転ナデ	豊室 第10小期	24 10
10	磁器 (肥前)	湯呑	K10	S81-基層	- b	- (2.9)	-	雲	良好 (N 8 透明釉) (N 8 透明釉) 7.03 8/1	回転ナデ/回転ナデ	IV～V期	24 10
11	陶器 (瀬戸)	鉄鉢鉢	K11	S81-基層	- b	- (2.7)	-	雲(φ1mm以下の長 石、チャートを含 む)	良好 2.03 7/4(透明釉) 2.03 7/4(透明釉) 2.03 7/4	回転ナデ/回転ナデ	豊室 第1～5小期	24 10
12	陶器 (瀬戸)	行平 (蓋)	J10	S81-基層	- a	- (1.3)	-	雲(φ1mm以下の チャート、藍目を わずかに含む)	良好 0Y 6/2(透明釉) 0Y 6/2(透明釉) 0Y 6/2	回転ナデ/回転ナデ	豊室 第11小期	24 10
13	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明蓋	J10	S81-基層	- b	(11.0) (5.0) 2.2	2.5	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 0Y 8/1(7.03 7/2 灰釉) 0Y 6/4(0Y 8/1 灰釉) 0Y 8/1	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラクスリ	豊室 第10～11小期	24 10
14	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明蓋	J10	S81-基層	- c	10.6 4.5 2.1	3.8	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 0Y 8/4(2.03 5/2 灰釉) 0Y 6/3(2.03 5/2 灰釉) 2.03 5/2	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラクスリ	豊室 第10～11小期	24 10
15	土器器	甕	J8	S81-基層	- b	- 0.7	1.0	雲(φ1mm以下の雲 母をわずかに含む)	良好 0Y 8/4 0Y 8/4 0Y 8/4	ナデ/ナデ	-	24
16	土器器	甕	J8	S81-基層	- b	- 0.7	1.0	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 0Y 8/4 0Y 8/4 0Y 6/1	ナデ/指図圧痕	-	24
17	土器器	甕	K10	S81-基層	- a	- 1.2	1.0	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 7.03 8/1 7.03 7/1 7.03 8/1	ナデ/ナデ	-	24
18	土器器	甕	K8	S81-基層	- b	(11.2) (7.0) 1.1	1.1	雲(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好 2.03 8/4 2.03 8/4 2.03 4/1	ナデ/指図圧痕	-	24
19	土器器	甕	K10	S81-基層	- c	(7.8) (4.6) 1.2	1.1	やや粗(φ1mm以下 の長石をわずかに 含む)	良好 0Y 8/3 0Y 8/2 0Y 8/1	ナデ/指図圧痕	-	24
25	磁器 (瀬戸)	碗(蓋)	-	S81-PT	① a	(9.8) (1.4)	1.0	雲	良好 2.03 8/1(透明釉) 2.03 8/1(透明釉) 2.03 8/2	回転ナデ/回転ナデ	明治以降	24 10
26	陶器 (常滑)	甕	-	S81- トイレ	① ②	52.4 19.0 47.0	12.0	やや粗(φ5mm以下 の長石、チャート を含む)	良好 2.03 5/6 2.03 5/6 2.03 7/3	回転ナデ、ナデ、 輪埴瓶、指図圧痕/ 回転ナデ、板ナデ	19世紀 前半～半頃	25 11
27	陶器 (常滑)	甕	-	S81- トイレ	① ②	33.9 14.6 34.4	10.0	雲(φ1mm以下の長 石、チャートを含 む)	良好 0Y 6/6 0Y 6/6 0Y 6/6	輪埴瓶、指図圧痕、 ナデ/板ナデ、ナデ	18世紀 前半～半頃	25 11
28	陶器 (瀬戸)	手水鉢	-	S81- トイレ	② a	(19.0) (8.5)	-	雲(φ1mm以下の長 石、チャートを含 む)	良好 0Y 8/2(5.03 8/2 灰釉) 0Y 8/2(5.03 4/1 灰釉) (2.03 8/3 5.03 5.03 灰釉) (5.03 6/1 上野産土) 0Y 8/2	回転ナデ/回転ナ デ、削り出し高台	豊室 第10～11小期	25 10
29	磁器 (肥前)	甕	-	基層1	① a	(5.5) (2.9)	-	雲	良好 2.03 8/1(透明釉) 2.03 8/1(透明釉) 0Y 7/2	回転ナデ/回転ナデ	V期	27 10

表15 土器類観察表(2)

調査 番号	種別	器種	出土位置			大きさ (cm)	口縁部 残存率 (%)	胎土	焼 成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調整 内面/外面	時期	発 掘 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号	層位								
30	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	-	高塚1	① a	4.3 (1.7)	-	密(ϕ 1mm以下の長石、チャートを含む)	良好	10YR 7/3(内) 7/2 灰緑 10YR 7/3(外) 7/2 灰緑 10YR 7/3	回転ナブ/回転ナブ、削り出し高台	豊栄 第10~11小段	27 10
31	陶器 (産地不明)	行平 (蓋)	-	高塚1	② 1	(14.6) (1.9)	2.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	5YR 5/6(内) 5/6 透明緑 7.5YR 6/4(外) 7/2 灰緑 7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	回転ナブ/回転ナブ	-	27 10
32	陶器 (瀬戸)	土瓶	-	高塚1	① a	-	-	密(ϕ 1mm以下の長石、チャートを含む)	良好	7.5Y 7/2(内) 7/2 灰緑 7.5Y 7/2(外) 7/2 灰緑 2.5Y 7/3	回転ナブ/回転ナブ	豊栄 第10~11小段	27 10
33	磁器 (瀬戸・美濃)	灯明臺	-	高塚1	③ 1	(10.4) (4.6) 1.8	1.1	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y 6/3(内) 5YR 4/6 暗緑 2.5Y 7/6(外) 5YR 5/6 暗緑 2.5Y 6/3	回転ナブ/回転ナブ、 回転ヘラケズリ	豊栄 第8~9小段	27 10
34	陶器 (瀬戸)	透瓶	-	高塚1	② 1	-	-	密(ϕ 1mm以下の長石、チャートを含む)	良好	10YR 7/3(内) 4/3 鉄緑 10YR 7/3(外) 4/3 鉄緑 10YR 7/3	回転ナブ/回転ナブ	豊栄 第3~4小段	27 10
35	陶器 (復興磁器)	平水鉢	-	高塚1	② 1	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石、チャートを含む)	良好	10YR 8/3(内) 5Y 8/2 (上野成) 2.5YR 3/4 鉄緑 (上野成) 1 10YR 8/3(外) 5Y 8/2 (上野成) 2.5YR 3/4 鉄緑 10YR 8/3	回転ナブ/回転ナブ	-	27 10
36	土師器	高杯	F9	S02	① a	-	1.0	やや粗(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	10YR 7/6 10YR 6/6 10YR 7/6	ナブ/摩滅により不明	-	28
37	土師器	皿	F9	S02	② a	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y 8/4 2.5Y 8/4 2.5Y 5/1	ナブ/ナブ	-	28 11
38	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	M3	S03	- c	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	-N 8/ 透明緑 -N 8/ 透明緑 2.5Y 8/2	回転ナブ/回転ナブ	明治以降	28 11
39	陶器 (瀬戸)	行平	K11	S07	① -	(8.8) (1.9)	-	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	5Y 8/4(内) 5YR 3/6 暗緑 10YR 8/4 2.5Y 8/4	回転ナブ/回転ヘラケズリ	-	29 11
40	陶器 (常陸)	鎌洗鉢	-	SJ1	① ②	48.5 19.2 22.3	4.0	密(ϕ 10mm以下の長石、チャートを含む)	良好	2.5Y 8/6 2.5Y 4/3 5YR 6/6	輪削製、板ナブ、 ナブ/板ナブ、ナブ	19世紀末	30 11
41	土師器	皿	-	SK3	② a	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y 8/2 2.5Y 8/2 2.5Y 4/1	摩滅により不明/ 指環圧痕	-	31
42	陶器 (瀬戸)	行平	-	SK35	① 1	-	-	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y 7/4(内) 5/4 灰緑 10YR 8/4(外) 6/6 灰緑 2.5Y 7/4	回転ナブ/回転ナブ、 回転ヘラケズリ	豊栄 第11小段以降	31 11
43	土師器	皿	-	SK48	② 1	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	不 良	2.5Y 8/4 2.5Y 8/3 2.5Y 8/4	ナブ/指環圧痕	-	31
44	土師器	蓋	F9	-	- Ⅱ	-	-	やや粗(ϕ 1mm以下の長石を含む)	不 良	10YR 8/3 10YR 8/3 10YR 8/3	ナブ/ナブ	-	34
45	須恵器	杯身	F8	-	- Ⅱ	(11.6) (3.7)	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	5Y 8/ 6 7.5YR 8/2	回転ナブ/回転ナブ	東山44	34
46	須恵器	瓶頸	O9	-	- Ⅱ	7.5 (6.4)	-	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	5YR 5/3 5YR 3/3 5B 4/1	回転ナブ/回転ナブ、 回転ヘラケズリ	-	34
47	須恵器	壺頸	-	-	- Ⅰ	(22.4) (3.1)	1.2	密(ϕ 5mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y 6/1 2.5Y 6/1 2.5Y 7/1	回転ナブ/回転ナブ	-	34
48	須恵器	甕	L11	-	- Ⅱ	-	-	密(ϕ 5mm以下の長石を多く含む)	良好	10Y 6/2 7.5Y 7/1 10Y 6/2	平行タタキ目/同心 円当具痕	-	34
49	陶器 (瀬戸)	深込碗	L10	-	- Ⅱ	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	-N 8/ 透明緑 -N 8/ 透明緑 7.5Y 8/1	回転ナブ/回転ナブ	豊栄 第10小段	34 12
50	磁器 (肥前)	碗	L11	-	- Ⅱ	(8.4) 4.9 5.6	3.3	密	良好	2.5G 8/1(透明緑) 2.5G 8/1(透明緑) 8Y 8/ 1	回転ナブ/回転ナブ、 削り出し高台	V 層	34 12
51	磁器 (瀬戸・美濃)	碗(蓋)	-	-	- Ⅱ	8.9 2.3	11.1	密	良好	5Y 8/1(透明緑) 5Y 8/1(透明緑) 5Y 8/1	回転ナブ/回転ナブ	明治以降	34 12
52	磁器 (瀬戸・美濃)	碗	M3	-	- Ⅱ	3.3 (1.5)	-	密(ϕ 1mm以下のチャートを含む)	良好	10YR 8/2(透明緑) 10YR 8/2(透明緑) 10YR 8/2	回転ナブ/回転ナブ、 削り出し高台	明治以降	34 12

表16 土器類観察表(3)

編年番号	種別	器種	出土位置		大きさ (cm)	口縁部 残存率 (X/12)	胎土	焼成	色調 (内面) (外面)	器蓋設置 内面/外面	時期	埋 没 番 号	図 面 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号									
53	磁器 (瀬戸・美濃)	碗	-	-	11.3 3.9 4.8	11.2	密	良好 良好	SY 8/1(透明釉) SY 8/1(透明釉) SY 8/1	回転ナデ/回転ナデ	明治以降	34	12
54	陶器 (瀬戸)	湯呑	J10	-	-	-	密	良好	10Y 8/1(透明釉) 10Y 8/1(透明釉)	回転ナデ/回転ナデ 、回転ヘラズリ	室家 第10小期	34	12
55	磁器 (瀬戸)	湯呑	-	-	7.4 4.7 6.1	1.1	密	良好	(N 8/ 透明釉) 2.5Y 8/1(N 8/ 透明釉) 7.5Y 8/1	回転ナデ/回転ナデ 、削り出し高台	室家 第11小期	34	12
56	磁器 (瀬戸・美濃)	湯呑	-	-	(7.8) (2.8) 5.2	4.6	密	良好	2.5G 8/1 2.5G 8/1 10Y 8/1	回転ナデ/回転ナデ	明治以降	34	12
57	陶器 (瀬戸)	刷毛目 皿	-	-	11.8 3.4 3.0	12.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 7/4(7.5Y 6/2 鉄釉) 2.5Y 7/4(7.5Y 6/2 鉄釉) 2.5Y 8/4	回転ナデ/回転ナデ 、削り出し高台	室家 第8~11小期	34	
58	磁器 (肥前)	皿	K9	-	(21.4) 14.1 2.8	6.5	密	良好	(N 8/ 透明釉) 10Y 8/1(N 8/ 透明釉)	回転ナデ/回転ナデ 、削り出し高台	-	34	12
59	磁器 (肥前)	皿	K9	-	11.8 14.0 (1.3)	12.0	密(φ1mm以下のチ ャートを含む)	良好	2.5Y 7/3(透明釉) 2.5Y 7/3(透明釉)	回転ナデ/回転ナデ	-	35	12
60	磁器 (産地不明)	皿	-	-	6.3 (1.4)	-	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 8/1(透明釉) 2.5Y 8/1(透明釉)	回転ナデ/回転ナデ	-	35	12
61	磁器 (産地不明)	角皿	-	-	3.1	1.0	密	良好	(10Y 8/1 透明釉) 8.5/ (10Y 8/1 透明釉)	ナデ/ナデ、貼付成 形	-	35	12
62	陶器 (瀬戸)	行平 (把手)	-	-	(6.2) (4.6)	1.5	密	良好	2.5Y 8/2(5Y 7/2 鉄釉) 7.5Y 8/3(5Y 7/2 鉄釉) 8.5/	回転ナデ/回転ナデ	室家 第11小期以降	35	13
63	陶器 (瀬戸)	行平 (把手)	-	-	(4.4)	1.0	密	良好	2.5Y 7/3(2.5Y 6/4 鉄釉) 2.5Y 7/3(2.5Y 6/4 鉄釉)	回転ナデ/回転ナデ	室家 第11小期以降	35	13
64	陶器 (瀬戸)	片口	K11	-	(20.6) (5.2)	3.7	今やね(φ1mm以下 の長石をわずかに 含む)	良好	5Y 8/4(5Y 8/4 鉄釉) 2.5Y 8/2(5Y 8/4 鉄釉) 2.5Y 8/2	回転ナデ/回転ナデ	室家 第11小期	35	13
65	陶器 (瀬戸)	練鉢	M10	-	(21.4) (9.3)	1.0	今やね(φ1mm以下 の長石をわずかに 含む)	良好	5Y 8/4(5Y 6/3 鉄釉) 5Y 8/4(5Y 6/3 鉄釉) 5Y 8/4(5Y 6/3)	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラズリ	室家 第11小期	35	13
66	陶器 (瀬戸)	練鉢	L11	-	(5.2)	1.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	5Y 7/4(5Y 8/4 鉄釉) 5Y 7/4(5Y 8/4 鉄釉)	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラズリ	室家 第11小期	35	13
67	陶器 (瀬戸)	練鉢	-	-	(4.1)	1.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	5Y 8/3(4.5Y 3/2 鉄釉) 10Y 8/2(7.5Y 3/2 鉄釉) 10Y 8/2	回転ナデ/回転ナ デ	室家 第9小期	35	13
68	陶器 (美濃)	水注	-	-	(14.9) (5.8)	2.5	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	5Y 7/4(7.5Y 7/2 鉄釉) 5Y 7/4(7.5Y 7/2 鉄釉) 7.5Y 8/2	回転ナデ/回転ナ デ、把手貼付?	産房前期	35	13
69	陶器 (瀬戸)	片次蓋	M11	-	5.4 3.6 1.8	12.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	(7.5Y 7/2 鉄釉) 2.5Y 7/3(7.5Y 7/2 鉄釉) 2.5Y 7/3	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラズリ	室家 第11小期	35	13
70	陶器 (復興線部)	向付 (蓋)	-	-	長 (8.4) 幅 (3.6) 高 1.7	-	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	5Y 8/1(透明釉)(2.5Y 2/1 鉄釉)(緑釉) 5Y 8/1(透明釉)(2.5Y 2/1 鉄釉)(緑釉)	型打ち成形/ 型打ち成形	-	35	13
71	陶器 (瀬戸)	蓋物	L13	-	7.6 6.5 3.9	5.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 7/6(7.5Y 7/3 鉄釉) 2.5Y 7/4(10Y 7/2 鉄釉) 2.5Y 7/6	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラズリ	室家 第8~11小期	35	13
72	陶器 (産地不明)	蓋物	-	-	長12.6 幅11.6 高さ9.9	12.0	密	良好	10Y 8/3(2.5Y 6/3 鉄釉) 10Y 8/2(2.5Y 7/2 鉄釉)	ナデ/ナデ、 ヘラズリ	-	35	14
73	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明蓋	-	-	8.3 5.0 2.4	10.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 6/1(5Y 3/1 鉄釉) 2.5Y 6/2(10Y 3/1 鉄釉) 2.5Y 6/1	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラズリ	室家 第7小期	35	13
74	陶器 (産地不明)	仏具	J10	-	- (2.1)	1.0	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含 む)	良好	2.5Y 8/2(透明釉) 2.5Y 8/2(透明釉)	回転ナデ/回転ナ デ	-	35	13
75	陶器 (美濃)	花生	L13	-	6.8 (6.3)	9.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 8/3(2.5Y 3/1 鉄釉) 2.5Y 7/3(2.5Y 3/1 鉄釉) 2.5Y 8/3	回転ナデ、しぼり 底/回転ナデ	産房前期	35	13
76	陶器 (美濃)	花生	M13	-	9.0 5.7 12.2	10.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	2.5Y 8/4(5Y 2/1 鉄釉) 2.5Y 8/4(2.5Y 3/2 鉄釉) 2.5Y 8/4	回転ナデ/回転ナ デ、回転糸切り底	産房前期	35	13
77	陶器 (復興線部)	手水鉢	-	-	径31.1 (13.6) 15.7	9.5	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含 む)	良好	2.5Y 8/3(うのふ輪 緑釉なし 鉄釉) 2.5Y 8/3(うのふ輪 緑釉なし 鉄釉) 2.5Y 8/3	回転ナデ/回転ナ デ、貼付け高台	-	36	11

表17 土器類観察表(4)

調査番号	種別	器種	出土位置			大きさ (cm)	口縁部 残存率 (%)	胎土	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調整 内面/外面	時期	発掘 番号	図 番 番号
			出土区・ グリッド	遺構番号	層位									
78	陶器 (甕戸)	大鉢	-	-	-	16.0 -	2.8	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y 8/3(10Y 4/2 灰輪) 7.5YR 3/2 黒輪 2.5Y 8/3(土野渡し) 2.5Y 8/3	回転ナブ/回転ナブ	楚笠 第11小期	36	13
79	陶器 (甕戸)	大鉢	-	-	-	13.0 (8.1)	-	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y 7/3(7.5YR 3/4 暗輪) 2.5Y 7/3(7.5YR 4/4 黒輪) (5Y 7/3 うのふ輪 土野渡し) 2.5Y 7/3	回転ナブ/回転ナブ 回転ヘラクスリ、磨眼付	楚笠 第11小期	36	13
80	瓦器	埴伊勢	K11	-	-	(22.6) -	4.1	密(ϕ 5mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む)	良好	7.5Y 4/1 10YR 6/3 10YR 6/3	ナブ、板ナブ/ナブ、スガキ	-	36	
81	陶器 (甕戸)	甕	-	-	-	30.2 32.9 30.4	11.2	密(ϕ 1mm以下の長石、チャートを含む)	良好	2.5Y 7/3(5YR 4/4 暗輪) 2.5Y 7/3(5YR 4/4 黒輪) (2.5Y 2/1 灰輪渡し) 2.5Y 7/3	回転ナブ/回転ナブ 、基付高台	楚笠 第10~11小期	36	
82	陶器 (常滑)	甕	-	-	-	51.5 19.8 61.0	9.0	密	良好	7.5YR 3/4 7.5YR 3/4 5YR 4/1	ココナブ、 指頭圧痕、輪積痕/ ナブ	G類	36	
83	土師器	ホウロク	M3	-	-	-	1.0	密(ϕ 1mm以下のチャートを含む)	良好	10YR 8/4 10YR 8/4 10YR 8/4	ナブ/ナブ	I類	37	
84	土師器	ホウロク	K10	-	-	-	1.0	密(ϕ 1mm以下の長石、チャート、雲母をわずかに含む)	良好	10YR 7/4 10YR 7/4 7.5YR 6/6	ナブ/ナブ	F類	37	
85	土師器	皿	J8	-	-	(6.0) 11.8) 0.8	2.0	密	良好	5Y 8/1 5Y 8/1 5Y 8/1	ナブ/ナブ	-	37	
86	土師器	皿	G10	-	-	-	1.0	密	良好	2.5Y 8/3 2.5Y 8/3 2.5Y 8/3	ナブ/ナブ	-	37	
87	土師器	皿	K9	-	-	9.0 16.3 1.1	1.1	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y 8/4 2.5Y 8/4 2.5Y 8/4	ナブ/ナブ	-	37	
88	土師器	皿	-	-	-	9.0 5.0 1.1	1.1	やや粗(ϕ 5mm以下の長石、チャート、雲母をわずかに含む)	良好	10YR 8/3 10YR 8/3 10YR 6/3	ナブ/ナブ	-	37	
89	土師器	皿	J9	-	-	-	1.0	密(ϕ 1mm以下のチャートを含む)	良好	2.5Y 8/3 2.5Y 7/3 2.5Y 7/3	ナブ/ナブ	-	37	
90	土師器	皿	L11	-	-	(14.2) -	1.9	密(ϕ 1mm以下の長石、チャート、赤色酸化土粒、雲母をわずかに含む)	良好	10YR 8/2 10YR 8/2 10YR 8/2	ナブ/ナブ	-	37	
91	土師器	皿	-	-	-	(11.2) 7.8) 1.4	4.0	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y 7/6 2.5Y 7/8 2.5Y 7/6	ナブ/指頭圧痕、ナブ	-	37	
92	土師器	皿	-	-	-	(10.6) -	1.4	密(ϕ 1mm以下の長石、チャート、雲母をわずかに含む)	良好	2.5Y 6/2 2.5Y 6/2 2.5Y 6/2	ナブ/指頭圧痕、ナブ	-	37	
110	陶器 (原地不明)	紅瓦	-	-	-	(5.0) (2.2) 1.8	1.3	密	良好	5Y 8/1(透明輪) 5Y 8/1(透明輪 鉄輪) 5Y 8/1	回転ナブ/回転ナブ	-	41	14
111	磁器 (肥前)	青磁 鉢付碗 (胎)	-	-	-	-	1.0	密	良好	(5/8 透明輪) (2.5Y 7/1 青磁輪)	回転ナブ/回転ナブ	IV類	41	14
112	陶器 (甕戸)	行平	-	-	-	(19.8) -	1.8	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	7.5YR 7/4(7.5Y 6/2 灰輪) 7.5YR 6/4(5Y 6/3 灰輪) 7.5YR 8/2	回転ナブ/回転ナブ	楚笠 第11小期以降	41	14
113	陶器 (甕戸)	行平	-	-	-	(20.8) -	2.1	密(ϕ 1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	10YR 8/3(5Y 6/3 灰輪) 10YR 8/3(10Y 6/3 灰輪) 2.5Y 7/1	回転ナブ/回転ナブ	楚笠 第11小期以降	41	14
114	陶器 (甕戸)	行平	-	-	-	(8.0) 3.2)	-	密	良好	2.5Y 6/2 2.5Y 6/3(7.5Y 6/2 灰輪) 2.5Y 6/2	回転ナブ/回転ナブ、 回転ヘラクスリ	楚笠 第11小期以降	41	14
115	陶器 (原地不明)	土鍋	-	-	-	(19.2) -	4.0	やや粗(ϕ 1mm以下の長石を含む)	良好	10YR 6/2(5Y 7/3 灰輪) 10YR 6/2(5Y 7/3 灰輪) 2.5Y 7/3	回転ナブ/回転ナブ	-	41	14
116	陶器 (甕戸)	麻鉢	-	-	-	(20.2) -	1.7	やや粗(ϕ 2mm以下の長石を含む)	良好	(5Y 8/2 灰輪) 2.5Y 8/2(5Y 8/2 灰輪) 2.5Y 8/3	回転ナブ/回転ナブ 、回転ヘラクスリ	楚笠 第8~9小期	41	14
117	陶器 (甕戸)	土瓶	-	-	-	(12.0) -	-	密	良好	10YR 7/4(7.5Y 7/2 灰輪) 2.5Y 7/3(7.5Y 7/2 灰輪) 2.5Y 7/2	回転ナブ/回転ナブ	楚笠 第10~11小期	41	14

表18 土器類観察表(5)

図録番号	種別	器種	出土位置			口縁部 残存率 (X/12)	胎土	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	器蓋設置 内面/外面	時期	図 録 番 号	図 録 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号	層位								
118	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦	-	-	密	2.5W 7/2(2.5W 6/4 筋線) 2.5W 7/2(2.5W 4/2 筋線) 2.5W 7/2	回転ナデ、しぼり痕 /回転ナデ	連房Ⅲ期	41	15	
119	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦	-	2.5 7.2 21.2	12.0	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含む)	一方向ナデ、 回転ヘラケズリ	連房V期	41	15	
120	陶器 (甗戸)	胡毛目 徳利	-	機瓦	-	- (14.0)	-	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含む)	回転ナデ、しぼり痕 /回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	壺室 第10~11小期	41	15	
121	土師器	皿	-	機瓦	-	- 1.7	1.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	ナデ/指頭圧痕	-	41		
122	土師器	皿	-	機瓦	-	(13.0) (9.8) 2.65	1.5	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含む)	ナデ/ナデ	-	41		
123	土師器	皿	-	機瓦	-	(12.8) 2.1 (2.1)	2.1	密(φ1mm以下の チャート、青色陶 化土粒、炭粒を含む)	ナデ/指頭圧痕、ナ デ	-	41		
124	磁器 (磁器)	広葉碗 (蓋)	-	機瓦A	-	10.1 5.2 3.15	10.3	密	回転ナデ/回転ナ デ、つまみ出し	-	42	14	
125	陶器 (産地不明)	碗反碗 (蓋)	-	機瓦A	-	9.0 3.6 2.9	10.6	密	回転ナデ/回転ナ デ、つまみ出し	-	42	14	
126	磁器 (甗戸・瓦器)	碗(蓋)	-	機瓦A	-	10.9 2.6	9.4	密	回転ナデ/回転ナ デ	明治以降	42	14	
127	磁器 (甗戸・瓦器)	碗	-	機瓦A	-	(11.0) (3.4) 6.0	3.8	密	不明/不明	明治以降	42		
128	陶器 (甗戸)	行平 (蓋)	-	機瓦A	-	13.1 4.0	10.5	密	回転ナデ/回転ナ デ、つまみ出し	壺室 第11小期以降	42	14	
129	陶器 (甗戸)	什次	-	機瓦A	-	(6.0) (7.0) 9.2	6.5	密	回転ナデ/回転ナ デ、回転ヘラケズリ	壺室 第11小期	42		
130	陶器 (甗戸)	椀鉢	-	機瓦A	-	38.6 13.6 20.1	11.0	やや粗(φ1mm以下 の長石をわずかに 含む)	回転ナデ/回転ナ デ、ヘラケズリ	壺室 第10小期	43	14	
131	陶器 (高岳)	戸付き 磁器	-	機瓦A	-	長24.5 幅22.0 高22.6	6.0	やや粗(φ1mm以下 の長石、炭粒を多 く含む)	ナデ/ナデ、ミガキ	VI期	43	15	
132	陶器 (高岳)	戸付き 磁器 (戸)	-	機瓦A	-	長(2.7) 幅(3.2) 高(3.3)	6.0	やや粗(φ1mm以下 の長石、炭粒を多 く含む)	ナデ/ナデ、ミガキ	VI期	43		
133	陶器 (在郷)	羽釜	-	機瓦A	-	(23.3) -	10.5	密(φ1mm以下の長 石、チャート、炭 粒を含む)	回転ナデ/回転ナ デ、 回転ヘラケズリ、 把手・羽釜付付	-	43	15	
134	陶器 (在郷)	羽釜 (成)	-	機瓦A	-	(17.4) (2.2)	-	密(φ1mm以下の長 石、チャート、炭 粒をわずかに含む)	回転ナデ/回転ナ デ	-	43		
135	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦A	-	2.7 -	12.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	回転ナデ/回転ナ デ	連房IV期	44	15	
136	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦A	-	2.4 -	12.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	回転ナデ/回転ナ デ	連房V期	44	15	
137	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦A	-	2.6 -	12.0	密	回転ナデ/回転ナ デ	連房V期	44	15	
138	陶器 (瓦器)	徳利	-	機瓦A	-	9.6 3.0	-	密	回転ナデ/回転ナ デ、 回転ヘラケズリ、 ケズリ出し高台	-	44		
139	陶器 (甗戸)	徳利	-	機瓦A	-	- 10.7 (22.2)	-	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	回転ナデ/回転ナ デ、ケズリ出し高台	壺室 第10~11小期	44	15	
140	陶器 (甗戸)	徳利	-	機瓦A	-	3.1 -	12.0	やや粗	回転ナデ、しぼり痕 /回転ナデ	明治以降	44	15	
141	陶器 (甗戸)	煮物	-	機瓦A	-	(5.4) (4.1) 1.65	6.5	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	回転ナデ/回転ナ デ、つまみ出し	-	44		

表19 土器類観察表(6)

編 号 番 号	種 別	器 種	出土位置			口縁部 残存率 (X/12)	胎土	焼 成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調整 内面/外面	時期	採 取 番 号	図 録 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号	層位								
142	陶器 (瀬戸)	高物	-	埋込A	- a	7.2 5.1 6.5	5.4	小中粒(φ1mm以下) の長石をわずかに 含む	良好	2.0Y 8/2(2.5Y 8/3 灰緑) 2.0Y 8/2(2.5Y 8/3 灰緑) 2.0Y 7/3	同軸ナブ/同軸ナブ ナブヘラケズリ	楚空 第8~11小期	44
143	磁器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	-	埋込A	- a	11.0 4.0 3.0	2.5	白色(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	白色 白色 白色	同軸ナブ/同軸ナブ ナブヘラケズリ	明治以降	44
144	磁器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	-	埋込A	- a	7.5 4.8 5.3	12.0	密	良好	N 8/ N 8/ N 8/ N 8/ N 8/ N 8/	同軸ナブ/同軸ナブ ナブヘラケズリ	明治以降	44
145	磁器 (瀬戸・美濃)	香炉	-	埋込A	- a	6.2 2.6 3.5	12.0	密(φ1mm以下の長 石をわずかに含む)	良好	0Y 8/1(埋込緑) 0Y 8/4(埋込緑) 0Y 8/1	同軸ナブ/同軸ナブ 同軸ヘラケズリ 削り出し高台	明治以降	44
146	陶器 (瀬戸)	小瓶	-	埋込A	- a	11.0 6.9 10.5	12.0	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含む)	良好	2.0Y 7/3(05R 4/3 緑軸) 2.0Y 7/3(05R 4/3 緑軸) 2.0Y 7/3	同軸ナブ/同軸ナブ 同軸ヘラケズリ 削り出し高台	楚空 第11小期以降	44

表20 瓦観察表

編 号 番 号	種 別	器 種	出土位置			口縁部 残存率 (X/12)	胎土	焼 成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面調整 内面/外面	時期	採 取 番 号	図 録 番 号
			出土区・ グリッド	遺構番号	層位								
93	瓦	鳥食瓦	-	-	- I	(9.3) 10.9	-	密	良好	2.0Y 7/1 N 3/ 2.0Y 7/1	ナブ/ナブ、ケズリ	-	38 15
94	瓦	鳥食瓦	-	-	- I	9.3 10.9 1.7	-	密	良好	N 3/ N 3/ 0Y 8/1	ナブ/ナブ、ケズリ	-	38 15
95	瓦	鬼瓦	-	-	- I	(29.5) (19.3) 1.8	-	密(φ1mm以下の長 石、チャートを含む)	良好	N 4/ N 4/ 0Y 7/1	-	-	38 15
96	瓦	軒瓦	-	-	- I	28.5 28.2 1.6	-	密	良好	N 1.5/ N 1.5/ 2.0Y 8/2	-	-	38 16

表21 石器・石製品観察表

編 号 番 号	器 種	出土位置			石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	採 取 番 号	図 録 番 号
		出土区・ グリッド	遺構番号	層位		長さ	幅	厚さ				
20	火打石	J10	SRI-基壇	- c	チャート	4.00	2.20	1.00	6.0		24	
97	砥石 (仕上げ砥)	-	埋込	-	泥岩	6.70	5.00	1.50	56.5		39	
98	砥石 (荒砥)	19	-	- II	砂岩	8.90	6.60	3.70	359.0		39	
99	五輪帯 (空風輪)	-	-	- I	花崗岩	18.20	12.80	12.60	463.0		39	
100	砥石	L11	-	- II	砂岩	(35.30)	26.70	16.30	2502.0	大正期の産物の 標本に転用	39 16	

表22 金属製品観察表

編 号 番 号	器 種	出土位置			素材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	採 取 番 号	図 録 番 号
		出土区・ グリッド	遺構番号	層位		長さ	幅	厚さ				
21	釘	J9	SRI-基壇	- a	鉄	(9.80)	(2.50)	0.90	34.90		24 16	
22	釘	K10	SRI-基壇	- b	鉄	12.50	7.10	0.70	63.80		24 16	
23	大鋸	K9	SRI-基壇	- c	青銅	24.70	0.60	0.65	28.70		24 17	
24	引盤	K10	SRI-基壇	- b	青銅又は 白銅	φ5.5	高 2.7	0.04	72.90	部分的に瓦状が 残る部分がある	24 16	
101	大鋸	19	-	- II	鉄	16.50	0.60	0.60	23.30		40 17	
102	角釘	J8	-	- II	鉄	(5.40)	1.40	0.50	4.40		40 17	
103	角釘	-	-	- I	鉄	8.00	1.00	0.40	7.20		40 17	
104	角釘	19	-	- II	鉄	(5.70)	0.75	0.55	14.00		40 17	
105	角釘	J8	-	- II	鉄	(5.50)	1.05	1.05	27.50		40 17	
106	瓦輪	19	-	- II	合金 (銅・鉛)	(9.90)	2.40	0.50	15.20		40 17	
107	鉄釘	18	-	- II	鋼	2.20	1.80	0.10	1.40	置水通定	40 17	
108	鉄釘	-	-	- I	鋼	2.40	2.40	0.10	2.40	置水通定	40 17	
109	鉄釘	K10	-	- II	鋼	2.20	2.20	0.10	1.90	置水通定	40 17	

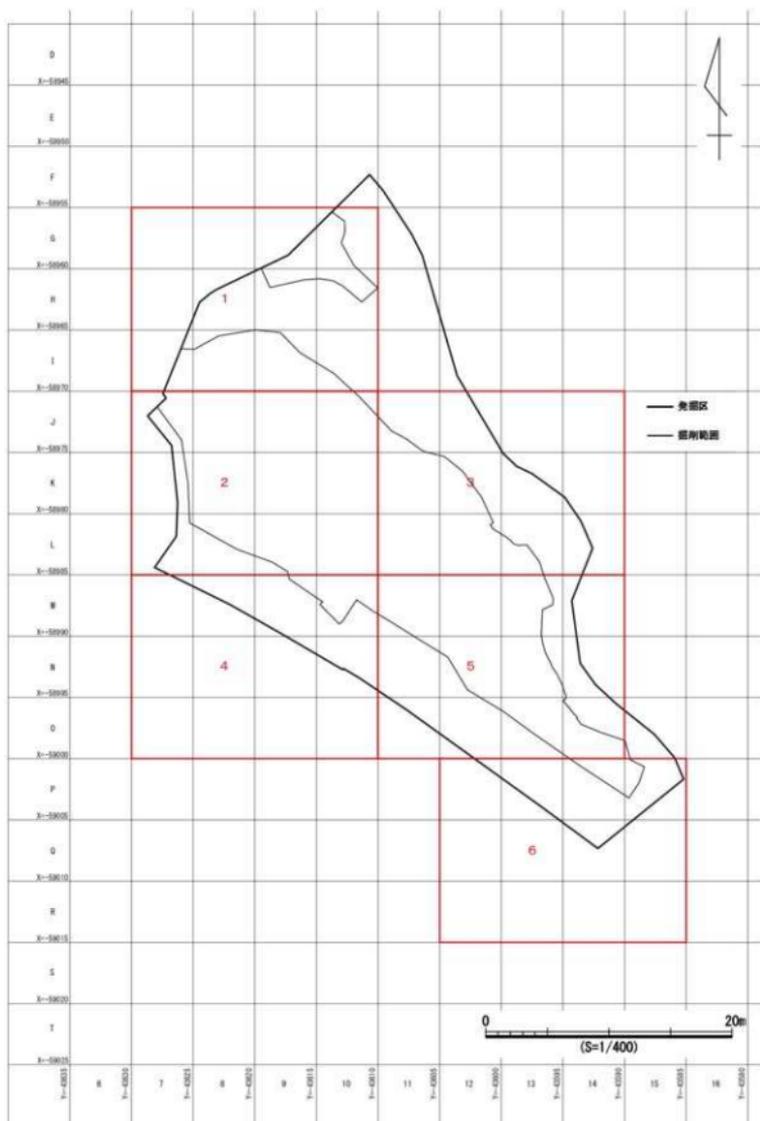


図 45 発掘区全域図 割付図

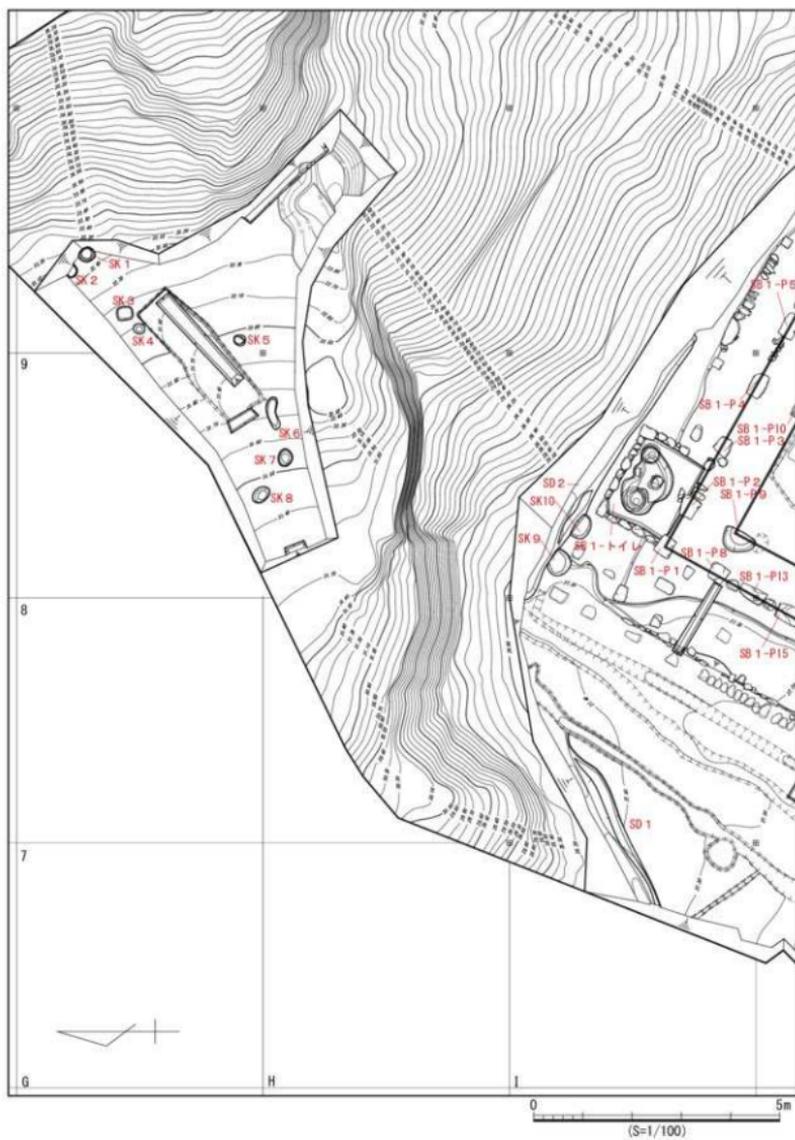


図46 発掘区全域図 分割図(1)

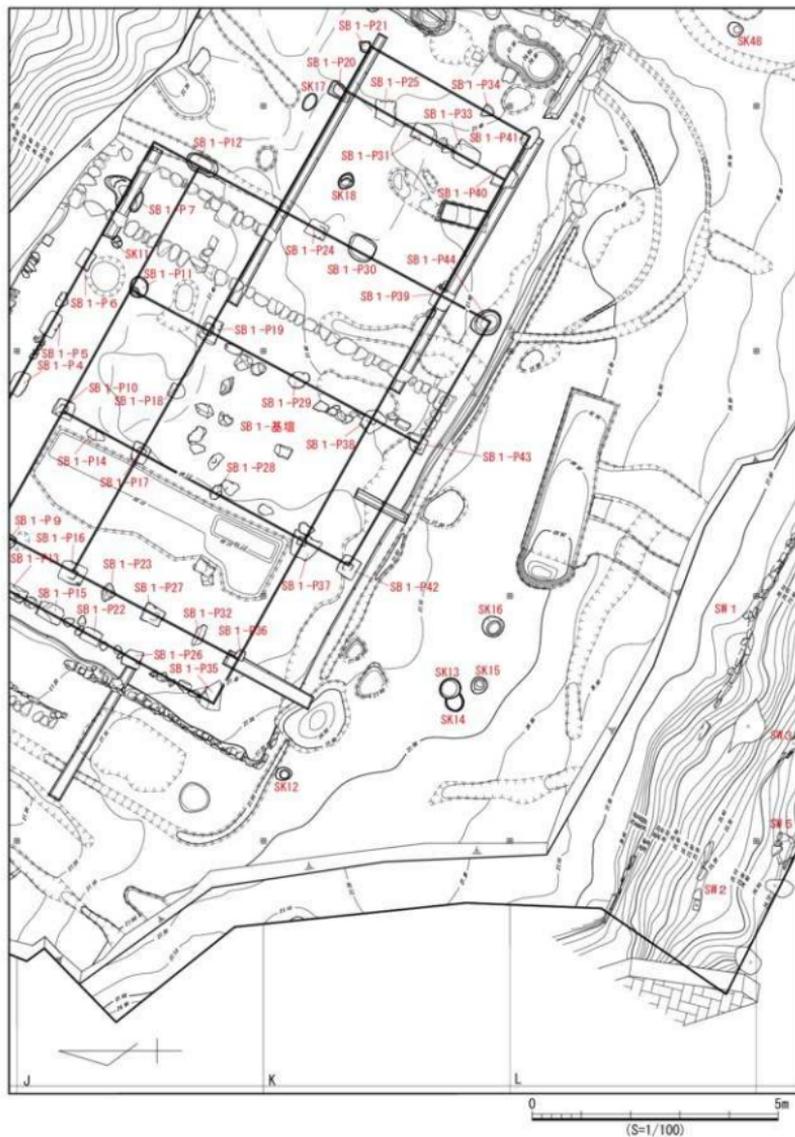


図47 発掘区全域図 分割図(2)

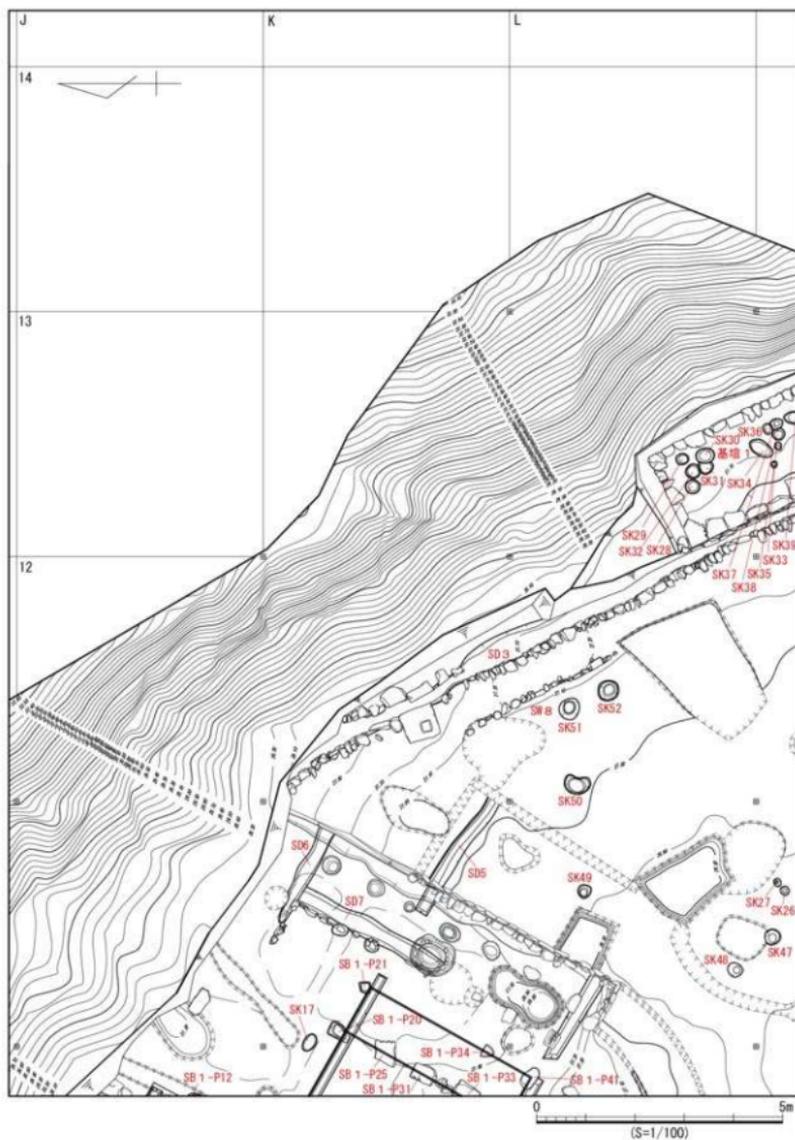


图48 发掘区全域图 分割图(3)

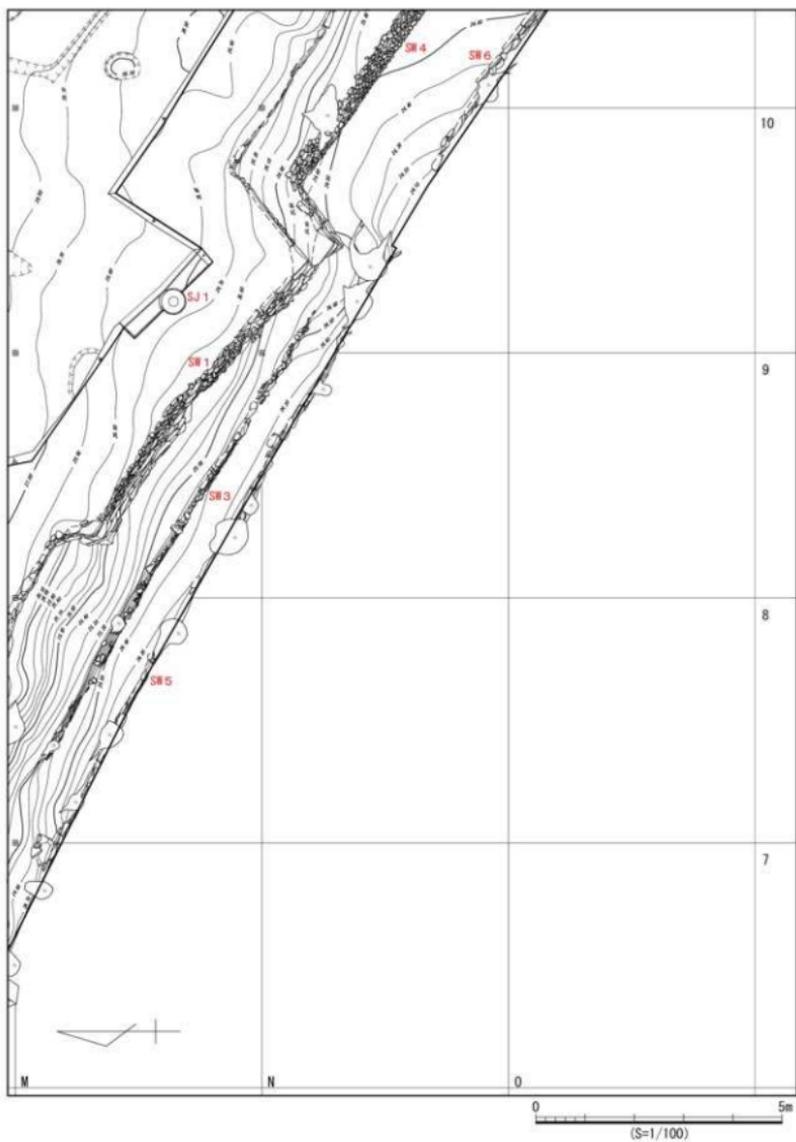


図49 発掘区全域図 分割図(4)

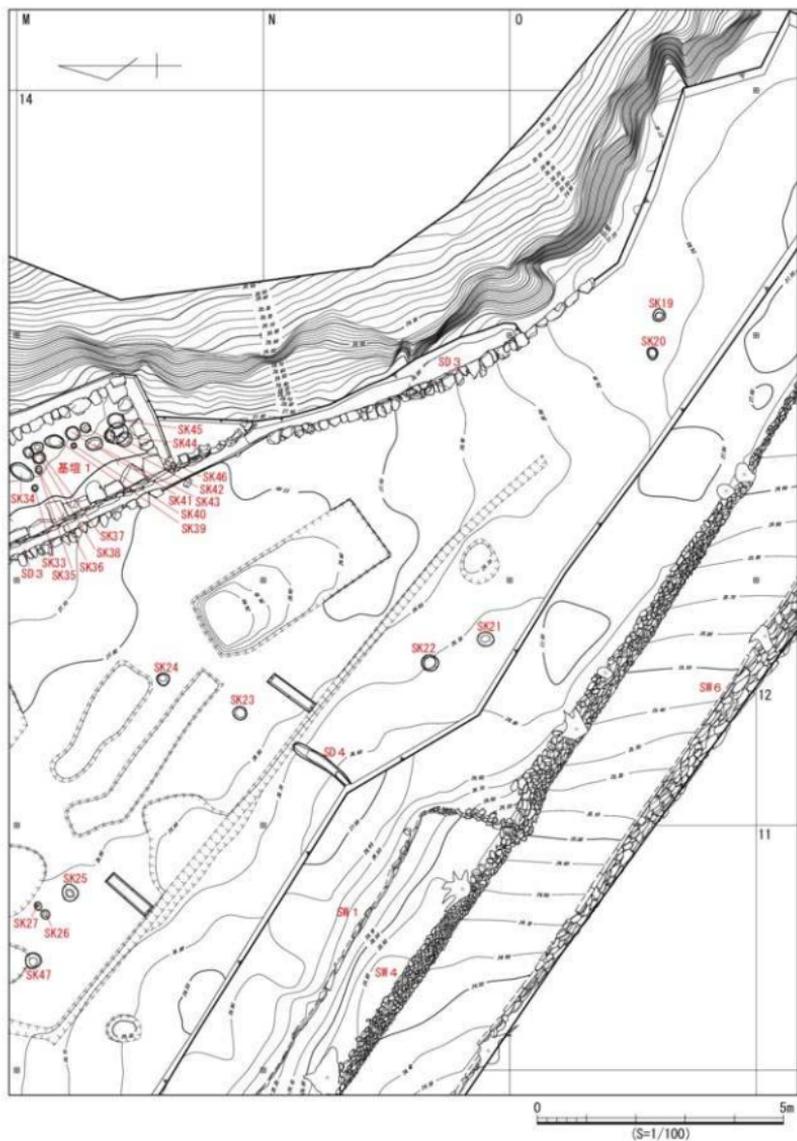


图50 发掘区全域图 分割图(5)

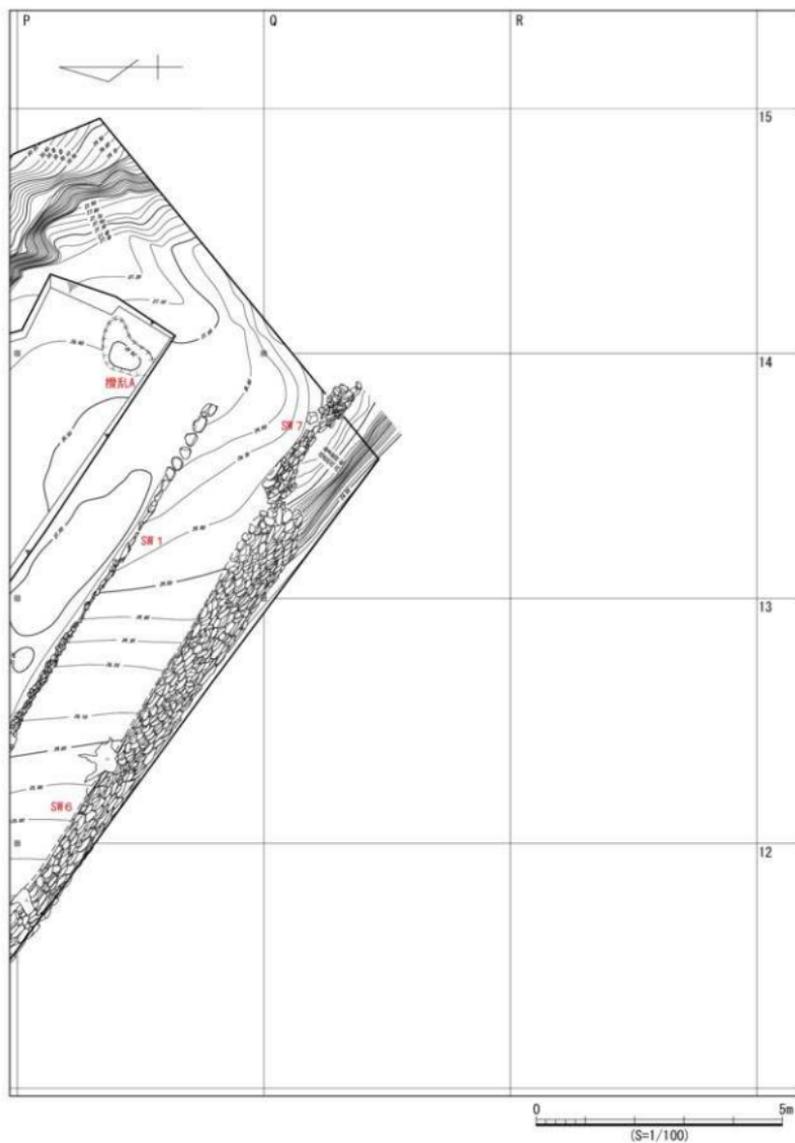


図51 発掘区全域図 分割図(6)

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要と成果

1 土器付着物X線回折分析

分析の経緯 SB1の北西部に付属する石組みに囲まれた土坑からは大小2つの甕(26、27)が埋設された状態で出土した。小形の甕(27)の内面には白色の付着物が認められ、トイレ遺構の可能性があると考えた。そこで、トイレ遺構であるか否かを検証するために、小形の甕の内面に残る付着物のX線回折分析を実施した。

結果の概要と所見 分析の結果、付着物はリン酸カルシウムであることが判明した。これは尿を起源とするものであることから、甕が便器として使用されたことが想定され、SB1の北西部に付属する石組みがトイレとして利用された蓋然性が高まった。

2 出土金属製品材質・成分分析

分析の経緯 当寺院跡からは複数の金属製品が出土し、近世のものとして想定される製品は、保存処理を実施した。保存処理を実施するにあたり、火箸(23)と引箸(24)と灰匙(106)については材質が不明確であったため、最適な保存処理方法を検討するために、蛍光X線分析を実施した。

結果の概要と所見 分析の結果、火箸(23)は銅、亜鉛、鉛主成分とする合金、引箸(24)は銅と錫を主成分とする合金、灰匙(106)は錫と鉛を主成分とする合金であることが判明した。

第2節 土器付着物X線回折分析

1 はじめに

SB1の北西部からトイレ遺構とみられる大小2個の甕(26、27)が埋設された石組みが検出された。ここでは、小形の甕(27)内面に付着していた白色物についてX線回折分析を行い、その由来を検討した。なお、分析は竹原弘展(株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

2 試料と方法

試料は、SB1-トイレに設置された甕(27)の内面より採取された白色付着物である(写真10、11)。白色付着物は、多孔質で土器下部～底部に固着していた。水に難溶性の塩類と推定される。土器の時期は18世紀末とみられている。土器下部からアートのナイフで掻き取った試料について、X線回折分析を行った。

試料は、アルミナ製乳鉢でよく粉碎し、アルミニウム試料板に充填して、不定方位試料とした。

分析装置は、株式会社リガク製X線回折装置 MiniFlex600を使用した。装置は、X線管が銅(Cu)ターゲット、検出器が一次元半導体検出器(D/teX Ultra)を使用している。測定条件は、40kV、15mA、走査速度2 deg/min、ステップ幅0.02deg、走査範囲3～65deg、蛍光X線軽減モードに設定し、回転試料台で試料を回転させつつ測定した。

3 結果

X線回折分析により得られた回折パターンを図52に、検出された鉱物を表23に示す。リン酸カルシウ

ムの類が極めて明瞭に検出された。ほかに、土砂に由来する石英 (SiO_2) が検出された。

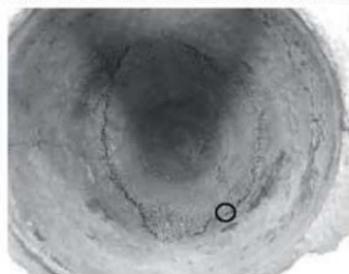


写真10 壺内面 (Oは資料採取位置)



写真11 白色物付着状況

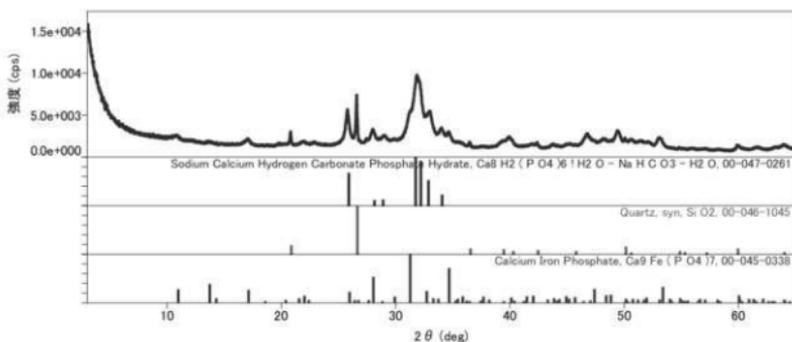


図52 X線回折分析結果

表23 検出鉱物一覧

分析試料	検出鉱物
陶器内面付着白色物	リン酸八カルシウム ($\text{Ca}_8\text{H}_2(\text{PO}_4)_6\text{H}_2\text{O}-\text{NaHCO}_3-\text{H}_2\text{O}$)
	石英 (SiO_2)
	リン酸カルシウム鉄 ($\text{Ca}_9\text{Fe}(\text{PO}_4)_7$)

4 考察

分析の結果、白色付着物はリン酸カルシウムを主とした化合物と確認された。尿を起源とする析出物と考えられる。

尿中の尿素は、分解されるとアンモニアとなり、pHが上がって便器内の水はアルカリ性となる。それにより、尿中の成分(リン酸イオンとカルシウムイオン)が、尿石(リン酸カルシウム)となって析出し、便器に固着する。

5 おわりに

壺(27)の内面付着白色物の成分を調べた結果、主にリン酸カルシウムからなる物質であった。尿石と考えられ、トイレ遺構であることが、自然科学的にも裏付けられた。

第3節 金属製品材質・成分分析

1 はじめに

材質の不明な遺物について、最適な保存処理方法を検討するため、火箸 (23)、引磬 (24)、灰匙 (106) 合計3点の材質と成分の分析を行った。

2 分析方法

分析装置には、オリンパス株式会社製のハンドヘルド蛍光X線分析計 VANTA M series を使用した。

装置の仕様は、X線管が最大50kV、800 μ Aのロジウム (Rh) ターゲット、X線照射径が8mmまたは4mm、X線検出器はSDD検出器である。また、8ポジションの自動選択フィルタが内蔵されており、S/N比の改善が図れる。検出可能元素はマグネシウム (Mg) ～ウラン (U) である。

測定条件は、Alloy Plus Extra メソッド、管電圧50kV、測定時間 (s) がビーム112s・ビーム214s、管電流自動設定、照射径は、引磬 (24)、灰匙 (106) が8mm、火箸 (23) が4mmである。試料室内雰囲気は大気に設定した。FP法による半定量分析を装置内蔵ソフトで行った。

蛍光X線分析は、表面分析であり、均質とは限らない金属製品の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、おおよその主成分や、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

3 分析結果

分析結果は表24、計測位置は写真12～14の通りである。

火箸 (23) は銅、亜鉛、鉛からなる合金である。計測した結果、主要元素は銅 (Cu) 80.42%、亜鉛 (Zn) 3.685%、鉛 (Pb) 2.301%だった。上記以外にも微量元素として、錫 (Sn) 0.561%等を検出した。銅は古代から他の金属と混ぜ合わせることで多く合金を作ることにより特性を向上させることができる。また、銅と合金化する元素とその組成比によって色が変化する。

引磬 (24) は銅と錫を主成分とする、青銅若しくは白銅製である。計測した結果、主要元素は銅 (Cu) 68.61%、錫 (Sn) 26.426%だった。上記以外にも微量元素として、亜鉛 (Zn) 0.100%、鉛 (Pb) 0.068%等を検出した。白銅製品は鋳造製品によく使用され、硬くて脆いがシャープな鋳上がりになる。研磨によって鏡面に仕上がりが、反射率が高い。

灰匙 (106) は錫、鉛を主成分とした合金である。計測した結果、主要元素は錫 (Sn) 60.09%、鉛 (Pb) 27.996%だった。錫、鉛以外にも微量元素として、アンチモン (Sb) 2.242%、銅 (Cu) 0.176%、亜鉛 (Zn) 0.085%等を検出した。錫と鉛の合金は融点が低く、柔らかく加工しやすい。また、耐酸性、耐食性に強い。

ケイ素 (Si)、鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、チタン (Ti) 等は遺物に付着した土壌由来の成分である。

4 おわりに

分析の結果、いずれも合金であることが分かった。それぞれの材質や成分の応じた方法で保存処理を実施した。

参考文献

村上隆2003 『日本の美術 第443号 金工技術』

表 24 蛍光 X 線分析結果 (mass%)

No.	遺物名	ジルコニウム	亜鉛	チタン	錫	ケイ素	アンチモン	鉛	リン	マンガン	鉄	銅	アルミニウム
		Zr	Zn	Ti	Sn	Si	Sb	Pb	P	Mn	Fe	Cu	Al
23	火箸	-	3.685	0.24	0.561	5.652	-	2.301	0.324	-	1.175	80.42	5.83
24	引器	-	0.1	0.196	28.426	2.375	-	0.068	0.187	-	0.061	68.61	1.97
106	灰匙	0.013	0.085	-	60.09	4.342	2.242	27.996	1.224	0.051	0.305	0.176	3.47



写真12 火箸 (23) 計測位置



写真13 引器 (24) 計測位置



写真14 灰匙 (106) 計測位置

第5章 総括

第1節 正傳寺の変遷

当寺院跡の変遷は、今回の発掘調査の成果や、聞き取り調査¹⁾、文献史料、絵図から窺い知ることができる。以下では、今回の発掘調査で検出したSB1を基準に、「SB1創建以前」、「SB1の創建」、「SB1の建て替え以降」の3つに時期を区分し、それぞれの時期ごとの内容を整理する。

1 SB1創建以前

基壇の盛土中や表土・流土中からは複数の須恵器が出土している。当寺院跡は船来山古墳群が展開する郡府山の南麓に位置する。寺院の北側には古墳が集中して存在することからも、寺院創建のための造成時に、古墳が破壊され、それに伴う須恵器が混入した可能性がある。なお、SB1の基壇を部分的に解体しての調査を行ったが、SB1よりも時期が遡ると考えられる遺構は確認できなかった。

2 SB1の創建

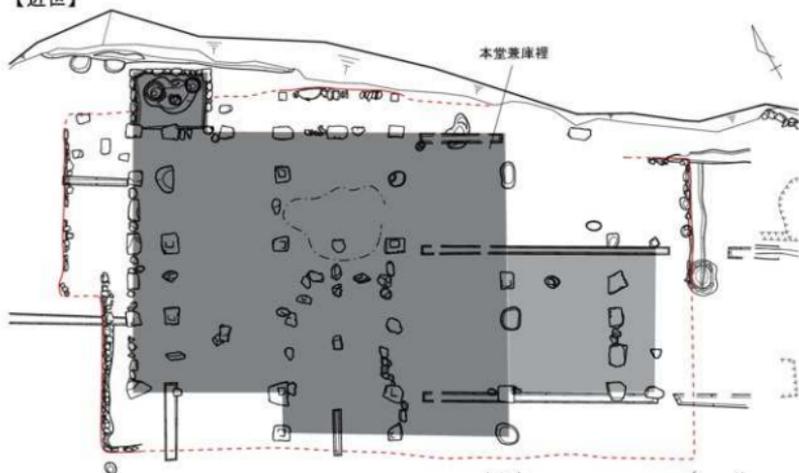
今回の発掘調査では、3間×3間の身舎の北側、西側、南側に張り出しを有し、東側に1間×2間の建物を取り付く近世の礎石建物(SB1)を検出し、これを文献史料²⁾に残る創建期の建物と考えた(図53上段)。

近世から明治にかけての正傳寺の様子は養虫山人(1836~1900)作の『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』から知ることができる(図54)。絵図に描かれた正傳寺の建物が、今回の発掘調査で検出したSB1と類似することから、SB1を描いたものと判断した。絵図はSB1を北西から見た構図で描かれ、広縁を有する瓦葺きで入母屋の建物の南に庭が広がる。絵図から、SB1の身舎に取り付く張り出しは広縁であったと分かる。また、絵図では北側に出入口は描かれていないため、南側に出入口が存在すると想定できる。SB1の北側には山が迫るため、建物の出入口は南側と推定しており、発掘調査の成果と整合的である。一方、発掘調査で確認したSB1の北西側に取り付くトイレが絵図には描かれていない。ただし、トイレがある位置には礎と手水鉢が描かれており、景観に配慮して絵師が意図的に改変した可能性がある。

また、SB1の様子は『寺籍調査表』からも知ることができる(図55~60)。調査表によると、8間×3間3尺の瓦葺きの建物で本堂兼庫裡であったことが分かる(図59)。1間を約1.818mとすると、約14.55m×6.36mとなり、14.55mはおおよそ基壇の幅、6.36mは身舎に北側の縁側を加えた長さに相当する。瓦葺きであるという点は養虫山人の絵図と整合的で、発掘調査でも幕末頃の可能性がある軒椽瓦が出土している。また、本堂兼庫裡という記述から、SB1は本堂の東に庫裡が付属した建物であったと想定される。さらに、『寺籍調査表』から、仏像は3体存在したことが分かる(図60、表25)³⁾。本尊は阿弥陀仏で、他に誕生仏と尊駄天が安置されていたようである。発掘調査ではJ9~10グリッドで硬化面を検出したことから、本堂の中央の最奥にあたる部屋に仏像が安置されていた可能性がある。

創建年代は文献史料と出土遺物から検討できる。創建年代を示した史料(表26)では、いずれも明和~安永(1764~1780)までの時期に創建された旨が記載される。発掘調査では、基壇から登窯第10

【近世】



【大正期】

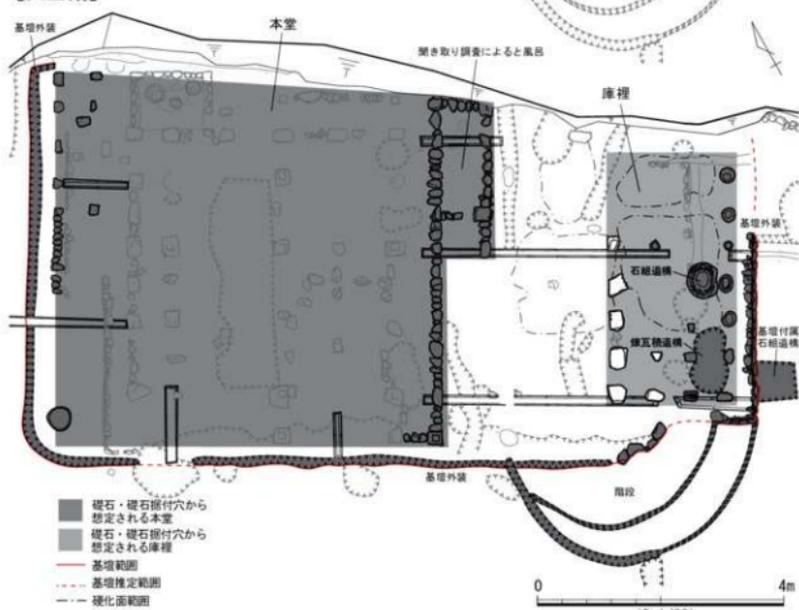


図53 近世・大正期の本堂・庫裡



図54 妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図

寺籍調査表

此草水末	席田村大正保高五等	直末	妙法山 正傳寺
開創山緒			
安永年中當村彌勒寺六世黙堂丈維之創立當團山縣那伊良村東光寺十六世東國和尚ヲ請シ開祖トス			

図56 寺籍調査表(2)

○ 台番二〇八七 岐阜県 妙法山 正傳寺

寺籍調査表〔開創由緒〕安永年中當村彌勒寺六世黙堂丈維之ヲ創立シ、當團山縣郡伊良村東光寺十六世東國和尚ヲ請シ開祖トス。〔法系〕(本州東光寺) 開山東國壺翁 二世黙堂丈維 絶系。〔歴代〕開山東國壺翁 二世黙堂丈維 三世萬谷禎海 四世嶋門梁現。

(明治四十三年、正傳寺兼務住職「豊田愚中」提出)

図55 寺籍調査表(1)

～11小期の遺物が出土しており、文献史料よりも新しい時期を示す。ただし、これらの遺物は大正期の建て替えの際に風呂が設置されたとされる付近から集中して出土しており（図53下段）、SB1創建以降の混入の可能性がある点は注意を要する（第3章第3節）。一方、これらの混入の可能性がある遺物を除けば、基壇から出土した最も新しい遺物は登壇第1～5小期の鉄絵鉢（11）で文献史料から分かる創建時期よりも遡る。

開創由緒についてもいくつかの文献史料に記されている（表27）。記録から山県郡伊自良村にある東光寺の一六世東園和尚を開祖として、弥勒寺六世黙堂丈維⁴¹が創建したことが分かる。

また、『寺籍調査表』からは法系や調査表が提出された明治43（1910）年までの歴代の住職について知ることができる。法経は東光寺一五世の威山師雄が開山し、東園整翁から黙堂丈維に受け継がれ、絶系する。住職は開山東園整翁、二世黙堂丈維、三世萬谷嶺海、四世鳴門梁沢とある。聞き取り調査から、大正期に建て替えがあったということを踏まえると、記述にある四世までの住職や調査表を提出した豊田愚中住職はSB1が存在した頃の人物であると考えられる。

なお、『寺籍調査表』から、創建期の宗派は臨済宗妙心寺派で山号は妙法山と分かる。

表25 正傳寺の仏像に関する記述

史料	作成年・刊行年	仏像記載内容
寺籍調査表	明治43（1910）	本尊 阿弥陀仏 品質：木 形状・寸法：立像、一尺八寸 誕生仏 品質：金 形状・寸法：立像、五寸 摩訶天 品質：木 形状・寸法：立像、五寸
本県郡志	昭和12（1937）	本尊は阿彌陀如来なり
糸貫町史	昭和57（1982）	阿弥陀如来を本尊とする

表26 正傳寺の創建年代に関する記述

史料	作成年・刊行年	創建年代記載内容
寺籍調査表	明治43（1910）	安永年中（1772～1780）
本県郡志	昭和12（1937）	明和六（1769）己丑 年 イ安永年中 九月
糸貫町史	昭和44（1969）	安永二（1773）癸巳 年三月
糸貫町史	昭和57（1982）	明和・安永ころ（1764～1780）

表27 正傳寺の開創由緒に関する記述

史料	作成年・刊行年	創建由緒記載内容
寺籍調査表	明治43（1910）	彌勒寺六世黙堂丈維之ヲ建立シ、當國山縣郡伊自良村東光寺十六世東園和尚ヲ請シ開祖トス
本県郡志	昭和12（1937）	彌勒寺第六世黙堂丈維和尚の創建にて、山縣郡下伊自良村東光寺十六世、東園イ國翁大禪師を請して、開山初祖とす
糸貫町史	昭和57（1982）	黙堂丈維が創建した

3 SB1の建て替え以降

聞き取り調査によると当寺院跡では、大正期に建て替えがあったとのことであり、発掘調査でも、建て替えの痕跡を捉えることができた。近世の基壇の上からの盛土や、近世の基壇外装よりも外側に乱石積の基壇外装（写真15～17）を確認したことから、大正期の建て替えに伴い、基壇が拡張されたようである（図53下段）。また、南東側では基壇に伴うアーチ状の階段（写真18）も検出した。盛土の範囲や基壇外装をもとに大正期の基壇の範囲を示したものが図53の下段の赤線である。基壇上の西側では長軸長10m、短軸長9.6mのおおよそ方形の石組を確認し、これを本堂と考えた。本堂と考える石組の中央には明確な礎石や柱穴は認められないことから、根太工法を用いた建物であった可能性がある。また、近世に建てられたSB1の礎石は残存していたことから、部分的にSB1の礎石を利



写真 15 大正期の基壇外装①(北西から)



写真 16 大正期の基壇外装②(西から)



写真 17 大正期の基壇外装③(南から)



写真 18 大正期の基壇階段(南東から)



写真 19 大正期の石組遺構(北から)



写真 20 大正期の煉瓦積遺構(南東から)



写真 21 大正期の基壇付属石組遺構(南東から)



写真 22 大正期の煉瓦積・基壇付属石組遺構(南西から)

用した可能性もある。本堂と考える石組の北東には別の石組が付属しており、聞き取り調査によるとここに風呂があったようである。本堂の約1.8m東には長軸長6.4m、短軸長3.3mの礎石と柱穴から成る建物を検出し、これを庫裡と考えた。礎石の内、白抜きのは近世の建物（SB1）にも使用されていたもので、西側の礎石は近世のものをそのまま利用した様である。庫裡の内側からは、竈の可能性のある被熱の痕跡が残る石組遺構（写真19）を検出した。また、被熱の痕跡が残る煉瓦積遺構（写真20）も確認した。この煉瓦積遺構の南側からは排水溝が伸び基壇外装の南東隅付近に付属する石組遺構に流れ込む（写真21、22）ことから、風呂等の施設の可能性もある。硬化面も確認し、おおよそ柱穴の範囲と重なることから土間として使われた可能性がある。

基壇の上に築かれた建物の様子は、過去の空中写真や宅地図から追えることもできる。昭和36（1961）年に撮影された空中写真（写真23）には本堂と庫裡が確認でき、発掘調査の成果と整合的である。また、昭和12（1937）年に刊行した本県郡史や昭和57（1982）年に刊行した糸貫町史からは、この頃の宗派や山号⁵⁾、安置されている本尊について知ることができ（表25）、宗派は妙心寺派、山号は妙法山、本尊は阿弥陀如来とされる。いずれも創建期の頃と同一で、建て替え後も宗派変え等はなかったようである。

昭和40（1965）年の国土基本図（図4）には本堂、庫裡の他に基壇1も確認できる。聞き取り調査によると、基壇1の上には納屋があったとされる。正傳寺の建物の様子が確認できる最も新しい記録は昭和50（1975）年に撮影された空中写真（写真7）で、本堂と思われる建物が確認できる。

昭和30（1955）年頃以降の居住者や管理者は、聞き取り調査から知ることができた。昭和30（1955）年頃は女性が一人で寺を管理し、駄菓子屋を営んでいたようである。その後は隠居寺となり何人かの居住者がいたようであるが、昭和39（1964）年の記録が最後で、最終的には糸貫町教育委員会が管理した。また、仏像や過去帳等は東光寺に運び込まれたとされる。最終的には、昭和51（1976）年に「9.12豪雨災害」が発生し、その際に起きた船来山の土砂災害により建物が崩壊し、寺院は廃絶した。



写真23 1964年発掘区周辺空中写真（北が上）
（国土地理院撮影の空中写真MC6617-G3-13（1964年撮影）、
三角が交差する位置が正傳寺）

注

- 1) 弥勒寺の住職（清水幸信氏）や近隣の住民（福井幸信氏）からの聞き取り調査を行った。
- 2) 正傳寺の創建年代は、『寺籍調査表』と以下の文献から知ることが出来る。詳細は同項に後述する。
岐阜県本巣郡教育会1937『本巣郡志』上巻
岐阜県本巣郡糸貫町1969『糸貫町史』史料編
岐阜県本巣郡糸貫町1982『糸貫町史』通史編
なお、『寺籍調査表』は、明治43（1910）年に当時に住職である豊田愚中によって提出されたもので、現在は臨済宗妙心寺派宗務本所に残る。臨済宗妙心寺派宗務本所より提供を受けた。
- 3) 表28～30は5）に示した文献を基に作成した。
- 4) 『寺籍調査表』では黙堂丈維、それ以降の記録では黙堂丈維とあるが、本書では最も古い記録に残る黙堂丈維に統一して記載する。
- 5) 岐阜県本巣郡教育会1937『本巣郡志』上巻
岐阜県本巣郡糸貫町1982『糸貫町史』通史編

第2節 SB1の構築過程

ここでは、基壇の土層堆積状況を基にSB1の構築過程を整理する¹⁾。構築の過程は、①選地、②整地、③版築・礎石設置・基壇外装構築、④斜路設置、⑤本堂兼庫裡建立の5つに分けられる。

第1段階（選地）

当寺院跡は、丘陵の南斜面に位置する。臨濟宗の本堂は南面して建つのが通則とされるため²⁾、本堂の出入口がおおよそ南を向くように選地されたと考える（図61）。

第2段階（整地）

整地は基本的に切土によって行い、地形の低い範囲では盛土を施すことで、標高27.3m～27.4m程の高さに揃える。まず、切土により、丘陵の斜面に平坦面を設ける。その際に、基壇の北西側では基盤層である砂岩の岩盤を平坦に削り出すことで高さを揃える（図61の青色の点線より北西側³⁾、図62の灰色層）。一方、基壇の南側や東側では傾斜に沿って地形が低くなる（図61の青色の点線より南側と東側）ため、場所によっては岩盤まで到達せずに、山の斜面に堆積した土の上面をおおよそ平坦に削り出す（図62のB-B'断面）。この際に、基壇東側の庫裡が築かれる範囲付近では、他の場所よりも削り出した上面が低くなったため、厚さ15cm～30cmほどの盛土を施すことで高さを揃えている（図62の青色層）。

第3段階（版築・礎石設置・基壇外装構築）

整地により平坦に整えられた岩盤と盛土の上に版築を行い、基壇を構築する。版築は地形に沿って低くなる南側や東側から行う。厚さ2cm～10cm程の薄い土層を2～3層にわたり突き固めながら盛り、場所によっては粘性のある土（図62の赤色層）と粘性のない土（図62の白色層）を交互に盛る。ただし、最も標高の高い北西側では1層のみとなる（図62のF-F'断面）。版築は本堂のある範囲から庫裡のある範囲にかけて一連で行う。礎石の多くは版築と併行して設置するが、少数ながら、土が盛られる以前に設置した礎石（図61の青色の礎石）もあり、地形の高い北西側に集中する⁴⁾。また、設置の方法は2つに分けることが出来る。ひとつは版築途中に据付穴を掘って設置するもので、いまひとつは版築途中に据付穴を設けずに礎石を置き、周囲に版築を施すことで、石材を固定するものである。比較的大きい礎石は岩盤まで掘り込んだ据付穴の中や岩盤の上に直接設置し、小さい礎石は版築途中に据付穴を設けずに設置することで、上面が標高約27.5mに揃うよう調整する。基壇外装の裏込め土は認められず、版築と併行して順次、角礫を乱積みすることで外装を仕上げる（図62の緑色層）。また、基壇の上面に舗装は認められないことから、版築の完了をもって基壇上面の仕上げとする。

第4段階（斜路設置）

版築後は基壇の西側に土を盛り（図62の黄色層）、斜路を設ける。外装となる石積みの裏込め土は認められず、斜路を設けるための盛土と併行して順次、角礫を乱積みすることで外装を仕上げる。外装石材や構築方法が、その他の基壇外装と共通するため、当初から設置されていたと考える。

第5段階（本堂兼庫裡建立）

完成した基壇の上に本堂兼庫裡となる建物を建立する。本堂の大部分は、整地の際に岩盤が露出した地盤の固い範囲に築かれる（図61の青色の点線より北西）。また、版築は本堂から庫裡にかけて一連で行われるため、創建当初から本堂兼庫裡としての建物が建てられたと考える。

調査の結果、正傳寺の基壇は基盤層が砂岩の岩盤であることを生かし、掘込地業を行うことなく岩盤の上に直接築かれることや、版築と併行して礎石の設置や基壇外装の構築を行うという特徴を捉えることが出来た。また、基壇上に本堂と庫裡が合わさった建物が当初から築かれたことや、基壇に西側に斜路が設けられていたことも判明した。調査事例の少ない近世寺院の建物構造や基礎構造を知ることの出来る貴重な成果が得られたと言えよう。

注

- 1) 図62では、特に基壇の構築段階の様子をよく表すB-B'、E-E'、F-F'、H-H'、I-I'断面を示した。
- 2) 岐阜県教育委員会1980『岐阜県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』
- 3) 図61の青色の点線より北西側はももとの地形が高く、岩盤の上に版築が行われるが、点線よりも南と東は地形が低く、斜面の堆積土や盛土の上に版築を行う。
- 4) これらの礎石は、地形の低い南側や東側で版築が進行している途中に置かれた可能性もあるため、第3段階に含めておく。

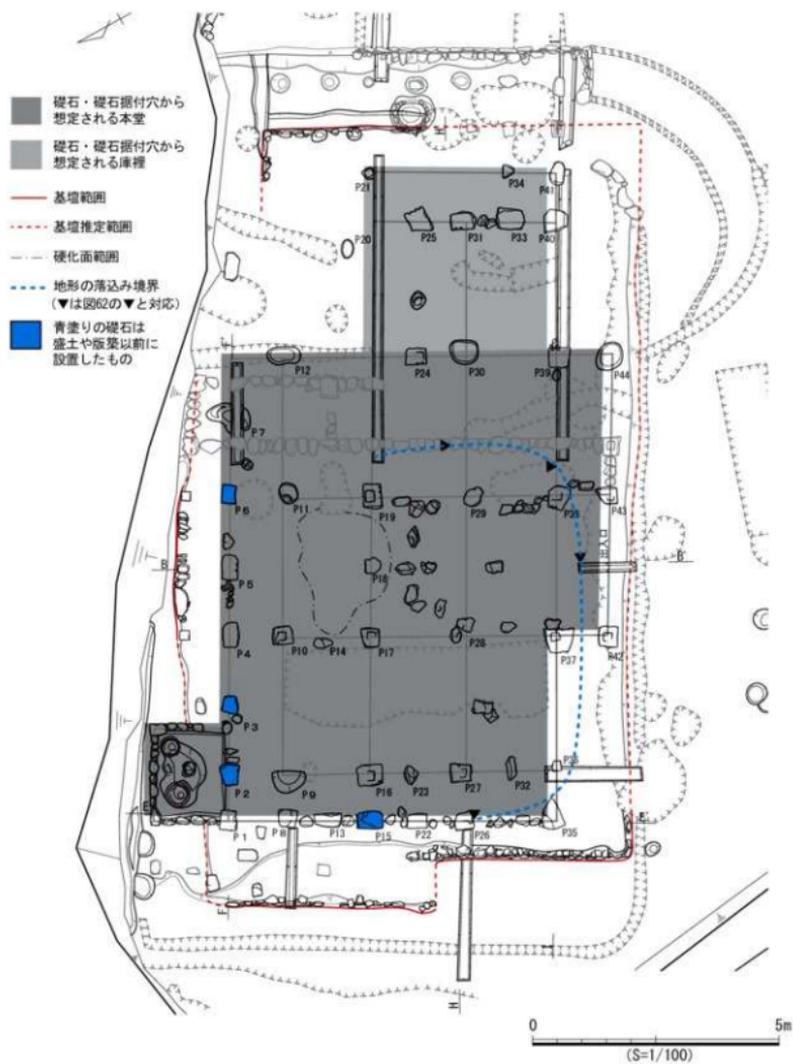


図61 SB1構築過程(1)

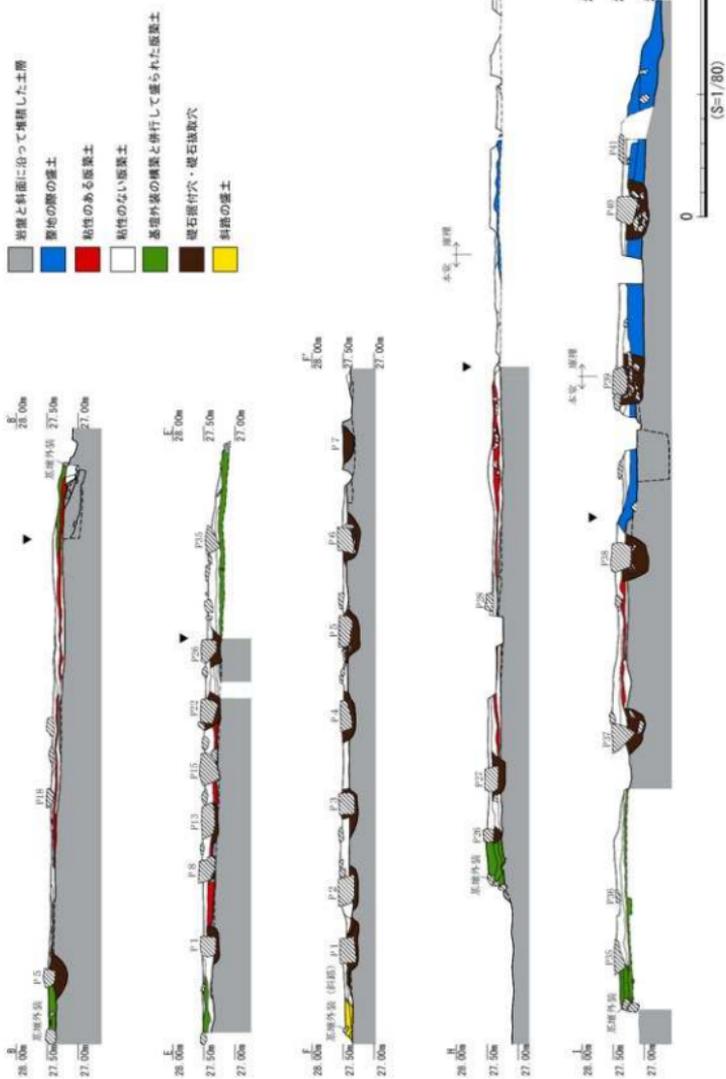


図62 SB1構築過程(2)

第3節 SB1の構造とSB1正面の空間利用

今回の発掘調査で検出した本堂は、桁行3間、梁行3間の身舎の南側、北側、西側に広縁を有する。さらに東側には、桁行2間、梁行1間の庫裡が取り付く構造であり、これをSB1とした。ここでは、岐阜県内の近世の臨濟宗本堂の類例から、今回検出したSB1の構造について検討する。

1 近世における禅宗本堂と臨濟宗本堂の構造

岐阜県では、近世に建立された寺院や神社等の現状を把握するために昭和55(1980)年に「近世社寺建築緊急調査」を実施している¹⁾。この調査報告書の中で、近世の禅宗本堂・臨濟宗本堂について集成し(図63、64)²⁾、その特徴をまとめている³⁾。これによると、禅宗本堂は、中世の方丈の形式を採用した邸宅風の建て方で、柱は面取角柱を用いるとする。また、臨濟宗の本堂は、南面して建つこと、間取は整形六面取を基準とすること、前面または正側面に広縁を巡らすこと、中央後方に仏間をおき、仏間から向かって右に住職の室を設けることを特徴として挙げている。

2 SB1の構造

SB1の柱の形状については、礎石から推定することができる(図65)。原位置を保つ礎石のうち、いくつかの上面に方形の削り込みが確認でき、柱の断面形が方形であったと考えられる。面取角柱を用いる点は近世の禅宗本堂の特徴として整合的である。

また、発掘調査の成果や『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』(図54)からは、本堂の出入口が南側に設けられていたことや、南側、北側、西側に広縁があったことが分かり、臨濟宗本堂の特徴と一致する。

一方、発掘調査によって確認された本堂の身舎が桁行3間、梁行3間である点は、臨濟宗の本堂が一般的に六面取を基準とすることと異なる。ただし、類例に着目すると、六面取の各部屋は必ずしも等しい大きさではなく、大仙寺、瑞巖寺、宗教寺、天猷寺、崇福寺、普門寺、正伝寺、清泰寺、禅徳寺、光照寺の本堂のように、奥の3室よりも手前の3室の方が大きく、縦長になる例が認められる。SB1の礎石をみると、ほとんどの例が据付穴を有するのに対し、身舎の中央南側に位置するP28とP29は据付穴を持たず、小ぶりである。そのため、他の礎石ほど負担のかかる柱は設置されず、東柱等がのせられていた可能性がある。このことから、身舎の南側6間分には明確な区切りがなく、ひとつの広い空間として利用された可能性や、南北2間からなる3部屋が東西に連なっていた可能性がある。臨濟宗本堂の類例に後者が多く認められることから、3つの部屋として機能していた蓋然性が高いと考える。養山山人作の『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』では建物内で二人の人物が対面している様子が描かれており、身舎の奥側よりも手前側が広く描かれる。この点は、身舎の北側より南側のほうが広い空間として利用されたという考え方と整合的である。

本堂の中央後方は、一般的に仏間とされる。今回の発掘調査では本堂の中央後方の部屋にほぼ重なる範囲で硬化面を確認しており、仏像を置くための施設として機能した可能性がある。

以上、SB1の構造や正面に広がる空間の状況について整理した。その結果、SB1は、一般的な近世における臨濟宗の本堂の構造を有していたことが分かった。

3 SB1正面の空間利用

SB1の南側は、遺構が希薄で、遺物もほとんど出土しなかった(図66)。このことからSB1の南側

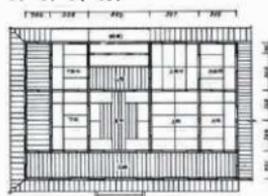
には一定の空間が広がり、清掃された状態が保たれていたと分かる。養虫山人作の『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』では、この空間に植木が植えられたり、植木鉢の置かれた棚が設置されたりした様子が描かれる。これらの点から、SB1の正面は出入口につながる通路兼庭として利用されたことがうかがえる。また、SB1南東ではSJ1を検出している。明治期に通路兼庭の構成要素として底部内部に④の墨書のある睡蓮鉢(40)が埋設された可能性がある。

注

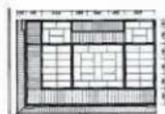
1) 岐阜県教育委員会1980『岐阜県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』

2) 図63、図64の寺院は創建時期が古い順から配置した。

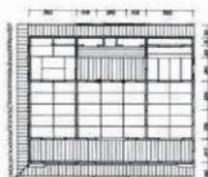
3) 1) 3、4頁



八百津町 大仙寺本堂 (復元)
寛永13 (1636) 年



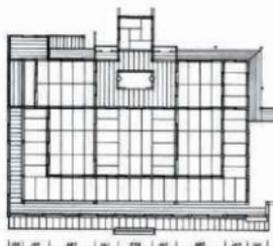
揖斐川町 瑞嚴寺本堂 (復元)
寛文2 (1662) 年



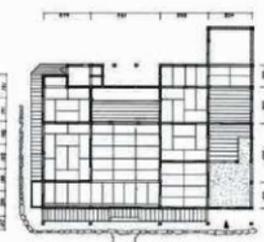
中津川市 宗教寺本堂 (復元)
寛文2 (1662) 年



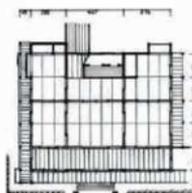
瑞浪市 天敵寺本堂 (復元)
延宝8 (1680) 年移建



岐阜市 崇福寺本堂
17世紀後半



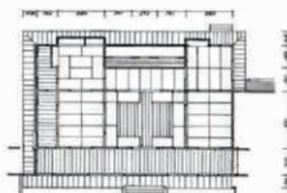
多治見市 普門寺本堂
17世紀後半



中津川市 法界寺本堂
元禄13 (1700) 年

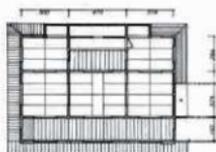


大垣市 天壽寺本堂 (復元)
元禄14 (1701) 年

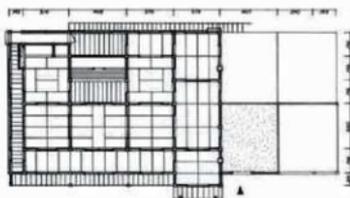


八百津町 正伝寺本堂 (復元)
1700年頃

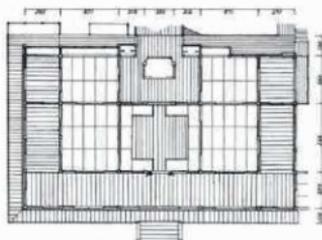
図63 岐阜県内の近世臨済宗本堂 (1)



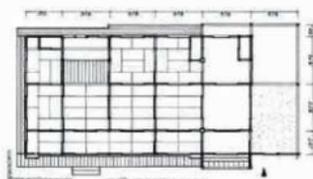
美濃加茂市 禅徳寺本堂 (復元)
寛保3 (1743) 年



七宗町 真光寺本堂
18世紀前半



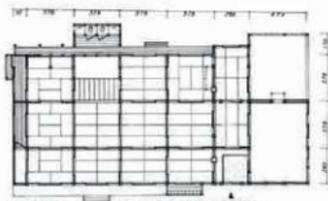
美濃市 清泰寺本堂
18世紀前半



美濃市 竜泉寺本堂
18世紀前半



美濃市 光照寺本堂
18世紀前半



美濃市 江島寺本堂
18世紀前半

図64 岐阜県内の近世臨済宗本堂 (2)

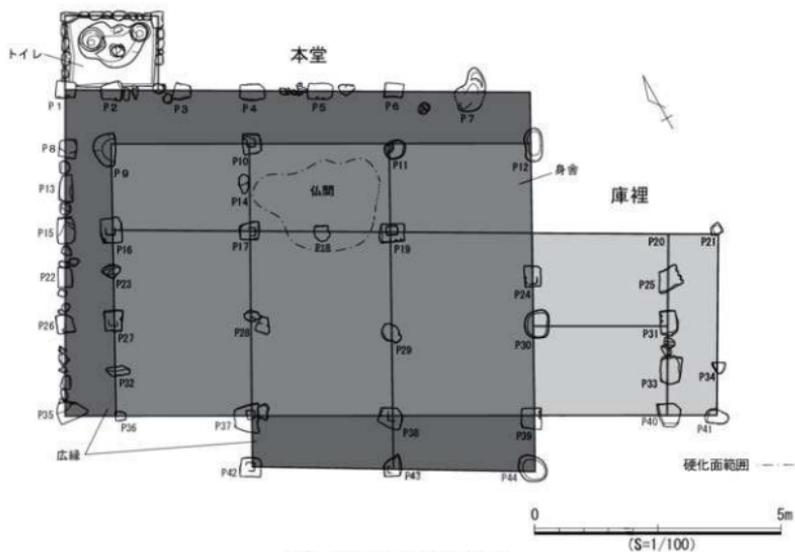


図65 正傳寺本堂兼庫裡 (SB 1)

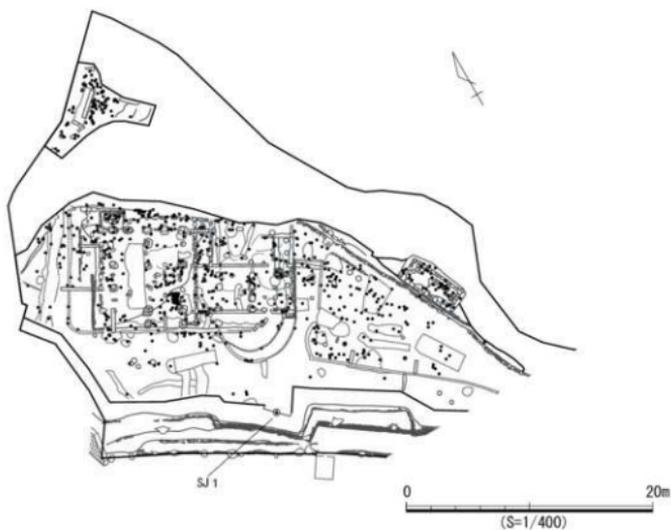


図66 正傳寺跡遺物分布状況

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系
- 愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史』別冊 窯業3 中世・近世 常滑系
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別冊 窯業1 古代 猿投系
- 糸貫町1981『糸貫町史 通史編』
- 宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
大野町教育委員会2011『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書条里編・解説編』（大野町文化財
調査報告書第6集）
- 岡本直久2019「江戸時代の下品野村窯業 一窯町D窯跡立会調査出土史料から」『瀬戸市埋蔵文化財
センター研究紀要』第21号、瀬戸市埋蔵文化財センター
- 小野木学2015「五輪塔（火輪）の製作工程の検討」、『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第1号
- 金子謙一1996「尾張・三河地方の近世瓦質煮炊具」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾
張大会実行委員会
- 金子謙一1996「瓦質煮炊具の分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員
会
- 金子謙一1996「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会
実行委員会
- 金子謙一1996「ホウロクの分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 金子謙一1996「尾張・三河地方の近世陶器煮炊具」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾
張大会実行委員会
- 金子謙一1996「近世陶器煮炊具の分類」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行
委員会
- 岐阜県教育委員会1980『岐阜県の近世社寺建築 一近世社寺建築緊急調査報告書一』
- 岐阜県文化財保護センター2015『上保本郷遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2016『上保本郷遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2017『上保本郷遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2020『御望A遺跡』
- 岐阜県本巣郡教育会1937『本巣郡志』上巻
- 岐阜県本巣郡糸貫町1969『糸貫町史』史料編
- 岐阜県本巣郡糸貫町1982『糸貫町史』通史編
- 岐阜市教育委員会1994『御望遺跡』
- 岐阜市教育委員会1996『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 小林謙一1991「江戸における近世瓦質・土師質焔炉について」『江戸在地系土器の研究』I、江戸在地
系土器研究会
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団2000『下西郷一本松遺跡』

- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所2007『船来山古墳群』(財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第16集)
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2003『江戸時代的美濃窯』
- 惟村忠志2004「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査の成果」『墓と葬送の江戸時代』、江戸遺跡研究会
- 瀬戸市教育委員会1990『尾呂一愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』
- 瀬戸市史編纂委員会1998『瀬戸市史』陶磁史篇六
- 瀬戸市歴史民俗資料館2002『大正2年のせともの屋』
- 高橋常義1982『糸貫川廢川史』、本巣郡総合開発公社
- 中野晴久1987「常滑焼き大甕の編年的研究ノート」『研究紀要』II、常滑市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1987「付篇 本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1988「本業焼の研究(2) 一赤津村・上水野村を中心に一」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VII、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1989「本業焼の研究(3) 一下品野村・下半田川村を中心に一」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIII、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター
- 村上隆2003『日本の美術 第443号 金工技術』
- 本巣市教育委員会2016『本巣市詳細遺跡分布調査報告書 改訂』
- 本巣市教育委員会2017『本巣市船来山古墳群総括報告書 本文編』



SB1全景(南東から)



SB1-基壇外装北西隅部(南西から)



SB1-基壇外装北東隅部(北東から)



SB1-基壇C-C'①(北西から)



SB1-基壇C-C'②(南東から)

図版2 遺構(2)



SB 1 - 基壇 C-C' ③(北西から)



SB 1 - 基壇 C-C' ④(南東から)



SB 1 - 基壇 H-H' ①(南西から)



SB 1 - 基壇 H-H' ②(南西から)



SB 1 - 基壇 H-H' ③(南西から)



SB 1 - 基壇 H-H' ④(南西から)



SB 1 - 基壇 H-H' ⑤(南西から)



SB 1 - 基壇 H-H' ⑥(南西から)



SB 1-基壇 H-H' ⑦(南西から)



SB 1-基壇 H-H' ⑧(北東から)



SB 1-基壇 H-H' ⑨(南西から)



SB 1-基壇 H-H' ⑩(北東から)



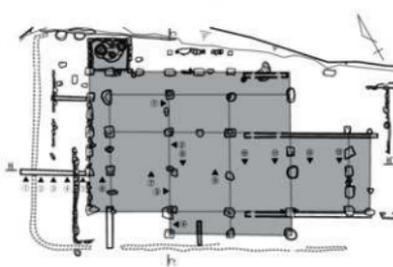
SB 1-基壇 H-H' ⑪(北東から)



SB 1-基壇 H-H' ⑫(北東から)



SB 1-基壇 H-H' ⑬(北東から)



基壇写真撮影方向

図版4 遺構(4)



SB 1-P1 土層断面 (東から)



SB 1-P2 土層断面 (南から)



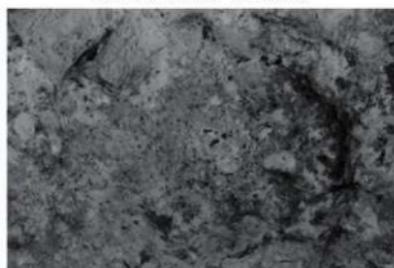
SB 1-P2 根石検出状況 (南西から)



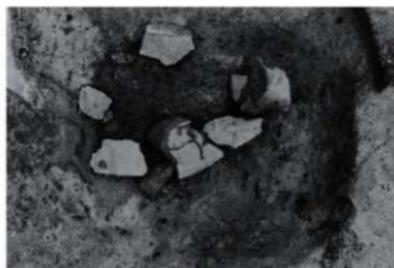
SB 1-P3 土層断面 (南西から)



SB 1-P4 土層断面 (西から)



SB 1-P4 完掘状況 (南西から)



SB 1-P5 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P6 土層断面 (西から)



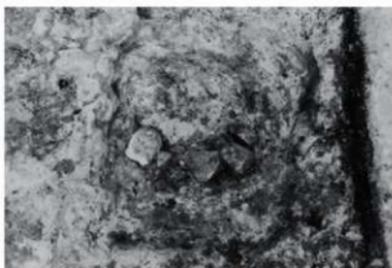
SB 1-P7 完掘状況 (北東から)



SB 1-P10 土層断面 (北西から)



SB 1-P10 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P10 礎石検出状況 (南東から)



SB 1-P12 完掘状況 (北西から)



SB 1-P16 土層断面 (東から)



SB 1-P16 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P16 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P17 土層断面 (北西から)



SB 1-P17 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P17 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P19 土層断面 (南から)



SB 1-P19 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P20 根石検出状況 (南から)



SB 1-P27 土層断面 (南から)



SB 1-P27 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P37 土層断面 (南から)



SB 1-P37 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P37 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P38 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P38 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P39 土層断面 (南西から)



SB 1-P39 礎石検出状況 (北西から)



SB 1-P39 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P40 礎石土層断面 (南西から)



SB 1-P40 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P42 礎石検出状況① (南西から)



SB 1-P42 礎石検出状況② (北西から)



SB 1-P42 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P43 礎石検出状況 (南西から)



SB 1-P43 根石検出状況 (南西から)



SB 1-P44 根石検出状況 (南西から)



基壇1 検出①(南西から)



基壇1 検出②(南から)



SJ1 土層断面 (北東から)



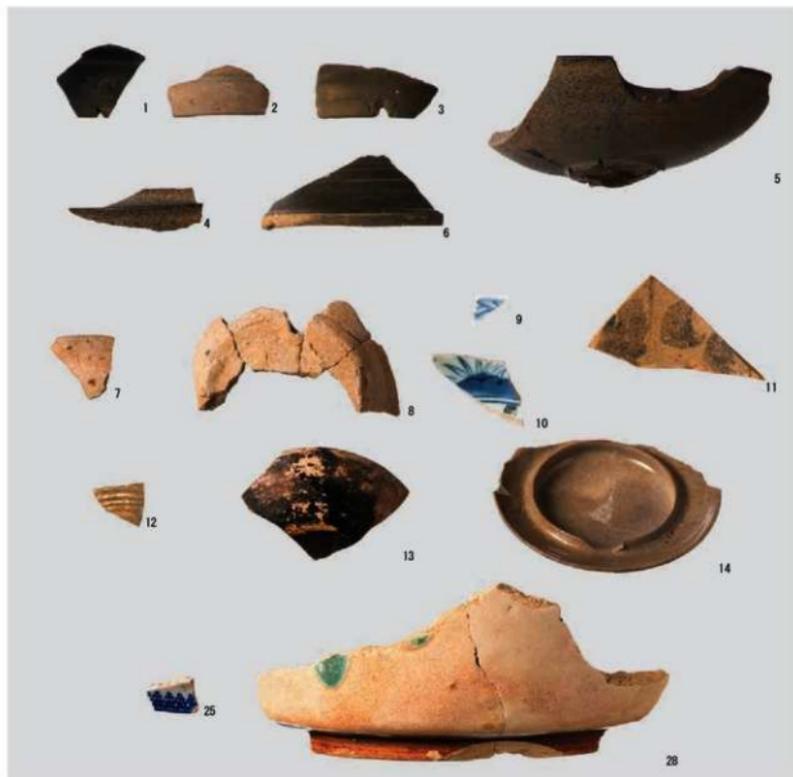
SD3B-B' 土層断面 (南東から)



SD3 完掘状況①(北西から)



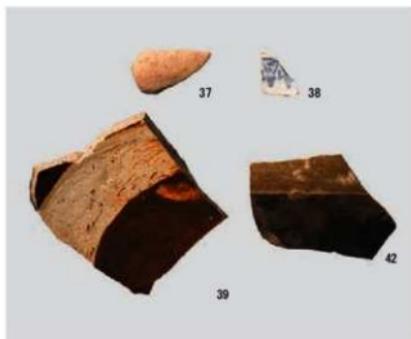
SD3 完掘状況②(西から)



SB 1 出土土器



基壇 1 出土土器



SD・SK 出土土器



SB 1-トイレ出土土器①



SB 1-トイレ出土土器②



SJ 1 出土土器



流土出土土器①



流土出土土器②



表土・流土出土土器



表土出土土器

72



撿乱A出土土器①

130



124

125

126

撿乱A出土土器②



110

111

114

112

115

116

117

128

撿乱 (110 ~ 117)・撿乱A (128) 出土土器①



撿乱 (118 ~ 120)・撿乱A (135 ~ 137, 139, 140) 出土土器②



撿乱A出土土器③



表土出土瓦①



表土出土瓦②

96



SB 1 出土金属製品①

24



攪乱出土石製品

100



SB 1 出土金属製品②

21

22



SB 1 出土金属製品③

表土・流土出土金属製品

23

107

108

109

101

102

103

104

105

106

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうでんじあと							
書名	正傳寺跡							
副書名								
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書							
シリーズ番号	第152集							
編著者名	磯貝龍志							
編集機関	岐阜県文化財保護センター							
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tn058-237-8550							
発行年月日	2021年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
しょうでんじあと 正傳寺跡	岐阜県 本巣市 上保	21218	11704	35° 28' 02"	136° 41' 10"	20160509 ～ 20160818	1,114.7 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
正傳寺跡	社寺跡	近世 近代	礎石建物	1棟	土師器	676点	近世から近代 にかけての寺 院跡を検出。	
			基壇	1基	須恵器	57点		
			溝状遺構	7条	山茶碗	23点		
			土器埋設遺構	1基	近世近代陶磁器	1819点		
			土坑	61基	瓦	26点		
			石垣・石列	6基	石製品	10点		
					金属製品	102点		
要約	<p>正傳寺は、18世紀後半に創建された臨済宗妙心寺派の寺院である。郡府山の南斜面に設けられた平坦面上に立地し、昭和51(1976)年に発生した土砂災害により廃絶した。発掘調査では、広縁の巡る本堂に庫裡が取り付く礎石建物1棟を確認した。この礎石建物は、近世から明治期に描かれた養虫山人作『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』の建物構造と近似することや、明治期に作成された『寺籍調査表』の内容から、創建期の本堂兼庫裡と判断した。また、本堂兼庫裡は大正期に基壇を拡張して建て替えられたことも判明した。</p>							

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第152集

正 傳 寺 跡

2021年3月5日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 もとすいんさつ株式会社